彼らの巣立ちを見守るために

ふぇいと！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第七までの特異点を修復し、残るは魔術王のいる時間神殿への突入のみとなったカルデア。

決戦までに残された時間は少ないが、万全を期して、戦力増強のために人類最後のマスター・藤丸立香は英霊召喚へとのぞむ。

これは、最も新しき人類の紡ぐ未来を見守る、最も古き人の悲しき物語。

【只今の進行具合】

いつになったら玉座にたどり着くのだろう（白目）

２０１７年７月１２日　誤解を招くのを防ぐため『原作未プレイ』のタグを消去。新たに『知識はＦＧＯ＆アニメのみ』を追加

目次

プロローグ
『アダム』 1
決戦前
『英霊分析』 12
『頼り、頼られるという事』 22
『浪漫』 36
『――勝てない。そして、勝てない』 43
『命を懸けて』 52
『寂しくても、辛くても、虚勢をはって』 66
冠位時間神殿ソロモン
『人生に生きる意味を、戦いに決意を』 77
『だから、また』 92
『そうして、最も古き人類は、貴方を見守るのです』 104
『救世の道程に光あれ』 119
『願いがあった』 132
『楽園の大嘘つき』 148
『そこにあって、そこにない。けれど確かに分かるもの』 163
【回想】『泣き虫／強がり　立香』 175
『心のままにわがままに』 183

プロローグ
『アダム』

――世界最初の人類というのは、如何なる人物であったのか。

一番有名なものを挙げれば、果実を口にして楽園から追放された例の夫婦であろうか。

名をアダム、イヴという二人は、創造主ヤハウェより禁じられていた良し悪しの木の実――いわゆる『知恵の果実』を食べ、それによって互いが裸であることに気付き、初めて恥じらいを覚えたとされている。

知恵を手に取り、感情を把握した彼らはヤハウェの怒り――あるいは恐れを買い、ついには楽園を追放された。

キリスト教の創世神話として名高いこの物語は、実のところイスラム教やユダヤ教の中でも語られているものである。

勿論、細部が異なっているのは確かなことだ。果実を口にした罪を許されたと語るものもあれば、そもそもアダムという存在の誕生方法が異なっている神話もある。

それでも結局のところ、『最初の人類』が『知恵の果実』を食べて『知恵に目覚め』、主神はそれを『罪』とした。その大まかな流れは然程変わりはしない。

――まぁ、三つの宗教は源流を共にしているという時点で、そうなるのは当然のことではあるのだが。

長々と説明はしてきたが、当初の話題に戻ろう。

すなわち、『最初の人類』とは如何なる人物であるのか。

科学的には猿の進化形体だとされ、神学的には神に造られた存在だとされるそれ。

古今東西の宗教では、祀られる神がいるのと同時に、最初の人類と

いう存在を定義し信仰の糧とすることが大いにあった。
すなわち――『最初の人類』とは無数に存在する影である。神の子、神の創造物、最初のゴーレム、あるいは猿の進化個体。
人類誕生から悠久の時が過ぎた西暦という時代において、その存在は常に不定形であり、確認の方法などあるわけもなく、よって実像を結ぶということは決してありえない。
――真実、原初の人というのは、たった一人しかいなかった筈だというのに。
私達人類は、その輪郭を捉えきれないままなのだ。

◆

「ドクター、今回はどんな英霊（ひと）が来るでしょうか」
『うーん、どうだろうか。特異点で縁を結んだ英霊たちは、粗方召喚済だろう？　それに触媒もない。となると、完全に立香ちゃんと合う英霊が呼び出される筈だけど…』
盾の英霊――マシュ・キリエライトが聞くと、白衣の男は冴えない顔で悩みながら、そう答えた。
ここは、カルデア内にある『召喚室』。英霊召喚システム『フェイト』の中枢であり、カルデアにおいては『シバ』や『カルデアス』のある区画に次いで重要な場所である。
「私と合う、か。想像もつかないなぁ。どんなひとが来ても気後れしちゃいそう」
『召喚した全ての英霊と、苦もなくコミュニケーションをとっている君が言うのかい…』
シュシュでまとめられたオレンジの尻尾（サイドテール）をフリフリと揺らしながら、少女はスピーカー越しに聞こえてくる呆れた声音に、ムッと頬を膨らませた。
少女――藤丸立香は魔術師である。それも、世界最後のマスターという役職持ちの。
人理焼却によって２０１６年以降の人類の営みが破壊され、継続不

可能になったこの世界。
唯一、通常時間軸から切り離され存在しているこの場所、『カルデア』では、日々人理修復の為の尽力が続けられている。
そして、そのカルデアの最大戦力である英霊を使い魔（サーヴァント）として指揮する役割にあるのが、彼女、藤丸立香だ。
年端も行かない少女であっても、人類の未来のため。彼女という存在はカルデア――ひいては人類にとって、最も大切に扱うべき者であり、しかし、酷使すべき存在だった。
事実、彼女は既に７つもの特異点を命をかけて修復した猛者である。
様々な時代、築かれた人理の中でも特に重要なターニングポイント。それぞれの時代の中で行われた激しい戦い。
共に戦った英霊もいれば、敵として剣を交えた英霊もいる。
命を落としそうになったことなど、幾らでも。呼吸を忘れたことなど数えきれず。
２０１６年という人理の最先端に生きるただの一般人だった立香にとって、血生臭い戦場も狂気的な虐殺も、決して慣れたものなどではなかった。
相対するだけでも足が震えるような人たちだった。
間違いなく、英霊と呼ぶに相応しい、壮絶な生涯と意志を背負った者達だった。
――そんな者達を前にしても、膝をつかなかったからこそ。
彼らは立香を認めて、力を貸してくれるのだ。
「いや、私のコミュ力が高いわけじゃないと思うんだけどなぁ。ただの一般人だよ？」
『君はそろそろ、自分が《逸般人》だと認識すべきだね』
Ｄｒ．ロマンは、自身の凄さを理解していない彼女に、ハァと溜息をついた。
既に７つもの特異点――突発的に観測される小さなものも合わせればそれ以上――を修復してきた猛者でありながら、マイペースさは出会った当初から変わっていないように思える。

そんな彼女に、ロマンを含めたカルデアの職員がどれだけ救われたのかわからない。
「なにそれ…まあいいや。さっさと終わらせちゃおうドクター。さっきからサーヴァントが来るの前提で話してるけど、実際ホントに来るかはわからないんだし。召喚してから考えよう、うん」
『うん、それがいいかもね。霊基再臨にも時間はかかる。早めに召喚するに越したことはない』
「おっけー。マシュ、盾プリーズ」
「はい先輩。騎士の円卓、カルデア魔力炉及び召喚システム・フェイトに接続します」
『よし、接続を確認。いつでもいいよ立香ちゃん』
英霊が集う――そんな性質をもつマシュの大盾、アーサー王物語で有名な騎士の円卓。
英霊召喚の補助を行う支援具としては最高峰のそれは、英霊召喚システム・フェイトを使うにあたって無くてはならない存在だ。
これがなければ呼び出せなかった英霊も、きっといただろう。
「それじゃあ、レッツ召喚！いけぇ、呼符先輩！」
威勢のいい掛け声と共に、立香は金色の板を盾に投げ込んだ。
高密度の魔力結晶をシステムが感知し、座への接続が行われる。召喚室はまばゆい光に包まれた。
回転する光輪は3本。立香は見事に、サーヴァントを引き当てた――のだが。
『これは…なんだ？　霊基不定形？　珍しいな…』
観測機器が示す波長がまるで荒波のように乱れているのを見て、ロマンは首を傾げる。
サーヴァントとは魔力の塊であるが、そこに個別性が存在する以上、その構成魔力にもある種のパターン――それこそ人間でいう『ＤＮＡ』のような――がある。
カルデアではそれを『霊基』と呼称し、主にサーヴァントの識別や座への帰還の防止に役立てている。
この霊基を観測し記録するのはカルデアでは最も重要なことの一

つで、召喚時には常に観測機器をまわしている。
サーヴァントというものを使い捨ての戦力として数えている余裕などない以上、消滅してもカルデアに帰還できるシステムの徹底は必要不可欠なのだ。
――もちろん、召喚の際『観測不能』という結果が出ることは多々ある。
例えば、神霊であるイシュタルやケツァルコアトルのときは機器の針が振り切れたし、アサシンクラスの召喚時には、気配遮断のスキルが仕事をしてまず機器が反応しないことが多い。
挙句の果てに、モードレッドやロビンフッドなどがもつ隠蔽系の宝具は、機器の観測を正確にさせてくれない。
だからこそ、今回のようなことも珍しくない――のだが。
『でも、何かが――どこかで、似たような波長を…』
安定しない数値に隠蔽系の宝具を疑うロマンだが、どこかが引っかかった。
同じ現象を、彼はどこかで――それも、聖杯探索（グランド・オーダー）中に見たことがあった気がしたのだ。
英霊（サーヴァント）の観測時ではない。もっと違う――そう、敵（エネミー）を観測している時か何かに。
「うっ…なんかドキドキしてきた」
「先輩、大丈夫ですか？　いつもどおりでやれば、きっと上手く行きます！」
魔力が英霊の形を成してきている。もうすぐ召喚が近いことを悟った少女二人は、高鳴る胸に不安と期待を感じた。
『…思い出した。これはまるで――っ』
瞬間、一際強い発光が召喚室を満たす。ブワッと急な風が吹き、立香は召喚サークルから顔を逸らした。
「――やぁ、君が僕のマスターかい？」

明るい高めの声が、そんな立香の耳に届いた。中性的な声だ。エルキドゥやシュヴァリエ・デオンのように、自身の性別を掴ませない。
立香とマシュは、声を合図にしたようにして、同時にゆっくりと顔を上げる。
そして、目の前の英霊に息を呑んだ。
「――――っ」
平凡だった。
顔立ちは英霊に至るほどの人物にしては幼く見える。整ってはいるが、眉目秀麗とまでは行かないぐらいのもの。
同時に背も低く、青年というより少年という呼び方が似合いそうなぐらいで、体つきもがっしりとはしていない。
着ているのは白くゆったりとしたローブ。髪は肩ほどの長さの山吹色で、所々ロールした癖っ毛だ。

その辺にいる西洋人に、それらしいローブを着せて、髪を染めただけのような。
そんな、どこにでもいる、平凡な少年にしか見えない。
――筈、なのに。
「うん？　どうした？なにか、気に触ることでも言ってしまったかな」
彼の一言一言が、脳に響くようにして止まらない。
彼に今すぐにでも抱きついて甘えたいという欲求と、跪いて平伏しなければという使命感。そんな相反した心情が湧き出て治まらない。
「せん、ぱい」
掠れた声に立香が隣を見やれば、マシュが辛うじて手を差し伸べてくれた。やっとのことで、立香はその手を取る。
繋いだ手の体温に、早まった鼓動と昂ぶった精神がようやく静まっていく。未だに落ち着かないが、話をするぐらいなら出来るだろう。
「…はぁ…ふぅ…ごめんなさい、待たせました」
「ふむ、いや気にしていないよ。恐らく僕のスキルか何かのせいだ。迷惑をかけたね」
「いえ、そんな…」

圧倒的な雰囲気を持つ存在にしては随分柔らかい態度に、立香は拍子抜けした。
見ただけで呼吸が乱れるような存在というのは、ギルガメッシュしかりオジマンディアスしかり、尊大な人ばかりかと思っていたからだ。
「それで、貴方は…見たところ、西洋の英霊とお見受けしますが…」
マシュは床に置かれた盾をさり気なく見ながら、目の前の英霊に聞いた。万が一には、敬愛する先輩を守れるように。
カルデアの召喚システム・フェイトは人理修復に賛成する英霊しか呼び寄せない仕組みにはなっているが、ゴルゴーンやクーフーリン・オルタなどそこのところ微妙なラインギリギリの存在を呼び寄せた前科がある。
結果的には彼らも協力的ではあったが、もしもの事態というのは考えて然るべきだ。立香は楽観主義的なところがあるので、なおさらに。
「――ふふっ、いや、微笑ましいね。ほら、盾を置くといい勇敢な少女。僕に君たちを害する気はないさ」
「――っ！…はい、わかりました」
「ん？、いや、盾は既に置いてるんじゃあ…」
相変わらずどこか抜けている立香の発言はさておいて。
あっさりと抱いている警戒心を見ぬかれたマシュは、目の前の彼が浮かべている友好的な笑顔を見て、盾を納めることにした。
これでもマシュは様々な英霊と共に戦ってきた身だ。立香までとは行かずとも、英霊（ひと）を見る目はある筈。それを信じる。
――それに、その経験豊富な立香（せんぱい）もいつものままですし。
杞憂だったと、マシュは内心で眼前の名も知らぬ英霊に謝罪した。
「では、改めて聞こうか。君が、僕のマスターかい？」
「は、はいっ！藤丸立香です、よろしくお願いします！」
「うん、よろしくねマスター」
「シールダー、マシュ・キリエライトです。先程はすみませんでした」
「気にしていないよ、むしろ実にいい主従関係だね。これから君の後

輩になる身としては、君の様子を見るに、ホワイトな就職先だったみたいでホッとしてる」
「こう、はい…ですか」
「ああ、少なくともマスターと契約したのは僕が後なんだからね。不愉快だった？」
「いえ！…でも、落ち着きません」
「ふふっ、なら君のことはマシュと呼ぼう。マシュ――うん、いい感じだ」
　自分の名前を噛みしめるようにして呟く少年に、なんとなく居心地の悪さを感じるマシュ。
　神霊ほどの圧倒的カリスマを醸し出しながらも、カラカラと屈託なく笑う様は、ちぐはぐで掴みどころを感じさせない。
　それなりに英霊というものの知識に自信はあったマシュだが、未だに何処の英霊かもわからないでいた。
『楽しそうなところ悪いけど、三人とも。確かめるべきことは沢山あるんだよ』
「あぁ、そうでしたねドクター。すっかり…」
　三人でなんとも言えない会話を交わしていたところに、ロマンのスピーカー越しの声が響く。
　確かめるべきこと――少年の正体を知る事――を催促してくるロマンに、マシュはハッとし、少年は驚いたようにスピーカーのほうを見やった。
「びっくり、他にもいたんだ。名前を聞いても？」
『ロマニ・アーキマンです。貴方は相当な英霊とお見受けしますが…魔力パターンが不安定なことに心当たりは？』
「あるともさ。恐らく僕の存在自体が問題なんだろう。《霊基》を記録したいというのは理解しているけど、どうやろうと安定はしない筈だ。残念ながらどうしようもないね」
『霊基についてご存知なのですか!?、今までの英霊で知っていたのはマーリンやギルガメッシュ王ぐらいだったのに…もしかして』
「いや、彼らのような見通す眼（千里眼）はもっていないよ。知っているのはス

キルの御蔭さ。いやでも、マーリンとは近いものがあるかな。僕も彼と一緒で、人理が焼却されたからこそ此処に来れたんだから」
マシュは、この発言に思考を回す。
つまり彼は、伝承にて今でも『生きている』と定義された存在なのだろうか。
カルデアに召喚されているマーリンやスカサハは、それぞれ伝承通りなら『生きていなければならない存在』であり、本来死んだ英雄を使い魔（サーヴァント）として現界させる聖杯戦争においては呼び出せない英霊である。
しかし、今回の聖杯探索（グランド・オーダー）では例外的に２０１６年以降の未来が消失していることから、マーリンがいる『理想郷（アヴァロン）』も、スカサハの『影の国』も、共に燃え尽きたと定義されているため、『死んでいなければならない存在』となった二人は召喚が可能になっているのだ。
つまり、彼も同じようにして伝承にて『生きていること』を約束――あるいは強制された英霊であるのかもしれない。
「…君の考えていることは、多分見当違いだと思うよ、マシュ」
「えっ、それでは」
「いや、場合によってはそんな伝承もあるのかなぁ？でも、今回の僕はきっとそうじゃない筈だし、やっぱり違うかな」
「だったら、貴方は何者なんですか？」
置いてけぼりだったマスター・立香は、ようやく話題に追いついたのか、自身の新しいサーヴァントに向かって尋ねる。
簡潔な質問だったが、質問された当の本人は、どこか悩むようにして返答した。
「――正直に言おう。僕には『真名』というものが存在していない」
「え…」
その言葉に立香は絶句する。真名のない英霊など聞いたことがなかったからだ。
近いところではロンドンでのナーサリー・ライムがそうなのかもしれないが…あれは、名前を付けた後に英霊へと昇化した存在の筈だ。英霊でありながら同時に名無しなどあるのだろうか。

「いや、正確には生前に名前が無かったんだ。そういう時代だったというか何というかね、僕には、マスターが持つ『藤丸立香』というような個人名はない」
『それでは、英霊としての真名はあると考えても？例えば、ハサン・サッバーハのように』
「うーん、まあ、そうなのかな。彼らともまた違うんだけどね。彼らは真名が一緒でも様々な人物が召喚されるけど、僕という英霊は僕以外に存在し得ない。どちらかといえば、彼らとは真逆に真名の方が定まらないというのが合ってる」
「うーん、つまり、どういうこと？」
「先輩…」
　全く理解できていない様子の立香に、呆れたように溜息をつくマシュ。そんな二人をみて、英霊はニコリと微笑んだ。
「少し迂遠過ぎたかな。つまりはだ、今から告げる名前はね、僕の本当の名前じゃないってことさ。そして僕には、召喚されるたびに名前が変わる可能性があると、それだけわかれば十分だよマスター」
「うん、それなら解った」
『それでは、聞かせてもらっても？』
「――ああ」

　ドクターの言葉に少し間を置いて、英霊は返答する。
　途端、空気が重苦しくなった気がした。
　立香は、頬にたらりと冷や汗が流れ出るのを感じる。
　圧倒的存在感。第七特異点でティアマトを前にしたときといい勝負かもしれない
　――しかし、不思議と恐怖は感じなかった。
　威厳がある、といえばいいのか。まるで、偉業を成した自身の祖先を前にしているような気分だった。
　とても凄い存在。なのに、親愛を感じる。自分から一番遠いのと同時に、一番近いかのような不思議な感覚を。

「では、幻滅させてもいけないからそれらしく」

柔らかな微笑みに、包み込むような母性を感じる。

「サーヴァント、起源者（アンセスター）」

幼気なのに自信に満ちた声に、頼りがいのある父性を感じる。

「――人理の始点、全ての人類の祖」

彼女に、皆が甘えたくなる、頼りたくなる。それは仕方のないことなのだ。

「真名を、『アダム』だ。よろしく頼むよ、マスター。あ、『イヴ』と呼んでくれても構わないけどね？」

――そんなもの、偉大なる父母を前にすれば、当たり前なのだから。

決戦前
『英霊分析』

寒い、寒い。
ああ、いつになったら僕はこの寒さに凍えずにすむのだろう。
――この前、偶然にも暖かい何かを創り出せた。
石と石を打ちかいでいるとたまに散る、太陽の色の『何か』を枯れた葉っぱにうまく落とすと、赤く光る暖かい何かが作れるんだ。
枯れた葉っぱとか枝を逐一おいてやらないと直ぐに消えちゃうような自分勝手な奴だけど、暖かいことには変わりないし、夜も少しは怖くなくなった。
しかも、あの上にお肉を置くと、生で食うよりずっと美味いんだ!!
良い発見だったと思う。これで雪が降っても大丈夫そう。
――けれど、寒くて仕方がない。
暖かい何かのそばに居ても、ちっとも凍えが止まらない。
ああ、今日も狩りに行かなくちゃ。昨日は鹿を狩ろうとしたけど、気づかれて逃げられてしまったから、食料がもう少ないんだ。
都合よく群れからはぐれた所にいたから、殺すには絶好の機会だったろうに、勿体無かった。
そういえば、あれはまだ子鹿だったみたいで、僕が怖かったのか、逃げた後に大きな鹿に体を擦りつけて甘えていた。
いいなぁ、暖かそうで。羨ましい。
一度仕留めた鹿相手にやってみたけど、血濡れでしかも生温くて、嫌悪感しか感じなかったし。
やっぱり暖かさを感じるには、他に何か特別な方法があるのかなぁ？

◆

『――アダムだって!?』
ロマンの絶叫が、召喚室に響き渡る。
立香やマシュも、声には出さないがそうとう驚いていた。絶句と言って差し支えない。
『アダム』
言わずと知れた原初の人間。知恵の果実を食べて楽園を追放された逸話はあまりにも有名で、その妻イヴと合わせて、始まりの人類と呼ばれる。
キリスト教の主神、創造神ヤハウェによって創りだされた存在であり、人間ではなく究極のゴーレムだとする説もあるが――少なくとも今回呼びだされた彼は、どうやら人間らしい。
「そう、アダム。僕は、同時にイヴでもあるわけだけど。そこまで驚くことかい？」
『そりゃあ、そうでしょう！アダムといえば人理のスタート地点、その存在だけで特異点に成り得る人物だ！なにせ彼が子孫を残さずに死んでしまえば、人理は続かないんだから！』
「大げさだよドクターさん。僕がいなくたって他にも代わりはいたさ。ただ、始まる時期が違うだけでね。それがわかっているから、魔術王も僕の時代に聖杯を送ろうとはしなかった」
「アダムって、あのアダム？」
「はい、先輩。あの有名なアダムです。原初の人類、始まりの人といえばこの名前が一番に出てくるのは間違いないかと」
様々な英霊と絆を育んできた立香でも、これは予想外過ぎたらしい。若干放心状態だ。
なるほど確かにアダムであるならば、この圧倒的威厳も、甘えたい頼りたいという謎の衝動も理解できる。
なにせ全ての人類の始まり。アダムであり、同時にイヴでもあるというのなら、父性・母性ともにカンスト状態である。
ギルガメッシュ王が最古の英霊だと思っていたのだが、まさかそれより古い英霊がいるとは。
世界には未知がいっぱいだと、立香は再認識した。

「アダムさんでありながらイヴさんである、ということは、貴方の性別はどうなっているのでしょうか」
「お察しの通りどちらともだよ。生前は男性だったと思うけどね。見た目も変わった今じゃ関係のないことだ」
「生きてる時と姿が違う？」
立香はアダムの発言に記憶を辿る。
生きてる時と容姿が変化して召喚される英霊というのは、実のところ少なくない。
筆頭としては、エリザベート＝バートリーであろうか。『無辜の怪物』というスキルを持つ彼女は、後世の者の風評によって『竜の娘』へと姿を変えている。
英霊にとって、後世の者の信仰というのは、霊基に影響を及ぼすほどに重要なものなのだ。
アダムも同じようにして、『無辜の怪物』かそれに近いスキルの影響を持っているのかもしれない。
『…ともかく、心強いです。最古の人類である貴方ならば、もっとも神秘の深い人間と言っても過言ではない。それだけでも頼りがいのある戦力だ』
「――そうかな。ならば、期待には応えなきゃね。父として母として、子供に失望はさせないさ」
「…うん。よろしくお願いします、アダムさん」
「ああ、よろしくだ、マスター」
がっちりと、握手を交わす。幼気で中性的な要望からは想像もつかないほどに、彼の手は硬く力強かった。

◆

――アダム召喚から3時間後、カルデア内ミーティングルーム――
「では、始めよう。今回の議題は、今朝召喚された英霊――本人が言うには『アダム』についてだ」
カルデアの頭脳の一人、万能の人レオナルド・ダヴィンチは、集まっ

た面々を見渡して開始を宣言した。
現在、アダムはカルデア内の構造を知るために、マシュ・立香に案内され施設を回っている。
故に、鬼のいぬ間に――という訳でもないが、本人の目の前でやるような話ではないので、今のうちにやっておくに越したことはない。
毎回恒例の、『英霊分析』
特異点にて敵対していた英霊や、皆の知らないうちにマスター（立香）が縁を結んでいた英霊など、そういった者がサーヴァントとして召喚された際に行われる会議。
召喚された英霊の危険性や、特性、弱点などを解析し、戦術的に適した運用法や裏切り時（もしもの際）の対処法を思案する場だ。
カルデア内に居るサーヴァント――特に、観察眼や知識に優れた英霊を主にしてメンバーが集められる。あるいは、その英霊と出身を同じくする者や縁が深い者も選ばれることがあるが。
今回は議題が『アダム』という都合上、常連であるメディアやロード・エルメロイの他、『無辜の怪物』のスキルを持つアンデルセンとエリザベート、そして『アダム神話』の源流キリスト教に理解があるジャンヌ・ダルクなどが集められた。
「ふむ、では私から。本人談によると『アダム』――私も、これは疑う余地が無いと考える。それ相応の雰囲気を纏っているし、さらに対峙した全ての英霊がその強大な父性・母性を感じ取っているからな」
「ええ、仮に『アダム』でなかったとしても、原初の人間であることには違いないと考えていいでしょうね。恐らく、『人』に対して絶対的に作用するカリスマのようなものを持っているのよ。事実、人ではないエウリュアレやアステリオスなんかは、影響を受けていなかったようだし」
まずは、煙草を吹かしながらエルメロイが発言。そしてメディアがそれを繋ぐ。
エルメロイは観察眼のスキルを付与されるほど人間観察力に優れている英霊、またメディアは神代の魔女でありその魔術的知識は誰よりも深い。その二人の鑑定である。信頼に足る内容だった。

「はん、原初の人間とはまた御大層なイロモノキャラが出てきたな。母でもあり父でもある人類の始まり？考えた阿呆は余程奴を持て余すだろうよ！古今東西、設定が多いキャラというのは逆に扱いにくいことこの上ないのだからな！」

その幼い容姿に似合わず、渋い声でズバズバと物を言うのはアンデルセン。作家であった身としては、アダムという存在（キャラ）に色々と思うことがあるらしい――が、今の所議題に全く関係は無い。

「やめなさいな童話作家。貴方の隣だって大概じゃない」

チラリとアンデルセンの横を見やりながら、メディアは重く溜め息をつく。その言葉に、アンデルセンはそれもそうだと皮肉った笑みを浮かべた。

「ハァ!?、それってアタシのこと言ってんの!?誰が扱いにくいのよ、だ・れ・が！」

キーキーとうるさく喚くのはエリザベート＝バートリー。貴族の娘であり吸血鬼であり竜の娘でありアイドルであり音痴でありハロウィンであり勇者である。

属性てんこ盛りも甚だしく、更には頻繁に登場しすぎるせいか、あのサーヴァントに優しいマスター立香からも、『何度も出てきて恥ずかしくないんですか!?』と有り難いお言葉を賜る程。

さすが、アダムなんかとは格が違った。

「まあまあ、話を進めましょう。時間は有限なのですから」

苦笑いを浮かべながらエリザベートを宥めるのは、聖女ジャンヌ・ダルク。性格上、他者の諍いを執り成すことの多い彼女は、この場においては不可欠の苦労人（ストッパー）だ。

――本人はそんなことを望んではいないだろうが。

「そうだ。じゃれ合うのもいいが、彼の解析は必要事項だし、急ぐべき案件だ。さっさと進めよう」

いつになく真剣なロマンの言葉に、エリザベートは不服そうにしながらも席に着く。ようやく会議の準備が整った。

「まず最初は、エリザベートも我慢できないだろうから、君を必要とする議題――『無辜の怪物』についての話を終わらせよう。レオナルド、

任せた」
　ロマンがダヴィンチを促す。いいとも、と返答したダヴィンチは、メンバーにそれぞれ1セットずつ紙の束を配った。
「さて、キミ達の前にあるのは、彼が召喚された際の会話ログ。それに彼の霊基測定の結果だが――どうだい、なにか気づくことは？」
「えーと…あら、霊基不定形？随分と珍しいのね。隠蔽系の宝具、あるいはスキルかしら」
「ふむ、生前とは容姿が変化したと言っているようだな。なるほど『無辜の怪物』スキル持ちを呼んだのは、これが理由か」
　メディアとエルメロイは目ざとく怪しい点を拾う。『人間観察』のスキルがあるアンデルセンも、言葉にはしないがどこを議題にすべきかは理解しているらしい。因みにエリザベートは首を傾げているが。
「そうだね、大きく分ければその2つだ。まぁ、後者はそこまで重要とも言えないが、前者のほうは解明しなければならない。本人曰く、隠蔽宝具・スキル共に所持していないらしいが、嘘である場合の警戒もすべきだ。原因不明の魔力パターンの乱れを放っておけはしないしね」
「――それに、気づいたことがあってね。これを見てくれ」
　ロマンが正面モニターに2つの画像を映し出す。どうやら霊基の計測結果のようだった。
「左はアダムとやらの結果らしいな。右はなんだ魔術師（メイガス）。配列や変化の仕方に共通点が見られるようだな？」
　アンデルセンが即座に見抜く。全く別物の霊基ではあるが、見比べてみれば共通性を感じられる。といっても、見比べた時に軽く既視感を覚える程度のものだが。
　あくまで別物の霊基でありながら――言うなればタイプが似ているのだ。
「――合成獣（キメラ）だよ」
「なに？もう一度言ってみろ魔術師（メイガス）」
「右の計測結果は特異点で戦闘してきた合成獣（キメラ）のものだ」
「――はっ！まさかアダムともあろう存在が、猫畜生（キメラ）と霊基タイプを

同じくするだと？こいつは傑作だな、実に哀れだ！まさに事実は本より奇なりということか！」
「傑作かどうかは置いておいて、隠蔽をしていないのなら不自然な霊基ね、これは。こんなもの、本当にキメラか――あるいは色々と入れられた存在か」
「どちらにしろ、不自然ならば解明すべきだろう。時間神殿で失敗する訳にはいかない。戦う前に勝つくらいの気概でいかねばならんのだ。不安要素など残しておられん」
　アンデルセンは我慢できないとばかりに笑い、メディアとエルメロイは真剣な眼を更に鋭いものにする。
「ああ、時間神殿に到達するまでの時間は少ない。彼が間違いなく強力なサーヴァントである以上、早期に彼の的確な運用法を創りださなければならないからね」
「それで、まず『無辜の怪物』スキル持ちのキミ達に質問だ。彼についてどう思うかね？正確には、彼の容姿の変化について、だ」
「――どうもこうもないわよ」
　ダヴィンチの質問に、エリザベートは少しばかり不機嫌な様子で答えた。おや？と周囲が思うのもつかの間、彼女はバンッとテーブルに手を叩きつける。
「あのねぇ！『無辜の怪物』は生前からの姿を怪物に変質させるある種の呪いなの！それに比べてアイツは何よ！寧ろ容姿は良くなってるみたいじゃない！ずるい、ずーるーいーー！」
　癇癪を起こした子供のように――いや、実際に癇癪を起こすエリザベートに、全員苦笑い。これなら同じエリザベートでもカーミラを連れてくればよかったと、ロマンは軽く後悔した。
「効果は似ていても『無辜の怪物』とは真逆のスキルだろうな。さしずめ『無根の英霊』とでも名付けるか？恐らく現界する際の名前によって姿を変えるのだろう。今回は『アダム』の姿というわけだ」
「『真名が定まらない』という言葉から察するに、彼は信仰によって英霊としての形をなした存在でしょうしね。事実、私の『真名看破』でも彼の真名は見抜けませんでしたから、アンデルセンさんの考えは的

を射ていると思います」
ジャンヌもアンデルセンの言葉に賛成の意を返す。
先ほどジャンヌはアダムとすれ違ったらしく、強かにも『真名看破』をはたらかせていたようだ。
――ともかく、彼の見た目の変化は『無辜の怪物』と真逆のスキル、仮称『無根の英霊』が仕事をした結果と決まったらしい。これで一つは終了である。
「じゃあ、2つめ――霊基の乱れについてだ」
「それこそ、『無根の英霊』とやらの効果ではないのですか？容姿を変質させるのであれば霊基も――」
ロマンの言葉にジャンヌがそう言うと、ちょうど正面に座るアンデルセンが呆れたように溜め息をつく。
「馬鹿者が、それでも救国の聖女か阿呆め。それなら何故、俺やそこの竜の娘は消滅後にカルデアに戻ってこれる？」
「馬鹿でも阿呆でもありません！…でもそうですね、霊基が登録されているからこそ此処に戻ってこられるのでした。つまり『無辜の怪物』で容姿が変質しても、霊基は変化しないということですか…」
「ええ、容姿の変化は決して霊基までは作用しないわ。もし作用してしまえば、二度と元の自分に戻れなくなるもの。それでは困るでしょう？――まあ、スカサハは夏に色々と霊基を弄ったりもしてたらしいけれど、あれだって霊基はちゃんと一つの形に定着するわ。不定形なんてありえない」
影の国の女王・神殺しのスカサハは、その膨大な知識と技術によって英霊の霊基を弄ることすら可能にする。つまり不定形の霊基も創りだせはする。
――が、それも不定形なのは弄っている間だけなのだ。どうあがいても、最終的には決まった形をとるのが現実。よってアダムには当てはまらない。
「となれば、本人が言っていたように、『存在そのもの』が不定形なのだろう。恐らく、彼の在り方に起因するのだろうが、これでは予測の建てようがないな」

観察眼に優れたエルメロイでも、頭を悩ませている様子の今回の議題。
不定形な霊基というのは、カルデアにとってはかなりの痛手である。なにせ折角の復活システムが使えない。
正真正銘一つの命、使い捨て状態になってしまう。アダムほどの存在にそれは勿体無かった。
「まぁ、次が最終特異点、泣いても笑ってもそれで最後だからね。カルデアも決戦中に英霊を復活させる余裕はほぼ無いだろう。だから、霊基の記録だってしなくともよくはあるんだが…」
ダヴィンチは煮え切らない様子で口にする。霊基の保存は、今までずっとやってきたことだ。それは、七つの時代に跨る聖杯探索（グランド・オーダー）という長い旅の途中で、戦力が脱落するのを防ぐため。
逆に言えば、最後の特異点だから、人類を救う上では霊基の記録など必要ないだろう。
とは解っていても。
人理修復の後、皆で笑い合う為に保険をかけておきたい――などと思ってしまうのは、立香の影響に違いないと、ダヴィンチは思った。
「…はぁ。まあ、これは後にしよう。話し合ったって答えは出ないままだろうからね。他にも話すべきことはある」
ダヴィンチの憂いを感じ取ったのか、溜め息をつきながらロマンは言う。
――どうにもままならない。
『アダム』
人理の始点、全ての人類の祖。
間違いなく一級の英霊であり、人理修復の大きな手助けとなるだろう。
時間神殿でもきっと大いに活躍してくれる筈だ。
――だからこそ、きっと生き残って欲しいと思ってしまう。
もしもの事が起こってしまえば。
死んでしまった彼の前で立香が泣き崩れる光景が、眼に浮かぶようだから。

――その後会議は続いたが、結局『アダム』の不定形な霊基の理由も、それを安定させる算段も全くわからないままだった。

『頼り、頼られるという事』

この森もそろそろ獲物が少なくなってきたかもしれない。
あれだけ見かけた鹿たちは移動してしまったようだし、冬を越えても食べられる物が木に実らない。
となると、生きていくには僕も移動するしかないのかも。
どこに行くかは迷っている。どっちに行こうが草原や森が同じように広がるだけで、何かが変わるとも思えないし、これなら鹿たちに着いて行けばよかったと軽く後悔していた。
近くの川に沿って行くのが一番いいのだろうけど、川の近くには冬眠を終えた危険な動物たちが、水を呑みに来る獲物を待っているから、この時期は危ない気がする。
うーん、どうしよう。悩むなぁ。
棒を立てて自然に倒れた方向に行こうか？僕が運に見放されてなければいい場所に辿り着けるだろうし。
――ああ、風が冷たい…寒い、寒い。
そうだ！太陽の登ってくる方向に行こう。たしか、あの大きい山の所からいつも登ってきていた筈。
あんなに暖かいものが生まれてくる方向なんだから、きっと此処よりは寒くなさそうだし、この考えも悪くないのかもしれない。
鹿の毛皮や肉を旨くしてくれるオレンジ色の『何か』より、きっと暖かいはずだ。だって、あんなに遠くにあるのに、あんなに暖かいのだから。
そうとなれば、準備準備。まだ蓄えていた食糧が残っている内に、急いで出発することにしよう。
――いい場所に着ければいいなぁ。

◆

「…う～…今のは…」
ピピピッと、やかましく響く電子音に意識を覚醒させた立香は、盛

大に跳ねた橙色の髪を撫でつけながらそう呟いた。
カルデアに来てから――より正確に言うならば、聖杯探索（グランド・オーダー）を開始してから毎日のように見る、不思議な夢。
それの内容は総じて、契約したサーヴァントの生前の記憶の追体験である。
サーヴァントとマスターの魔力の回路（パス）が繋がっていることによる、記憶の同調だとダヴィンチやロマンには言われているが、魔術の知識に疎い立香には正確なところは分からない。
本来そう簡単に見れるものでもなく、奇跡とまではいかなくともそれなりに珍しい現象だとか。
とはいっても、立香は本来自分と相手の1対1が基本であるサーヴァントとの契約を、何十人と並列して行っている。そりゃあ記憶の同調くらい頻繁に起こるというものだ。
数撃ちゃ当たる――というのは言葉が悪いが、つまりそういう事であった。
おそらく、今回見たのは、昨日召喚したアダムの記憶だろう。
古代の風景――それも、アダムの次に古い英霊ギルガメッシュの記憶で見たものより、もっと原始的で人間的な活動が感じられない、雄大な自然だった。
『アダム』って、確か楽園で暮らしてたんじゃあ…？あれが楽園とも思えないし」
昨晩マシュに軽く教えてもらった伝説との食い違いに、首を傾げる立香。夢でのアダムの様子を見るに、間違いなく100％自給自足の生活を送っているようだった。
楽園は果実の宝庫、飢えることなどありえない天上の世界だ。その日の食べるものに困るような、厳しい生活を送る理由など無いはずなのに。
「となると、追放された後の記憶…？いやいや、なら奥さんは何処に行ったの」
召喚されたアダムは同時にイヴでもあると言っていたが、少なくとも夢での彼は男であるようだった。ならば一緒にイヴが居なければ

おかしい。二人は共に楽園を追放されたはずなのだ。
「…つまり、ダヴィンチちゃん達の予想が正しかった、のかな」
ダヴィンチやロマンの推測によれば、昨日召喚された『彼女』は正確には『アダム』ではなく、恐らく『アダム』という名を与えられた『原初の人間』なのだろうということだった。
『無辜の怪物』というスキルが存在することからわかるように、死後の信仰というのは、英霊にとって大きな影響力を持つ。
『彼』という存在は、真実においてはただの人間であり、原始的で危険な世界の中を精一杯生き抜いただけの男だったのだろう。夢から見るにそれは間違いない。
しかし、後世の人間達が創りあげた『アダム』という偶像が多くの人間に知られ、信仰心を生んだ。本当はそんな人物は存在しなかったというのに。
それでも、『アダム』は大きな規模の信仰を集め続け、結果英霊へと至ったのだ。
――『彼』という『原初の人類』を依代として。
「……」
あまり気分の良いものではない推測に、立香ははねのけた筈の布団を引っ張り戻して、それに顔を埋めた。
この推理が正しいのなら、『彼』は決して良い気持ちではいられないだろう。
アダムとして召喚されたのならば、きっとアダムという存在が送ったとされている生涯の記憶もあるのだろう。
信仰を元として生まれた英霊とはそういうものだ。見に覚えが無い記憶であろうと、まるで自分のものであるかのように刷り込まれてしまう。
それはきっと、必死に生きた自分の人生を否定されるような、とても残酷な仕打ちであろう。
――ましてや、『アダム』は自分たち後世の者が創りだした偶像。
別に立香自身が創りだした訳ではない。アダムという存在を特別信仰していた訳でもない。

それでも、『彼』を歪めてしまった、その一端になってしまった――そんな責任を感じてしまうのは。
きっと、立香が優しすぎるせいなのだ。

◆

「先輩…せーんーぱーいー！」
「っ！…ごめん、マシュ。どうかした？」
「いえ、またぼうっとしてるようでしたから。種火集めに危険は少ないですが、それでも此処は戦闘区域です。あまり集中力を欠くのは…」
「…そうだね、ごめん」
心底心配していますというのが伝わってくる表情で言ってくるマシュに、立香は謝る。
此処は、カルデア外にある特殊空間、人理には全くの影響が無い小さな特異点――通称『種火の森』だ。
聖杯探索開始時に偶然観測されたこの特異点は、森1つ分と随分と小さな空間だけで構成されていて、危険なエネミーも殆ど存在しない。
しかし、此処には高密度の魔力結晶をもつ生物が多数生息しており、立香はこれまでにその結晶を求めて何度もこの森に足を運んできた。
魔力結晶、カルデアでは『種火』と呼ばれるそれは、サーヴァントの霊基を強化し全盛期により近づけてくれるいわゆる『強化アイテム』であり、成長しないサーヴァントが強くなるための唯一と言っていい手段だ。
カルデアの召喚システム・フェイトにおいて、召喚されたばかりのサーヴァントというのは、基本魔力的に希薄でぶっちゃけ弱い。
それはもう、生前には神を殺したと謳われるスカサハが、場合によってはローマの一般兵に殺される程のレベルで。
故に、召喚されたサーヴァントにはまず種火。というのがカルデア

の共通認識であった。
もちろん、今回のアダムも例外ではなく。今日は、彼の戦闘方法の検証もついでに行いながらのアダム専用種火の収集中である。
最終特異点に向けて引っ張られ続けているカルデア。決戦までの残り時間はあと僅かだ。
種火を早急に集めて戦力を補強するというのが、今のカルデアメンバーに唯一できることである。
「ふむ、彼(アダム)が気になる様子だが、なにかあったのかね」
種火を持つ腕の形をしたエネミーをサクッと切り刻みながら、紅い弓兵――エミヤが立香に聞いた。
彼がクイッと顎で示したのは、少し離れたところで種火集めをしているアダム。
見れば、戦闘能力の分析の為に孔明・スカサハなどに見守られながら戦う彼は、実にやりにくそうだ。
「うん、ちょっとね。エミヤはアダムをどう思った？」
「それは彼の戦闘能力についてかね。それとも、彼個人についてなのか？」
「どっちでも。言いたい方からでいいよ」
立香の言葉に、ふむ…と暫し考える様子を見せるエミヤ。
エミヤは、マスターである立香と生きた時代が重なっていながら英雄になったという、少しばかり特異な存在である。
故に、エミヤと立香は同時代・同郷の人であるから価値観が近く、話もしやすい。
過去にエミヤが聖杯戦争のマスターだったということもあって、立香にとってエミヤとは、意見を求めやすいちょっとした師匠のような人なのだ。
アダムに関して、今を生きている自分たちとは違う、先立ちの意見を聞いておきたい。それが立香の思いだった。
「…戦闘能力に関しては、『騎士』でも『戦士』でも無いといったところか」
「うぅ？ちょっとよくわからない」

「『騎士』はアーサー王のような誇りや礼儀を重んじるタイプ、『戦士』はエミヤさんのような勝利を貪欲に求めるタイプ――でしょうか」
抽象的表現に首を傾げる立香を、マシュが横からフォローする。うむ、とエミヤが肯定した。
「カルデアにいる戦闘特化型のサーヴァントは、大きく分けてその二つのタイプだ。円卓の騎士を始めとする騎士型、私やクーフーリン等を始めとする戦士型。もちろん、これだけではなく例外は居る――アダムはそれという訳だ」
「ふぅん…」
立香はもう一度アダムの方を見る。
『起源者(アンセスター)』というエクストラクラスで現界した彼は、アーチャーやセイバーのように分かりやすい武器を持ってはいない。
エクストラクラスとはそういうもので、かつて夢で会った巌窟王ことエドモン・ダンテスは、謎の光線を使って戦っていた。
アダムの場合は、『炎』。本人曰く、人類初めて起こされたといわれる『原初の火』であり、彼の宝具の一つである。真名解放をすれば特殊な効果もあるらしいが、基本は少しばかり神秘を帯びた炎だ。
宝具について話した時にネロがちょっとした癇癪を起こした――ネロの宝剣は『原初の火(アエストウス・エストウス)』という名を持つため――という一幕が、立香的には印象的である。
――話を戻すと、起源者(アンセスター)たる彼の攻撃手段は、炎。攻撃方法としては敵を焼きつくす以外に無い。
実際、今も種火アーム(仮)を焼きつくして――
「あれ、あまり効いてない?」
見ると、アダムも一生懸命炎で炙ってはいるのだが、あまりダメージにはなっていない様子だった。
「そうですね…エネミーが種火を生成する存在である以上、炎に耐性があるというのは必然ですが…」
「彼の炎は、どうやら攻撃に向いていないらしい。彼によれば、味方の支援や敵の妨害の方に役立つようだ」
「…てことは、孔明センセーとかマーリンみたいに、支援特化のサー

ヴァントってこと？」
　エミヤの零した情報に、立香はそう予測する。
　サーヴァントの中には、キャスター陣営を筆頭とするサポートに優れた英霊も多い。
　立香が挙げたエルメロイやマーリンはもちろん、童話作家アンデルセンや聖女ジャンヌ・ダルクなどもそうだ。
　エミヤが言うにアダムの宝具は支援特化。ならば彼らのようなサポート系のサーヴァントであるのだろうかと思った立香だったのだが。
「――いや、それがそう単純でもないのだよ」
　説明は難しいのだがね…とエミヤは苦笑する。立香は先を促した。
「彼の動き…体捌きと言うべきか。間違いなく達人のそれだよ。スカサハ女史も李書文に迫ると太鼓判を押していた」
「スカサハさんが認めるというのは、相当なことなのではないでしょうか…」
「スカサハ（姐さん）が対等に扱ってるのは、李書文センセー含めて何人かしかいないしね。その他の皆は『弟子』の認識みたいだし」
　エミヤの言葉に、立香とマシュは軽く驚いた。
　あらゆる武を一流にまで極めているスカサハは、神殺しという英雄としての格も相まって、戦闘力という意味では右に出る者が殆どいない。
　故に、例え生前に偉業を成し遂げた英霊とて、スカサハにしてみればまだまだひよっ子も良い所――だったりするのだ。
　武の領域でスカサハに認められているのは、立香も挙げた李書文、ギリシャの大英雄ヘラクレス、施しの英雄カルナ辺りだろうか。
　なんにしろ、少ないことに違いはない。
「スカサハは君も知る通りの『死にたがり』だ。愛弟子のクーフーリンによれば、自分の命を奪うに近い人間ほど試合いたくなるらしい。となれば、彼女がアレだけウズウズしている所を見るに、アダムは相当強いのだろう」
「うわぁ、ホントだ。待ちきれない感じがひしひしと…」

目を向ければ、平時より見開かれた獰猛な瞳を爛々と輝かせているスカサハが居る。
相変わらずの無表情でアダムの戦いぶりを見ているように見えるが、その実背後から狙っているのは確定だ。
アダムも相当やりにくそうで、チラチラと後ろを気にしている。彼も古代を生き抜いてきた身だからか、殺気には敏感らしい。
「あれでは、アダムさんはレイシフト終了後、即トレーニングルーム行きになりそうですね…助けた方が良いのでしょうけど…」
「可哀想だけど、これって仕方のないことなので。アダムには諦めてもらおう…南無…」
スカサハの戦闘狂が時々バーサクかかってんじゃレベルで酷いのは、もはやカルデア共通認識である。彼女の稽古は試合はよっぽどの事がなければ邪魔してはいけない。
なんせ、スカサハはカルデアで怒らせてはいけないサーヴァント五指に入るのだ。…もちろん一位は清姫だが。

「…まぁ、戦闘力についてはこんなものだ。次は内面の方にいこうか」
「あ、そうだね。お願い」
エミヤも同情するような目でアダムを見ていたが、流石に助けるような無謀な真似はしないらしい。正義の味方にも蛮勇と勇敢の分別はあるのだ。
兎にも角にも、次の話。アダムの性格、内面についてである。
「見る限り、やはり『秩序・善』は伊達ではない。一本筋の通った強い意志も、他人を慮る気持ちも、困難に立ち向かう勇敢さも、まさに『英雄』の模範といった感じだ」
「この短期間によくそこまで…」
エミヤがマスターとしてもサーヴァントとしても参加してきた、数多の聖杯戦争。
そこで様々な英霊と出会ってきたからなのか、エミヤは『観察眼』のようなスキルを持っている訳ではなくとも、人を見る目に優れている。

こういう所も、百を超える英霊と契約している立香をして、『何かあれば、取り敢えずエミヤ』と言わしめる所以である。
…トップクラスの女難の相だけは、如何ともしがたいのだが。
「――なに、人を見る目はあるつもりでね。ともかく、後は特に言うこともないが…ああ、原初の人間であるからか、私達後世の者を子供のように扱っている節があるというのは、一応言っておこう」
「子供のように、ですか」
「確かに、頼光ママほど酷くはないけど、私達を親の目線から見てる感じはするね」
こう、なんていうか、暖かい目みたいな。と立香はエミヤの言葉に頷いた。
昨日出会ったばかりの英霊であるが、一癖も二癖もある英霊という存在の中にあって、アダムは相当な常識人だ。
ジャンヌ・ダルクやエレナ・ブラヴァツキーなどと同じ、数少ない良識のあるサーヴァントである。
それでいて、親の様な包容力と頼りがいを滲ませるものだから、普段サーヴァント達に振り回されているカルデアの職員は、今彼にぞっこんと言ってもいい。
なんせ、頼光と出会った時ちょっと微笑んだだけで、あの頼光が『は、母上？』等と言い出す始末なのだ。狂化ＥＸを素に戻すとは、流石原初の人間は伊達ではない。
性別的な特性上、デオンなどと同じで男女どちらにも寄らない容姿であり、母性を感じるような部分（胸）は皆無なのだが、ブーディカやマタ・ハリが敗北感を感じる程の包容力であった。
立香もマシュも思っていることだが、あれは一種の洗脳である。危険だ。堕落してしまう。
ニコリと微笑まれるだけでアレなのだ。もし抱きつかれたり膝枕されたりすれば、一体どうなってしまうのか。
「頼光ほど酷ければ弊害がでるが、アダムのアレは許容範囲だろう。自分の力の異常さも心得ているようだからな。洗脳のレベルにはならないよう、気を遣っているらしい」

「距離感あるもんね。昨日出会ったばかりだからっていうなら、それまでだけどさ」
「人と触れ合ったのも、恐らく召喚室で交わした握手が最後です。アダムさんはそれ以降、意図的に人との接触を避けているような気がします」
マシュは彼の召喚からこれまでを振り返って、そう告げた。
立香とマシュが寝ていた時以外はずっと彼と一緒にいたが、彼はどうにも他人と距離を取りたがる。
パーソナルスペース的な考えがあるのではなく、自身の魅了が立香達にかかってしまうのを恐れているようだった。
「――なんにしろ、自身の力を正確に把握しているというのは、仲間を不慮に傷つけない為にも、敵を効率よく倒すにも重要なことだ。それを持ち得ているのは、喜ばしいことだろう」
「それは、そうだけど」
立香はエミヤに暗い返事を返す。
彼が本物の『アダム』ではないのだと知った朝から、立香の中では、昨日まで何でもなかった彼との間の距離感に、急な虚しさを感じている。
こうしてサーヴァントとして召喚に応じ、人理修復を手伝ってくれる以上、彼もまた英霊としての自分を嫌ってはいないのだろう。
それでも果たして、彼が自身の死後を歪められたことに恨みを持っていないかといえば、そうとは限らないのだ。
「せんぱい？」
「ふむ…」
暗い顔をしている立香に、マシュとエミヤはどう声をかけるか決めかねている様子だ。
立香が何を悩んでいるのかはわからないが、優しい彼女のことだから、きっと他人の事を思っての悩み。
彼女に救われた英霊はたくさんいて、そんな彼女を支えてあげたいと思う英霊も多くいる。
それでも、彼女はそういう事で英霊（自分たち）をあまり頼ってくれないから、

むず痒く感じることが多くあった。
今回も同じように――と、マシュ達は思ったのだが。
「マスター…マスター？」
――と、済んだ声が立香の耳に響いた。
「…あ、アダム…さん…」
「そうだよ、アダムさ。暗い顔をしているね、マスター。もう少しで種火が目標数集まるっていうのに、そんな様子では心配だ。これは、帰らないといけないかな？」
「…大丈夫！、全然いけます！」
「…ふーん…」
空元気で虚勢を張る立香に、じとりとした眼でアダムは応える。
うっ、と立香の息が詰まった。
「…そうだね…まずは敬語を辞めるといい、マスター」
「え、」
唐突な言葉に立香は間抜けな声を出す。
「だから、敬語さ。マシュみたいに誰に対してもそうならまだしも、君のは堅苦しくてあまり好きじゃなくてね。」
「あ、はい…うん…」
アダムの言葉に、距離をとっていたのは自分もだったかと立香は思い至る。
ギルガメッシュやオジマンディアスなど、一部の英霊達に対しては敬語を使っている立香。それは相手がそっちの言葉遣いを好んでいるからというのが殆どだが――
――今回に限っては、アダムが余りに強大なオーラを纏っていたから、つい使ってしまっていた。
「そう、それでいい。マスターはそっちのほうがらしいから」
ニコリと、微笑まれる。
立香はかああっと顔が熱くなるのを感じた。恋慕や羞恥の心ではない。これは純粋に親愛――つい親に甘えたいと思ってしまう、そん

な心の昂ぶりだ。
「さて、君が何を悩んでいるのかはおおよそ分かっているけれど、その上で敢えて言わせてもらうとすればだ」
「…うん」
「僕にはね、今の僕であっても、前の僕であっても、一つだけ変わっていないことがあるんだ」
　それこそ、『無根の英霊』とやらがあっても無くても――とアダムは指をピンと一つ立てて、カラカラと笑う。わかってないなぁと、子供を諭すようにして。
「僕はね、子供が好きだ」
「…ロリコン？」
「もちろん違うよ、親愛的な意味でだ。冗談を言えるくらいには持ち直したようでなによりだね」
　言わなきゃいけない気がして、ついかなり失礼なことを口走ったという自覚は立香にもあったが、彼は軽く流して微笑む。その笑顔がとても綺麗だった。
「僕はね、君たち子供が好きなんだよ。英霊のように既に死んでしまっている子も、今を必死に生きている子も」
　立香だけではなく、マシュやエミヤ――果てはエルメロイやスカサハまでもを見渡しながら彼は言う。底抜けに明るく、笑いながら。
「この儂を子供と呼ぶのか、貴様は。人生初めての体験だぞ」
　スカサハが驚いたといったふうに言う。
　だろうね、とアダムは返した。
「でも、君にもわかるはずさ。君にとって殆どの人間がひよっ子も同然なように、僕にとっての君もそうだっただけの話なんだ」
　だから――と、スカサハに向いていた体を、もう一度立香へと向けて彼は言う。
「マスターも、俯くのはやめてくれ。僕はね、生きている時も死んだ後も、君たちから頼られる事こそが生き甲斐なんだ。何故って、君たちを愛しているからね」
　だから、頼ってくれないのなら、ここにいる意味がない――なんて。

と彼は一瞬だけ寂しげに笑った。
彼の初めて見せた表情に、立香は酷く心を揺さぶられた。彼の今の表情が、彼の奥底の本心に思えたから。放っておいてはいけないと、そう思ったから。
「――『生き甲斐』なんて言って、死んでる癖に」
立香の口から出てくる言葉は、そんな素っ気ないものだった。
大真面目に親に『愛している』なんて言われた時みたいに、気恥ずかしくて、こんな事しか言えなかった。
「…言葉の綾さ、多めに見てくれ」
それでも、彼は笑ってくれた。それでいい、とそう言うようにして。
「――さて、じゃあ残りの種火を集めよう、立香。今の君なら、大丈夫だろう？」
「……！……うん！」
名前を呼んでくれただけで、立香は、きっとまだまだ頑張れる気がした。
魔術王だって怖くない。彼が後ろで見守ってくれるのなら――なんて、まだ昨日会ったばかりだというのに。

森の奥に歩いて行く二人を見ながら、マシュとエミヤは顔を見合わせる。そして、安心したように微笑んだ。
立香が頼りにする存在。それがまた増えてくれて本当に良かったと、そう思いながら。
戦力ではスカサハやヘラクレス。知識ではメディア、戦略はエルメロイ。その他の事はダヴィンチやエミヤに。心の癒やしが欲しければ、マシュを。
頼る事を知らないマスターではなかったけれど、それでも、『悩みを打ち明ける存在』だけはいなかった彼女だから。
アダムなら、きっとそうなってくれるのではないかと思える。
今も本物の親子のように歩く二人を見て、スカサハですら頬を緩めた。
最終特異点、時間神殿を攻略するまでの短い期間かもしれない。

けれど、そんな小さな出会いが、きっと立香にとってかけがえのない思い出になることを確信して。

『浪漫』

出発してから、何日がたったのだろうか。
道中、幸運にも獣に襲われることはなく、食料も飢えない程度には見つけられた。いい水場も見つけたし、此処を取り敢えずの拠点にしようかと思う。
近くに大きな無花果（いちじく）の木がいっぱいあって、それも決め手の一つ。秋になったら実るだろうし、それを気長に待とう。
此処は冬が明けたばかりだというのに、雪が残っていない不思議な場所だ。大して暖かいとも感じないけれど――なにか不思議な力が働いているのかもしれない。
僕がいるのは、見つけられたのが運命に感じられるぐらい木々で巧妙に隠されていた小さな湖の近く。
五感が冴えている動物たちでさえ見つけるのは困難なのか、此処にやってくる獣は数えるぐらいで、とても静かだ。
狩りの事を考えるなら動物が来ない水場はどうかのかと思うけど、寝床とする分にはこれ以上ない秘境。
近くには此処とは逆に動物たちでごった返している水場があるらしくて、それもこの湖が知られていない原因だろう。
そして勿論、そっちの水場では狩りがしやすい。つまり、二つの『いい水場』を同時に見つけることができたということ。やっぱり僕は運がいい。
――でも、寒いのは変わらない。
もうすぐ春になるというのに、やっぱり凍えはおさまらなくて。
体の芯から冷えるような心地。冬みたいに身震いしちゃうわけじゃないんだけど、この感じは『寒い』と表現するのが一番合っている気がしたんだ。
――ああ、暗くなってきた。取り敢えず、薪を集めよう。
光の無い夜は怖い。寝ている間は無防備なんだから、その間に襲わ

れては堪らないんだ。
僕より強い動物たちだって、寝るときは皆で寄り添って――あるいは、見張りを立てて寝る。
でも、僕には彼らのような野生の勘も、鋭敏な五感も、寄り添ってくれる仲間も居ないんだから仕方がない。
今は木を使って作るこの『光』が唯一の頼りだ。動物たちはこの『光』を嫌う。非力な僕が持てるただ一つの武器。
子鹿にだって蹴られたら死にかねない僕だ。
…本当に非力。僕以外に僕と同じような生き物を見かけないのは、きっとそれが原因なのかもしれない。
実力のない存在はこの世界で生きていけない。僕には鹿たちのように長時間走る力もなければ、狼のような鋭い牙も、熊のような圧倒的腕力もない。
つまりは、劣等種。ともすれば僕は、最弱の種族最後の生き残りなのかもしれない。
――ああ、寒い。
くるりと鹿の毛皮に包まる。そのまま草の上に横になった。
願わくば、今日も平穏な眠りを。
次の朝日を見ることが出来ますように。

◆

「うん、いい感じだ。それにしても不思議だね、英霊でありながら成長するっていうのはさ」
カルデア内の霊基修復室――通称『合成部屋』で、アダムは種火の魔力を霊基に注入されながら言った。
現在、種火集めから帰ってきた日の夕方。
とは言っても、カルデアは世界の狭間を航行する存在であるが故に夕日こそ拝めず、なんなら時間すら曖昧なのだが――取り敢えず、人理焼却前に則って時間のカウントを行っている。
なんにせよ、今は夕方なのだ。カルデアでは、マスター達が食事や

入浴をするこの時間帯に種火による英霊の強化や霊基再臨を行っていて、今はアダムが霊基の強化を受けていた。
『成長――とは少し違うと思いますよ、Ｍｒ．アダム。ご存知でしょうが、英霊は成長しない。貴方もそれは同様です。今やっているのは、貴方が持つ本来の霊基の復元に過ぎませんから』
「わかってないなぁ、ドクター。『復元』よりも『成長』のほうが浪漫があるだろう？それでよく『ロマン』を名乗れるね」
はぁ…と、心底呆れた様子で溜息をつくアダム。いつも人に優しい彼の辛辣な言葉に、ロマンはウッと唸った。
『…おっと、まさか今回も貶されるのか？『人』を愛しているアダムなら優しく接してくれると思ったのに…！』
「聞こえてるよ」
小声で呟くロマンだが、高性能なカルデア製マイクは些細な音すらも見逃さなかった。結局はアダムに駄々漏れである。
「…まぁ、貶されてしまうのは諦めるべきだね。少なくとも理性を携える英霊であるならば、君に強く当たって仕舞うのは仕方のないことなんだ」
『えと、それは…つまり？』
よく分かってない様子のロマン。まあ、いきなり『お前がぞんざいに扱われるのはそういう運命だからだ』なんて言われて納得できる方が危ないので、当然ではある。
「英霊とは即ち『死んだ英雄』。生前に正義を成したか悪を成したかは様々だけど、此処に喚ばれている以上、人理修復を望んでいるのには違いないだろう？」
『…ええ、カルデアの召喚システム・フェイトは、基本的に人理修復に賛成する英霊のみを選出しますから』
「ま、だからだよ」
ズバリそれ、と強調してアダムが続ける。
「――だって、問題の解決法は『黒幕を倒すこと』だけなんだ。君の正体に気づいても気づかなくても、生前に英雄として培った勘は『コイツが怪しい』ってうるさく鳴るのさ」

だって、眼の前に元凶が居るのだから。全くの別人であってもね――と、アダムは締めくくった。
『――っ――いつから』
「召喚された直後――いや、座にいる時からかな。別に、君は上手く隠してたと思うよ？実際、ギルガメッシュやマーリンも直ぐに気づけた訳ではないようだったし。ただ――」
――ちょっとばかり、相手が悪かったね。とアダムは告げた。
「昔はどうだったのか知らないけど、今の君は『人』だから…知りたくなくても僕は知らされてしまうんだよね」
『――どうするおつもりで？』
別室で待機しているから見えはしないが、ロマンの強張った顔が手に取るようにわかったアダム。
暴露されるかもしれない――そんなロマンの危惧を、しかしアダムは一笑して否定した。
「まさか、どうもしないさ。先に挙げた英霊達も黙っているんだ。僕とは段違いに思慮深い英霊達だから、彼らが言わないならそれが正しいんだと思うし」
『そう、ですか…』
「それに、大事な決戦前だ。不必要に立香たちの心を乱すのは良くないだろうしね」
ただ、と。アダムは天井に取り付けられたカメラの方を見やる。画面越しに交差した視線に、ロマンはたじろいだ。
「後悔は残すべきではないよ、ロマニ。次の戦場は文字通りの地獄。特異点全てを越えてきた立香でも、確実に生き残れるかと問われれば否だ。伝えたいことがあってもね、伝える相手が居なくては意味がないだろう？」
何処か悲しげな表情でアダムは言う。その表情は、今まで見せてきた『アダム』としてのものではなく、何処か見た目相応の少年のようにロマンは思った。
『…ええ、その通りですね』
諭すようにして言うアダムの言葉。表情から『彼』の実体験なのか

もしれない、と当たりをつけたロマンは、神妙に頷く。
よし、ならいいんだ――と、アダムは嬉しそうに笑った。
「…さて、そろそろ行こうかな。他の英霊（子）たちとも出来るだけ話しておきたいんだ」
『――あ、一つだけいいでしょうか』
ぐっと背伸びをして立ち去ろうとしたアダムに、ロマンが急に呼びかける。えぇー、と言いながらもアダムは立ち止まった。
「なんだい？」
『何故、僕の事をご存知だったのですか？霊基に関してもそうでしたが、どうやって知ったのかが分からなくて…』
「――ああ、そのことね」
出口に向けていた体を翻して、アダムは再びカメラへと向き直る。再びロマンと視線が交差した。
「スキルさ。『起源者（アンセスター）』たるサーヴァントに、聖杯から与えられるクラススキル。自分の子孫に関しての全てを知り、彼らの持つ技術・知識全てを会得できる――という風なね」
『えーと、はい？』
「悪い言い方をすれば、子孫の打ち立てた功績の横領さ。君の正体を知っていたのは、僕が君の祖先だとされているから。霊基について知っていたのも、その理論を組んだ研究者たちが僕の子孫だとされているから」
何でもない風にアダムは言うが、それはどんなチートスキルなのだとロマンは考える。
スキルでありながら、騎士王の『全て遠き理想郷（アヴァロン）』やヘラクレスの『十二の試練』にも匹敵する性能だろう。
そんな――人類全ての技巧の会得だなんて。『人』という枠組みにはカルデアにいるような万夫不当の英霊達だっているのに。
そんな彼らの振るえる力を――その全てを扱えるなどと。文武共に敵う者などいないだろう。
『…それはつまり、武術も知識も人間の作ったものならば全てを体得できるということですか？』

「ああ。というか、召喚された時点でもう会得していると言った方が正しいのかな。君が思っているように、とても便利なスキルだろうが――残念ながら、僕に限ってはそうじゃなくてね」
申し訳ないね――と今にも言いそうな顔で、アダムは苦笑する。ロマンはそんな彼に首を傾げた。
『それは、何故？貴方の口振りから『子孫』にしか影響が及ばないのは理解していますが、それこそ貴方は始まりの人です。歴史上全ての人類の能力を行使可能なのでは？』
「確かに、このスキルはそういう効果だし、ちゃんと働いてくれてるさ。問題は別にあるんだよね…」
ポリポリと頬を書きながら言いにくそうにアダムは言う。そんな彼に、ロマンは益々首を傾げた。
『――？』
「まあ、つまりは――おっと、誰か来たみたいだ」
今まさに話しだそうと言うところで、アダムはふと気づいたように言った。ロマンがその言葉を聞き確認すると、霊基修復室の前に３つの魔力反応がある。ロマンはモニターの映像を霊基修復室前の物に切り替えた。

『――ええい、鬱陶しいぞ立香。無駄に令呪まで使って、お前は今が決戦前だと本当に分かっているのか？』
『それは、スカサハが「アダム（奴）とちょっとばかり殺し合ってくる」とか言い出したからでしょうが！ただの模擬戦だったら別に止めなかったのに！』
『スカサハさん、私も先輩に賛成です。それに、失礼ながら「決戦前だと本当にわかっているのか」とは私達のセリフだと思いますよ!!』
『たわけ、本気でない戦いになんの意味がある。殺しあってこそだろう』
『これだからカルデア１のケルト脳は！クーフーリン（オルタ）［オルタ］の方がまだ常識的だよ！』

ちょっとよくわからない状態になっていた。
『何やってるんだ彼女たちは…』
ロマンは頭を抱える。
スカサハの死にたがりは把握していたが、まさかこのタイミングでこうなるとは。
流石、カルデア内で本当は狂化(バーサク)持ってるんじゃないかと裏で囁かれているランサーは格が違った。こと強敵との戦いにおいては血の気が多過ぎるのだ彼女は。
「――ははっ、そうかスカサハか。種火集めの時も戦いたがっていたしね」
『残念ながら、この部屋の出口はあそこ一つだけです。つまり裏口からの脱出など不可能ということ――彼女たちが諦めるまで、扉のロックをかけたままにしておきましょうか?』
「いや、いい。寧ろいい機会だろう」
『いい機会?』
予想に反してスカサハを受け入れる気のアダムに、ロマンは当惑する。ぽかんとしている元魔術王(ソロモン)に、アダムは笑った。
「僕の戦術的価値を早く知りたいんだろう?なら、丁度いいって言ってるのさ」
丸型の目を細めながら、アダムはなおも悪戯な笑みを浮かべる。
「――僕がどれだけ役立たずか、実際に見た方が早いだろう…ああ、もちろん死ぬ気は無いけどね?」

『――勝てない。そして、勝てない』

――あ、危なかった。

最近運が向いてきていたから、無意識の内に油断していたのかもしれない。

自分が最弱の生き物だという自覚が足りなかった。もう少しで死ぬところだった。

見つけた二つの水場の内、狩りに使う方――動物たちがいっぱい来る方――に食料調達のために鹿狩りに行っていたのだ。

勿論、警戒はしていた。

僕にとって獲物を狩り易い場所は、他の肉食動物達にとっても言うまでもなく最高の狩場なのだから、獰猛な捕食者達と鉢合わせする可能性が高いなんて重々承知している。

だからこそ、僕は狩りの時に獲物よりもその獲物を狙っている動物たちの動向に気を配る。

動物たちは頭がいい。その最たる例は、僕が鹿を狙っていることに気づいても、その僕を放置するのが多い事。

彼らは、僕が鹿を狩り終わったその瞬間が一番の狙い目だと理解しているのだ。

鹿にすら殺されかねないひ弱な生物が、自分達の代わりに鹿を仕留めてくれて、さらには止めを刺したばかりで油断している――なんて。

『鴨がネギを背負って』なんかじゃ足りないくらいの格好の獲物。

僕一人を仕留めるよりよっぽど効率がよくて、旨味がある。動物たちの中には更に頭を使って、僕を狩りの際の囮や陽動役に利用する者達もいるのだ。

頭でも身体能力でも敵わない僕に出来ることは、彼らの『慢心』を前提として、その意識の隙間に入り込むこと。

唯一のアドバンテージは、僕が彼らと違って常に本気であることなのだから。

兎にも角にも、当たり前だが僕は今回だって周囲には気を配っていた。

鹿を発見しても、目に見える範囲全てを確認し終えるまでは手を出さない。そして、危険な奴が居たら諦める。

幸いにも食料はまだ備蓄があるから、どうしても仕留める必要性なんて無いのだし。

でも、今回は珍しく周りに肉食動物が居なかった。鹿たちもいつにも増して多所帯であり、特に仕留めるのが楽な子鹿が沢山居たから、思わずにやけてしまったぐらいだ。

だからこそ、僕は『狩る』事に決めた。これ以上無い好条件で、危険も無い――と、その時はそう確信していたから。

――結果を言うとすれば、決して安全などではなかった。

川の縁、高い草が茂った水かさの浅い部分を、風下から鹿たちに向かって近づいた。

鹿たちは気づいていない。尖った石を握りしめながら、僕は仕留められることを確信していた。

――だからこそ、気づかなかったのだ。

咄嗟に回避行動をとったのは、自分でも人生最高に良い判断だったと思う。何に気づいていた訳でも無いのだが、直感に従ってよかった。

数瞬前まで僕がいたその場所では、大きなワニが顎を咬み合わせたところだった。とても牙どうしのぶつかる音とは思えない『ガチンッ！』という音に僕は竦み上がった。

もし、あの顎で噛み砕かれていたら――それが身体の何処であっても無事では済まなかっただろう。

きっと、死んでいた。

その後は、震える脚をなんとか鞭打ち、命からがら拠点まで帰還した――いや、生還といったほうが正しいのかもしれない。

油断大敵。慢心は悲劇を生む。
そんなことは分かっていると、そう思っていた。
それなのに、このザマだ。生きていることが奇跡と言って相違ない。
もう一度、自分によく言い聞かせなければならない。
僕は最弱。たった一人しか生き残れなかった、世界でも稀に見るであろう、ひ弱な一族の末裔。
だからこそ、今日の生還に深い感謝を。明日をも知れぬ日々に祈りを。
危なかったけれど、今日も生き残れた。しかしそれは、決して僕自身の力では無いのだ。
僕は最弱だ。他の生物達に気まぐれで生き残らせて貰っている、それだけの存在だ。
気を抜いてはいけない。周りに存在する全ては、死へと繋がる。だってこんなにも、世界は危険に溢れているのだから。
――今日も、明日の平穏に祈りを捧げる。
凍えるような寒さに耐えながら眠る夜。
その夜が明けた湖の畔(ほとり)に、明日も僕が生きていますように――と。

◆

「アダム、大丈夫かな…」
「心配ですね…サポート特化のアダムさんでは、とてもスカサハさんと戦って無事で済むとは思いません…」
そわそわと心配した様子で、マシュと立香の二人は囁きあった。
二人の目線の先には、それぞれにウォームアップをしているスカサハとアダムがいる。
もう一週間もしない内には最終決戦だというのに、仲間同士で殺し合いとは。特にアダムは消滅すれば二度とカルデアに帰ってこれないのだから、不安もひとしおである。

立香は令呪まで使ってスカサハを止めたというのに、アダム本人が受諾してしまい。さらには彼による謎の力でスカサハに対する令呪の束縛が外される始末。

『破戒すべき全ての符』を持つメディアなど、令呪を無効化する手段を持つ英霊は偶に居るが、アダムはそれを指の一振りで行なったのだから手に負えない。

そこまでしてスカサハと戦いたがるのだから、もしかしてアダムまで戦闘狂なのか――と、立香とマシュは若干盛大な勘違いをしていた。

そんな二人には目にもくれず、スカサハは槍を背中に回して体を伸ばしながら獰猛な目をアダムに向けている。

今朝に行っていた種火集め。アダムはエネミーを倒すのにそこそこ手間取っていたが、それこそ属性的な相性と使う武器が悪かったのだとスカサハは確信していた。

戦場では武器や相性云々といった言い訳が通じないのは理解しているし、スカサハ自身もそういう言い訳を溢す輩は『戦士』として失格だと思っている。

しかし、今朝のアダムの姿は、そんなスカサハの信念を越えて『惜しい』と思わせるには十分なものだった。

――相手に焔への耐性すら無ければ。

――アダムの武器が焔ではなくて、剣や槍であったならば。

幾千もの英雄を育て上げてきたスカサハをして、その熟練した体術には目を奪われずにはいられなかった。

まるでアダムそのものが風であるかのように、酷く柔らかい動き。

大した威力も無いとはいえ、不定形である種火アームの炎弾をなんの魔力的補助も無く受け流した技量。

魔術を受け流すのは、あらゆる武技を修めたスカサハにとって当たり前の戦闘技術ではあるが、それは武器や身体に魔力を纏った上での話だ。

断じてアダムのように、何も纏わない手のひらでやるものではないのだから。

「（聞く限りでは、子孫の技の取得ということだが…仮にそのスキルによる技だったとすれば、人類史上でアレ程の体術を誇った人物が居たのか？）」
弟子にしてきた英雄は数しれず。世界を外れた魔境に飛ばされた後でも、永遠を生きながら観察していた英雄は星の数ほどに居るのだ。
それでも、あれ程の体術使いは見たことがない。見逃していたか、スカサハが生まれるより前に存在していたのか、あるいは――
――純粋に『彼』自身の技量なのか。
「（――考えても詮なき事だな。どちらにしろ、殺り合えば解るだろう）」
考えてもわからない事はまま有るが、本気での手合わせを通せばそれも自ずと見えてくるだろうと、スカサハは楽しそうに笑う。
肉食動物のような鋭い笑みに、立香とマシュはゾワッと体の芯から逆立つような悪寒を感じた。
二人の気持ちはたった一つ。即ち――あ、スカサハ姐さん本気だ――である。
ますますアダムの事が心配で堪らない二人。
彼のことを助けようにも、一人は一般人に毛が生えた程度の魔術使い、一人は元人間のデミ・サーヴァント。
７つの特異点を巡り経験はこれ以上なく積んで来たものの、本気のスカサハを止められるかといえば、否である。
二人は精々、杞憂であればいいのだがと精一杯祈るしか出来ない。
「ふっ、はっ、んーっ！」
そんな二人の心配もスカサハの凄まじい殺気もどこ吹く風で、アダムはグッグッと柔軟運動に勤しんでいる。
少年のような容貌も相まって部活前の学生みたいだと、一般人のときは学生であった立香は思った。
「――うん、準備できたよ。始めようか」
気負い無くアダムは言う。
自身の圧を軽く流されたスカサハは、戦士としての自尊心を刺激さ

れたのか、少しばかり不機嫌そうにすると、アダムの言葉に槍を構えることで応えた。
「――本気での手合わせだ。この槍がお前の命まで届いてしまっても、恨むなよ」
「承知してるよ。そんなお門違いなことはしないさ」
ボウ…と、アダムの両手に緋色の焔が灯る。ゆらゆらと揺れる陽炎は、見ているだけで思考が冷めていくような感覚を覚えてしまう代物だ。
――真名解放時に点いていれば、精神の安定作用と治癒能力を発現させる神秘の焔。
正真正銘、『起源』のスキルに頼らない『彼』自身の功績――闇を照らす原初の火である。
間違いなくサポート特化の宝具であるが、決してそれだけが役目ではない。
アダムの主な攻撃手段でもあり、真名解放時の条件によっては敵の妨害にも役立つ強力な宝具だ。
人類史上、最も神聖な焔の再現――真名を、『光なき原初の世界（ヴェイグ・エンバー）』という。
「相変わらず、それが武器か。『起源』とやらがあるなら、他にも使えばよかろうに」
スカサハは皮肉ったような笑みでそう言う。
スカサハ自身、英霊というクラスに固定化された存在にとっての武器変更というのは難しい事だとわかっていたが、それでも勿体無いという気持ちは拭えなかった。
『起源』のスキル――即ち、人類全ての技巧の習得。それをＥＸという高ランクで所持しているアダムは、つまり、どんな武器を用いようとその道の達人と相違ない実力を発揮する。
故に、惜しい。きっと、何か武器を使って打ち合えば、何百年ぶりかの高揚を味わえただろうに、と。
「――武器を変える意味なんて無いよ」
「なに？」

苦笑しながら言うアダムに、スカサハは怪訝な顔を返す。続いて焔を僅かに強くすると、彼は自嘲するかのように目を伏せた。
「武器を変えても、変えなくても――そもそも武器が無くとも。君は僕に勝てない。君が『人』である限り、それは間違いない。それに――」
「――舐められたものだな」
武器に関わらず、勝敗は決定事項。そんな言葉にスカサハの殺気が荒ぶる。
今のスカサハは、静かに静かに――キレていた。
「(ちょっとぉ!?、なんでアダムはわざわざ煽るのかなぁ!?)」
「(不味いです先輩!スカサハさんが今まで見た事無いぐらいに怒ってます!)」
――それこそ、クーフーリンに『年増』と馬鹿にされた時よりも。
スカサハの怒気は神殺しと呼ぶに相応しいものであり、ギルガメッシュすら見れば冷や汗を垂らすかもしれない程だ。
「…話は最後まで聞くべきだと思うけどねぇ」
「いらん。私にも戦士としての誇りはある。スキルの恩恵を自身の強さと履き違えた輩の話など、聞くに値せん」
スカサハも、アダムに確実に勝てるのかと言われれば首を振るぐらいには、その強さを理解しているつもりだ。
それでも、まるで自分が苦戦するには圧倒的に足りないかのような物言いをされるのは、納得がいかなかった。
自身は、何千年という年月をかけて修練してきた身である。たとえその全ての成果をアダムが盗んでいたとしても、簡単に負けるつもりは無いのだから。
「――そうかい。ならば、仕方ないね。」
僕の言い方も悪かったし。と呟きながら、アダムは両手の焔を一層強くする。ゆらりゆらりと神秘の火はその熱量を肥大化させた。
互いに視線を交差させる。間合いを測り、牽制し合い、そして遂にスカサハが飛び出す。
神速の突き。真名解放による因果逆転の呪いを持ってさえいない

ものの、その一撃を無傷で避けられる存在など極わずかだろう。
それでも、彼はその一撃をいなした。
スカサハは目を見開く。受け流されたことに――ではない。
その一撃を放った自分の両手に、全くの抵抗が感じられなかったことにだ。
まるで水を――いや、風を相手に突いたかのような薄い手応え。スカサハは咄嗟に距離を取った。
種火アームの攻撃を受け流していた武術だろうとは思うが、それでもあの炎弾とこの突きではその威力もスピードも段違いの筈なのだ。
それを全く同じように、まるで風のようにして、受け流した。
スカサハの額に汗がにじむ。そして口角が上がり、目が爛々と輝いていく。
――ああ、確かに。強い。
スカサハは槍を握り直した。ここから先は文字通りの死闘――神殺しをして勝機を探らなければならないほどの闘い。
久方ぶりに、スカサハは緊張を感じた。

――そんなスカサハを前にして。
全人類の親、人理の始点たる英雄『アダム』は苦笑する。
知っている。スカサハは高度な戦闘狂であり、死にたがりだ。自身を殺してくれる存在を常に求めていて、だからこそ今、彼女は幼子のように目を輝かせている。
――アダムなら殺してくれるかもしれない。
そう思っているのだというのは、間違いないだろう。
だからこそ、アダムは気まずそうに目を伏せるのだ。ああ、本当に、最後まで話を聞いてくれていれば――そんな無駄な期待を持たせなくて済んだのに、と。
管制室にいるロマンは勿論、一緒の部屋にいる立香やマシュ、目の前のスカサハにすら聞き取れない様な声で、アダムは一つボソリと呟

く。
「君は僕に勝てない。そして僕は君に勝てない――って言うつもりだったんだけどなぁ…」

――それは人類史上最も古き人への制約。
人類の父(母)たる『彼』に与えられた、最も重き束縛。
――彼は『人』を傷つけることが出来ない――
抑止力から授けられ、決して外されないそんな制約の存在を、立香たちはまだ知らない。

『命を懸けて』

――朝は好きだ。
日の出の時の、暗く淀んだ世界が一気に拓けていくような感覚が好きだ。
起きた時には途絶えているひ弱な『薪の光』を見かねたようにして、大きな山からひょっこりと顔を出す太陽。
鳥達のさえずりと、澄んだ空気、動物たちの目覚めの声――そのどれもが僕のお気に入りだった。
――ああ、今日も僕は生きている。
それを強く強く、これ以上なく感じられるから。

――夜は嫌いだ。
何も見えないという恐怖は心を圧迫する。
手元にある小さな光が頼りなくて仕方なくて、いつ消えて仕舞うかと怯えてしまう。
その光が尽きた時こそ、それが僕の命の終わりなのかもしれないと、そんなふうに思えてくる夜だってある。
――結局、薪の光はいつも起きた頃には消えてしまっているのだから、無用な心配だとはわかっているのだけれど。

――『光』とは命の象徴だ。
僕にとっては勿論の事、動物たちも、魚たちも、恐らくは植物たちだって。
光が無くては生まれる事が出来ないし、光が無くては息が続かない。
暗闇に荒(すさ)ぶ風が嫌いだ。夜空に響く遠吠えが嫌いだ。パチパチと薪の弾けていく音が嫌いだ。体に響く強い鼓動が嫌いだ。

――ああ、『光』があれば、どれもきっと他愛のないことばかりだろうに。
僕は毎夜毎晩、その全てに呼吸を止める。その全てに体を震わせる。

――ああ、誰でもいいのだ。教えて欲しい。
僕はどうやって生きればいい？
光の元では動物たちの牙に怯え、闇の元では見えない全てに怯えて。
僕はどうやって――どうして生きていけばいい？

今日も日の出の時を迎える。
今日は何をしようかな。
狩りをしようか。山菜を集めようか。
それとも、久しぶりに『実験』をしてみるべきか。
もうすぐ冬だというのに、この前こそ泥たちに食料を食い荒らされてしまったから、冬でも採れる物のうち、『食べられる』物を知らなくてはならない。
全く…無花果も肉もそれなりに集めていた筈なのに、綺麗サッパリ無くなってしまった。よくあることだけど、今回はかなりキツい。
でも、四の五の言っていても行動しなければ死んでしまうから、今日は食べられる『植物』がないか探してみようと思う。
しかし今は冬の直前。まず枯れずに生えている物自体微々たるものだし、そこから食べられるものを探すなんて、無理がある。
でも、動物は冬眠や大移動でいないし、魚なんて冬に獲ろうと川に入ろう物ならそのまま凍死しかねないので、本当に最後の手段。
虫という手もあるけれど、それは植物で『実験』してみてからにしよう。
完全に感覚だけど、植物のほうが虫より比較的に安全だ。主に『毒』

的な意味で。
食べたら最後死ぬ毒――今こうして生きている以上出会ったことないのは明白だけど、きっとそういうのも存在するだろうと予想している。
痺れる毒や、吐き気を催す毒。そうやって毒にはいっぱい出会ってきたから、そのくらいは簡単に想像できるに決まってる。
なんせ、『食べられるもの』を知るためには『食べてみる』しか無い――なんて。冗談抜きで本当の話。本末転倒にも程がある。
それでも、そうしないと生きていけないから。
ひ弱な僕にも、僕なりの生き方がある。こちとら、生きることに命を懸けているのだ。
死んだ時には――あぁ、きっと後悔するだろうけど――仕方がない。
精一杯足掻いて死ねるなら、きっと本望だ。

――だって、自分で確かめる以外に、誰も教えてくれやしない。
だから――無知な者は、無知なりに。
一生懸命に知識(ちから)を付けよう。ああ、文字通りに、一生に命を懸けて。

◆

――紅い閃光が胸を貫く――
「――――っ、あっぶないなぁ！」
自身の中に浮かぶ直感に従って、アダムは神速の突きをいなした。
何千と打ち込まれても未だ完全には見切れない。それでも完璧に受け流せているのは、ひとえに直感(宝具)のお陰だ。
自身に傷を負わせるに足る一撃。気を抜いたら大怪我は必至だろう。流石は神殺しのスカサハだと、アダムは改めて感心していた。
「そら、どうした！　防戦一方か!?　それでは原初の人間の名が泣くぞ！」
そんな彼をスカサハは無慈悲に突く、突く。

愉しい。愉しくて仕方がないと、スカサハの口端が吊り上がる。
幾多の戦い、数多の闘争。神殺しとして英雄の師としてそれらを駆け抜けて来た。
即ち死線も苦戦もくぐり抜け続けてきた身。圧倒的格上との戦いなど初めてではない。
ああ、しかし。
幾千年の末に磨き上げた神滅の一撃を――
――ここまでいなし続けた者など居なかった――っ！
戦いを始めた時に抱いていた、自分を馬鹿にされた怒りなど、とうに忘却の彼方。
なるほど、認めよう。
確かにアダムは、このスカサハを馬鹿に出来るだけの実力が有ったのだと。
種火集めの最中（さなか）言っていた、「スカサハも自分にとっては子供同然」という言葉に、なんの偽りも驕りも無かったのだと。
――しかし、だからこそ。
「――ああっ、いいぞ、いい！　そら、貴様程ならば、転じることなど造作も無いだろう！　ならば、さっさとこの身を焼くがいい――なに、殺せとは言わん。ただ戦士として戦いにけじめをつけるのみよ！」
攻撃しろ。スカサハは興奮した声音でそう叫ぶ。
防戦一方――そんなものは幻想。スカサハが相手を挑発するために発した方便だ。
正しくは、防戦をアダム自身が望んでいる。
『親』として持つスカサハへの愛情か。あるいは決戦前という状況からの躊躇か。または、立香（娘）の意思へ反する事への忌避か。
なにがアダムをそうさせているのかは分からないが。これでは物足りないのだ、スカサハは。
もっと、激しい痛みを。もっと、多くの流血を。この身に一つでも疵をつけて欲しい。
そうすればきっと、スカサハは安心して決戦に挑めるだろうから。

「――だからっ、話を聞かない子だなぁっ！」
一方、スカサハを傷つけられないアダムは叫ぶ。
さっきから、「傷つけるのは無理だ」と切りだそうとしているのだが、息もつかせぬ槍のラッシュに、流石にアダムと言えど無駄口は叩けない。
そも、今のスカサハ程に興奮していては、言ったところで聞きはしないだろう。
ならば、やることは一つだけ。
「仕方がないね。全く、手のかかる！」
全身全霊を持ってスカサハに攻撃し、傷がつかないことをこれ以上なく明瞭に示す
スキル『霊基拘束』によって縛られているアダムは、あらゆる物理的法則・魔術的法則の下であっても、『人』を傷つけることが出来ない。
アダムがそれ（殺傷行為）を行う限り。
例え刃物をもって切りつけようと。例え宝具『光無き原初の世界（ヴェイグ・エンバー）』の最大火力で焼き払おうと。
抑止力より与えられた一つ目の制約は、そのダメージ全てを透過する。
――ならば、憂いはない。
スカサハのお望み通りに、攻防転じて焼き払う。
しかしそれには――スカサハ程の武人を相手にする以上――何か、隙を作らなくてはなるまい。
「――光を落とせ」
途端、アダムの両手の焔がこつ然と消える。
突然の武器の消失――相対するスカサハにしてみれば、敵を目の前に刃を納刀したとしか思えないそれは、しかしアダムにとっては必須の前準備だ。
「真名解放――『光無き原初の世界（ヴェイグ・エンバー）』」
中性的な声がやけにはっきり響く。
宝具の真名解放。最大限に警戒するべきこの瞬間。何が起こる――と、身構えていたスカサハは、一瞬にして視界を奪われた。

「――なっ、あっ？」
暗黒。何が動き何があるかも解らない闇の世界。
スカサハは英霊として武人として相応しい『眼』は持っている。
千里眼の類は無くとも、光が無くたって直ぐにそれに対応出来るだけの訓練は積んできたし、なんなら彼女が女王として収めている影の国は、地球の夜よりよっぽど酷い暗さだ。
つまりは、暗闇など陽の下で活動するのと何も変わらない。光なんか無くても、余裕で普段通り動ける――筈だったのに。
――だから、これは断じて『暗闇』だとか『光がない』だとか、そういったものではない。
全く見えない。比喩ではなく、本当に。
「（そんな、馬鹿な。そんな……そんなことが……）」
スカサハは、ふとカタカタと何か小さな音を拾う。直ぐ近く、まるで目と鼻の先が発生源だ。
「――この私が、震えている？」
恐怖で。槍がカタカタと耳障りな音を立てていた。
真名解放時、点いていれば――つまり、燃えていれば。その宝具は敵を傷つけるものではなく、癒やし落ち着かせる生命の火へと変わるだろう。
では、点いていなければ？
――これはその答えである。
闇とは人間にとって、『死』の次に現れた恐怖だ。
故にこそ、この宝具が原初の火だけでなく原初の火の無い世界の再現でもある以上、発動してしまえばスカサハといえど異常な恐怖に苛まれるだろう。
もちろん、そう簡単に心を乱せるような便利宝具では無い。一種の幻術――あるいは精神干渉魔術のようなモノなのだから、心をしっかり保てばなんてことは無いのだ。
でも、今この模擬戦において、スカサハは熱くなりすぎた。
既に回っている車輪を更に速く回すのは造作もないこと。
ならば、怯えるは必至、震えるは当然だ。

光に慣れた人類にはわからないだろうけど、とアダムは苦笑する。
真実、光の無い世界――火が生まれる前の世界なんて、殆どの人類が体験したことなど無いのだから。
「なぜ、『人』が真っ先に『火』を創りだしたのか」
スカサハの耳に、嫌にその声が響く。
いつもなら、冷静に音で敵の位置を補足しているだろうに、あまりの恐怖で気配が探れない。
「――それは、人類にとって、あの時最も怖いのが『闇』だったからだ」
今ほど賢くなかった人類が。
自然法則も何もかもを知らなかった人類が。
それでも、火という光を手に入れたのは。きっと、そうしないと生きていける気がしなかったからなのだ。
そうしないと、息が続かなかったからなのだ。
「さて――スカサハ。呑まれたね？」
では――と、アダムは再び焔を揺らめかせる。
ごうっ、とまるで突風のように勢い良く揺らめいている焔。それが盲目のスカサハにもわかる程だった。
スカサハの額に冷や汗が垂れる。たらりたらりと、何十年、何百年振りかもわからない、動揺と恐怖の証が。
――ああ、
スカサハは暗黒の中にあって、竦み上がりそうな恐怖にも関わらず、そう苦笑する。
久しく忘れていた。
これが、これこそが、死の恐怖であったかと。
数千年前に感じたきりのその心臓の鼓動と冷えきった身体。それが嫌に懐かしいような気がした。
ごうっ、ごうっ。
更にアダムの焔が勢いづくのがわかった。
その爆炎を前にして、スカサハは再び苦笑する。心の内に、ある一つの衝動が皮肉にも浮かんできてしまったから。
「……まさか、この私が」

――このごに及んで、生きたいなどと。
遂に、アダムの原初の火はスカサハを炙る。それはさながら、聖火による処刑。数千年生き続けた魔女――あるいは、悲劇の女への手向けの火であった。

――まぁ、結局、その焔はスカサハに傷一つ足りとも付けなかったのであるが。

◆

「――っ！……っ！」
「大変です、先輩！　スカサハさんが声もなく絶叫しています！」
「そりゃあね……本人、完全に死んだ気だっだろうに。生きてるんだもん」
普段の感情の薄い超越者前とした雰囲気は何処へやら。スカサハはただひたすら頭を抱えて唸っていた。
それを見て、気まずそうに頭を掻くのはもちろんアダム。やはり最初に言っておくべきだったと、軽く後悔していた。
「……なぜだ」
「うん？」
スカサハがムクリと顔を起こしたかと思うと、アダムに向かってぶっきらぼうに尋ねる。
あの瞬間――模擬戦の最後、確かに自分は焼かれたとスカサハは記憶している。
アレだけの業火だ。神殺しのこの身といえど、無傷で済むような代物ではない。あれはただの焔では無いのだから、なおさら。
なのに、気づいてみれば、傷一つ無い。まるで、自身の傷を世界が拒んでいるかのような錯覚を覚えた程だ。
「なぜ、私は無傷でいられる？　おかしいだろう、どう考えようとも

だ」
『そうだね、その通りだ』
スカサハの疑問に相槌を打つのはロマン。彼もまた、スカサハとアダムの戦いをモニタリングしていたが、それ故に一番驚いていると言っても過言ではない。
『ルーム内に張った障壁はＭｒ．アダムの焔で確かにダメージを受けていた。床も天井も等しくだ。なのに、その爆炎の中心にいたスカサハは全くのノーダメージ……正直お手上げだよ。魔法としか思えない』
模擬戦でカルデアの大切な施設を壊すわけにはいかないから、ロマンはトレーニングルームにおいて予め部屋を保護する為の障壁を貼っていた。
その耐久度は、アダムの最後の焔で確かに削れている。カルデアの最新鋭機器が弾き出しているのだから、間違いない。
それなのに、スカサハは無傷でここに居る。何をしたらこうなるのか、さしもの元魔術王もお手上げという様子であった。
「そうだねぇ……なんと言えばいいのかな」
説明するのは難しい――といった様子で首を捻るが、やがてアダムは口を開いた。
「ほら、僕は『アダム』だろう？」
「……うん、そうだね」
何を当たり前の事を、と立香は呆れた目をアダムに向ける。しかしアダムは、まるでそんな目線など気にしていないかのように続けた。
「ならば、『人』を傷つけられないのは当たり前というか――うまく説明出来ないな。これは、僕にとっては息をしないと死んでしまうのと同じぐらい当然の事……らしくてね」
「え、また何かのスキル？　というか、らしいって……ああ、もう。マシュ、何か予想付く？」
「えっと、ちょっと待ってください。『人』を傷つけられないなんて伝承、『アダム神話』に存在していたでしょうか。残念ながら、私には心当たりがありません……」

まさかの本人が説明不能の事態。立香とマシュは頭を悩ませる。
英霊として『自分』を把握できないのは非常に珍しいケースであるが、無いわけではない。
召喚に不備があったり、マスターのスペックが未熟だったり――あるいは、生前とはまるで別人として召喚されたりすれば、サーヴァントとして足りないままに現界してしまう。
今回は最後のパターンだろう。
しかし、アダムに関してはありがちな記憶の欠落という訳ではなく、『アダム』という殻を被って現界しているが故の弊害だ。
『彼』は他の英霊と違い、召喚の際、聖杯から聖杯戦争に関する知識の他に自身の演じるべき『役割』についての記憶を受け取る。
つまり今回、彼は召喚された時点で『アダム』という存在の記憶を持っているのだ。
したがって『アダム』にとって当たり前であるならば、それは『彼』にとっての常識である。
誰もが自身の脚の動かし方を完璧に説明できないように、彼は『人』を傷つけられない理由を説明できない。
『アダム』にとっては、生まれた時からそうだったが故に。
『……こういう強烈な制約は、基本、神々が原因であることが多い。まして、今回のように魔法の領域の出来事であるなら、相当高位の――いや、あるいは抑止力が元凶かもしれないね』
「――ちぃ、抑止力だと。忌々しい」
スカサハはロマンの言葉に舌打ちし、憎々しげに吐き捨てる。
「あ、そういえばスカサハ姐さんは……」
「たしか、神をも屠るその余りの強さに、抑止力に世界から弾かれた存在でしたね……」
スカサハは人の身でありながら神に近づき過ぎたために、世界の外側へと強制的に飛ばされた存在だ。
抑止力と聞いただけで忌避感を覚えるぐらいには、その存在を疎ましく思っているらしい。
「――うん、考えても埒が明かない。ここは『直感』に頼ろう」

頭を悩ませながら必死に原因を考える立香たちを見渡して、これ以上は不毛だと判断したアダムはそう告げる。
最初からこうすればよかった――と零しながらアダムは苦笑した。
「直感？……ああ、『起源』のスキルで持ってるのか」
『直感』まで持っているのかと驚きながらも、そういえばこの英霊は『起源』というチートを持っているんだったと思い直す立香。
子孫から技巧と叡智を借り受ける『起源』ならば『直感』くらい、と立香は思ったのだが、とうの本人は「とんでもない！」と立香の言葉を否定した。
「直感なんて、技術でも知識でもない物を『起源』で持てる訳がないよ。アレが使い物になるためには、天性の才――あるいは、膨大な経験が必要だ。どちらにしろ所持不可能さ。経験も才能も、『起源』のサポート外でね」
「……ならどうするの」
まさかアルトリア辺りを今から連れて来いとでも、と立香はアダムをじとりと睨む。
今は完全に夜中。いくら２４時間活動できるサーヴァント相手でも、緊急事態でもないのに訪ねるには、少々無礼な時間だ。
サーヴァント達に『使い魔』としてではなく対等な『仲間』として接すると決めている立香は、あまりそういった非礼な行為を好まない。
絆こそ、世界を救うにあたって最も大切なのだと知っているが故に。
「違う違う。また誤解を……どうも口下手だなぁ、『アダム』っていうのは」
言葉足らず――というよりは、大事なことをさっさと言わずもったいぶるタイプだからか、先程のスカサハの一件といい、どこか誤解を招きやすいアダム。
恐らく喋り方が生前とは違うのか、分かりやすく戸惑っている。立香は彼に、一言足りない会話をする、どこぞの施しの英霊の姿を重ねてしまった。

「『起源』ではどうしようもないけど、僕には『直感』と似たようなことができる宝具があるのさ。それを使おう、とそう言いたかったんだ」
「宝具、ですか。『光無き原初の世界（ヴェイグ・エンバー）』だけではないだろうと思ってはいましたが……」
『それは、事前に説明を受けた宝具だね。真名は確か――』
――『教え無き叡智（イグノラント・リサーチ）』
効果としては、推察能力及び観察能力の上昇。何の事前知識やファクターが無くとも、物事の本質を見抜く力を得る。
これも、第一宝具『光無き原初の世界（ヴェイグ・エンバー）』と同じく『起源』に頼らない『彼』自身の功績から成された宝具。
『原初の人』だからこそ誰からも知識を得られなかった彼が、それでも生存を貫いたという偉業。そこから成る、人類史において最も古い研究（リサーチ）の再現である。
よって、その特性上最も本領発揮が出来るのは、何かしらの要因でアダムの生存が脅かされる状況下であるが――自身の制約の詳細ぐらいなら、命がかかっておらずとも見抜けるだろう。
「ほへー、なんかまた凄い宝具を出してきたね」
「『直感』とはまた似て非なる……か。確かに先人の知恵無き生還は、偉業と言って差し支えあるまい」
「そんな大層なものじゃないさ。確かに生前は、『実験』と称して研究紛いのことをしたこともあったけど、あんなの……生き残れたのは、運が良かっただけだ」
アダムの偉業を褒め称える立香達に、しかしアダムは自嘲するかのように笑うだけだった。
立香はアダムの自己評価の低さに首を傾げる。今回もそうであるが、アダムはやたらと自分を卑下するのだ。
『アダム』としての功績が自分のものではなく、『起源』による技術習得も自分本来の力ではない。その事からくる謙遜かと思ったが、どうやらそうではないらしい。
この卑屈さは、きっと『アダム』ではなく『彼』自身のものなのか

もしれないと、立香は思った。
「――さて、ではちょっとばかりお時間を拝借。宝具発動、やってみよう」
「……本当にヒント無しで分かるの？」
「さぁね。今回は命を懸けている訳じゃないから――どうだろうか、まさに立香の言う『ヒント』を貰えるぐらいの効果かもね」
そう言ってクスリと微笑んだかと思うと、アダムはおもむろに眼を閉じる。
ふっ、という一瞬だけの微量な魔力の高まりの後、アダムの眼が開いた。
宝具を発動――したのだろうか。真名解放もしないものだから、立香にはよくわからなかった。
暫くすると、アダムは何かに気づいたかのように、表情を変える。
「……『カイン』と『アベル』……抑止力……『原初の人』……『第三宝具』？」
まるで何かが乗り移ったかのようにブツブツと何かを呟くアダム。立香が「大丈夫？」と声をかけると、はっとしたように彼は顔を上げた。
「いや、大丈夫。大丈夫だよ」
「……それで、何か分かった？」
慌てたように「大丈夫」と口にするアダムの様子に立香は釈然としないものを感じるが、特に追求することも無く話を進める。
問われたアダムは一瞬何かを迷うような素振りを見せたあと、それを立香達に悟られる前に、落ち着いた様子で話し始めた。
「原因は、まぁいくつかあるみたいだけど……」
ごくり、と立香たちは唾を飲む。
『人を傷つけられない』という制約。世界の法則を捻じ曲げてまで実現されるその制限の要因は、一体どれほど強大なのか――と。
そんな緊張とは裏腹に、アダムは酷く安心していた。
自身が戸惑いを隠したことを、誰も悟ってはいないと分かったからだ。

ここにギルガメッシュやマーリンがいなくて良かった――そう思いながら、アダムは差し障りのない真実を告げる。
「カインとアベル。一番の原因は、あのバカ息子達さ。全く、世話の焼ける……」
心臓をバクバクと鳴らしながら、苦笑を取り繕って。

『寂しくても、辛くても、虚勢をはって』

硬くて不味い殻を噛み砕く。口の中が最悪な感触だけれど、四の五のは言っていられない――もう、餓死寸前であるのだから。

やっとの思いで手に入れた食料。たった一欠片の木の実だけれど、今はそれすらも貴重な命の源だ。

――ああ、体に不味い木の実の栄養が染み渡る。

小さな小さな食料だが、今の僕にとっては何よりも眩しく見えた。

結局のところ、あの後に恒常的に食べられるような食物は見つからず。仕方がないので寒いのを我慢して魚に手を出そうかと思ったら、次の日の朝には急激に気温が下がってしまい、湖が凍ってしまっていた。もちろん、魚は取りようが無い。

ならばと虫を探してみるも、こちらに関してはとうとう見つかりすらしなかった。

肩を落として塒（ねぐら）に帰れば、その日の夕方から大吹雪（ブリザード）が一帯を直撃。外に出ることすらままならず、もちろん洞窟の中に食えるものなど微塵も存在しなかった。

こうして見事に僕は食料の供給手段を無くした。5日にも及ぶ吹雪の中、どうにか雪で喉だけを潤しながら耐え忍び――そして、当然ながら死にかけた。

久々に晴れ上がったとは言っても雪は未だ積もっているし、そもそも5日の断食で僕自身が風前の灯火では食料探しなど夢のまた夢。

けれど何もせずに待っていたところで誰も助けてはくれないから、立ち上がることすら拒否する身体に鞭打ち、外に出た。

向かうのは近くの水場。例の動物たちのいないひっそりとした場所。

何故其処を選んだと問われれば首を傾げるしかないが、昔から僕にはこの手のことがよくある。

脳に閃くような、不思議な感覚。生きるために――そう強く思えば思うほどに強くなる『予感』。コレが最適解だと、僕の頭の中が理屈抜きで確定してしまう、奇妙な現象だ。

根拠の無いものは恐ろしく、また本当に頼るべきなのか未だに迷っているが――それでも、今回も例にもれず僕を救ってくれた。

たどり着いた湖畔には不思議と雪が積もっておらず、瑞々しい緑草と暖かい陽射しが静かな湖面と相まってとても神秘的だったのを、空腹のせいで朧気な記憶の中でもしっかりと憶えている。

まるでそこは、この厳しい世界のなかで唯一僕が生きることを許された――いわゆる楽園のようで。

僕は一瞬、飢えで死にかけていることも忘れて、その光景に見惚れてしまった、と思う。ハッキリとは思い出せない。

ともかく、その幻想的な光景の中で。ヨロヨロと湖面に近づいた僕が見たのは、とても小さな茶色い木の実だった。

思わず飛びついた。

なりふり構わず。『藁にもすがる思い』という言葉が現代には有るらしいけれど――あの時の僕は、きっとその諺にピッタリの様子だっただろう。

前述の通り、味は最悪。食感もゴリゴリしていて、決して美味いものでは無かった。

けれど、美味しかったのだ。

思わず涙が溢れ出た。悲しいのか嬉しいのかもわからずに、ひたすらに泣き続けた。湖畔の草花が濡れてふやけるぐらいに、目から水を流した。

――ああ、ああ。どうして僕は生きているのだろう。

そういつも考えている。

他の動物たちは、次世代に子孫を残し、種を繁栄させる為に生きている。毎日を必死に生き、子供を作り、そして、遠い未来に『自分』を残すために。

ならば、僕は？

ただ、必死に生きているだけの僕は？
生きるためという大義のもとで、他の生物を殺し、次世代に残るはずだった種を摘み取り、愚かにも生き続けている僕は？
自分の子孫の残し方すらも知らず、生き抜いたとしてこの先に何も残せない僕は――どうして生きているのだろう。

涙が止まらない。
愚かにも生き続け。薄情にも生き続け。残酷にも生き続けて。
そして、今回も生き残った。
生きる意味を知らずに、されど死ぬことを許容できない臆病者。
だから常に問う。『なんのために生きているのか』と。
生きるために命を懸けた。
生きるために誰かを殺した。
生きるために誰かの未来を壊した。
生きるために、生きるために、生きるために、生きるために――ならば、その犠牲はなんのために。
生きることは諦めない。それは生への冒涜だ。僕の血肉となった全ての生物への侮辱だ。
――けれど、心が壊れてしまいそうで、痛いのだ。
この世界にたった一人。
頼る者はおらず、番になれる相手は見つからず――あるいは仲間すらも。
このときの僕は、時折感じる寒さが何なのか、気づいていなかったけれど。
きっとそれは。
自分の生を肯定してくれる『誰か』を願ってやまない、たったそれだけの――
――『寂しさ』だったのだ。

◆

「おや、ロマニ。まだ寝ていなかったのかい」
呆れた様に声をかける、技術顧問ダヴィンチに、あぁ……と心ここにあらずな返答をするのは、Ｄｒ．ロマン。
広い机の上には資料がこれでもかと積み上げられ、その山に埋もるようにしているロマンに、ダヴィンチは心底呆れたと溜め息をついた。
「もうすぐ決戦なんだから、ちゃんと休めと言っているだろう？　調べ物ならこの万能の天才に任せ給え」
「そう言ってくれるのはありがたいけど……いや、実のところたった今調べ物は終わったんだ。ちゃんと休むよ……レオナルド、君に話すべきことを話したらね」
ナルシスト的な発言とは裏腹に心配そうなダヴィンチにロマンは苦笑し、机から起き上がる。そして、一つぐっと背伸びをすると、そう言った。
「話すべきこと――ああ、確かアダムとスカサハが模擬戦をやったんだろう。それ関連かい？」
「あれは模擬戦と言えるのかな……」
どう見ても殺しあいだった気が、と。ロマンは苦笑する。
ほうほう、と興味深そうにするダヴィンチに、ロマンは「話がずれたね」と軌道を修正した。
「ともかくとして、それは正解。レオナルド、アダムの『制約』についてだ――」

「ほうほう、『カインとアベル』ねぇ。確か人類最初の殺人の被害者・加害者だったかな。あるいは、『カイン』は初めての嘘つきという話もあるけど」
「今回に関しては『嘘つき』の部分はどうでもいい。『殺人』のソレが主題だ」

カインとアベル――そうセットで呼ばれる事の多い二人の人物は、アダム神話においてアダム・イヴ夫妻の間に生まれた息子たちである。

有名な逸話は、それこそ今ダヴィンチが言ったとおり、『人類初めての殺人』。

農耕を主にしていたカインと放牧を生活の軸にしていたアベル。その二人が神に供物を捧げた際、カインは収穫物をアベルは子羊を選んだ。

細かい事情は割愛するが、結果主神であるヤハウェは、アベルの捧げ物にだけ目を向け、カインのソレに見向きもしなかった。

それを恨んだカインは、兄弟であるアベルを殺した――それが、原初の殺人の正体である。

「――なるほどわかったぞ。つまりは、『初めての殺人』を犯したのがカインである以上、それ以前の時代の人物である『アダム』はそれを行えないんだね」

アダム神話において、『殺人』が行われたのはカインの起こしたそれが『最初』だと明言されている。

つまりは『アダム』は生涯『人』傷つける事をしなかったのだ。『彼』が『アダム』として喚ばれた以上、その事実はスキルにすらなるレベルのもの。

それを強制的に守らせる為にも抑止力の介入があって、何ら不思議ではない。

「本人曰く、だけど。他にも原因があるらしい、が、それが一番なんだと言ってたよ。たしかに筋は通っているし、ありえない事じゃない」

だが――と、ロマンは言いかけるが、口を噤む。まるで言ってはいけないことでもあるかのようにをモゴモゴと口を歪ませる彼に、ダヴィンチは首を傾げた。

「どうしたのさ、ロマニ。なにか言いたいことがあるのかい？」

「いや、なに……別に何でもないよ」

本当かぁ――？　とダヴィンチは怪訝な顔をするも、我慢できなかったのか大きなあくびをするロマンに、その追求をやめた。

もういい時間だ。サーヴァントであるダヴィンチには眠気という概念がないが、ロマンはそうも行かないだろう。
飄々としながら、実は誰よりも無理をしているロマンには、一秒でも長い休息が必要だ。
「……まぁ、いいさ。ほらほら、さっさと寝るんだ。その制約も踏まえて戦略や対策は組んでおくから」
「そうか……なら甘えさせて貰うよ、レオナルド。また明日」
「ああ、また明日」
スライドするドアの向こうに消えていくロマンを見て、ダヴィンチは遣る瀬無い気持ちになる。
マスター・藤丸立香もそうだが、ロマニ・アーキマンという男はあれでなかなか抱え込むタイプだ。両者ともにいつもは『自分はへっちゃらです』という雰囲気を出していながら、背中にはとんでもない物を抱え続けている。
あるいは、今回もそうなのだろう。ダヴィンチは現界してから過ごしてきた時間の中で、誰よりもロマンと共にいた時間が長い。だから、わかるのだ。
彼はまた、何かを悩んでいる。しかし、誰にも打ち明けていない。皆を不安にさせない為にと虚勢をはって。重い荷物を見えないように背負い続けている。
立香はアダムという吐き出せる相手を見つけたようだが――果たして、彼は。
本当に遣る瀬無いと、ダヴィンチは息を吐く。
相棒、とすらこちらは思っているというのに。肝心の彼は悩みすら打ち明けてくれないなどと。万能の天才が聞いて呆れる。
「いつか、話してくれよ。ロマニ」
誰もいない観測室に、そんな声が響いた。

◆

「ふぅ……」

部屋(マイルーム)のベッドに身を投げだし、まとめた髪を乱暴に解きながら、立香は溜め息をついた。
部屋の時計はもう夜中を指している。随分と寝るのが遅くなってしまった。
魔術(いつ)礼装(もの)・カルデア制服に取り付けられた窮屈なベルトを緩め、体の向きを仰向けに変えながら、立香はもう一度、大きく息を吐く。
今日は――時間的にはもう昨日の出来事だが――色々なことがあった。
距離感を測りかねていたアダムと親しくなったり、その彼の凄さと、制約を知った。
スカサハをもあしらう武術と強力な宝具を持っていながら――それでも、『人』を傷つけられないアダム。
そういう訳で、最終決戦においての敵、魔術王ソロモンが『人』である以上、大した活躍は見込めない。と本人は自嘲していたが、頼もしい味方には違いない。
今日の一日だけで、立香は彼に半ば依存するかのような心持ちを持ってしまった。
ただの一般人。平和な国日本で一年前までは学生をしていた立香。そんな彼女が人類の行く末を左右する立場にいきなり立たされ、生死の境を何度も彷徨ってきたのだ。
大好きな両親にも、仲の良かった兄(ぐだお)にも、泣いて送り出してくれた親友にも、会うどころか連絡すら取れず――さらには、彼らの生死は立香に委ねられている。
『…さ…むい……』
発狂してしまいそうだった。この世全ての人間を背負い、過去に積み上げられた偉業を背負い、未来に現れる希望を背負い、一度の失敗も許されない悪夢。
共に戦うマシュにはもちろん、英霊達(サーヴァント)にすら打ち明けられない恐怖。
『寒いよ……』
希望であらねばならない。失望させてはいけない。失望されては

ならない。弱い自分を見せてはいけない。何故ならば――サーヴァントたちに去られてしまえば、人理は滅んでしまうから。
無力な一般人、魔術のまの字も知らない彼女がマスターであるためには、英霊達にマスターとして認められるためには――英霊達がそれを望んでいるかはさておき――藤丸立香は『強い』のだと、虚勢をはらなければと思った。
『寒いよ……』
自分は、あなた達英霊が手を貸すに足るほどの人間だと、そう主張し続けなければならない。
無論、それは助けを請わないという話ではない。何事も完璧に進めなければ、人理は滅んでしまうのだから、むしろ積極的に手は借りる。
英霊は、生前英雄だったからこそ英霊なのだ。そんな彼らに、歴史に名を残すほどの偉人達に、ただの一般人が勝てることなど有りはしないのだから。
だからといって、その事実に胡座をかくような無能な上司に手は貸してはくれない――だからこそ。
せめて、心だけは強くあろうとした。
なんの才能もなく、なんの努力をしてきた訳でもない自分が、それでも誇れるものがあるとしたら、きっとそれだけだったから。
それだけは、自分に出来ることだったから。
『寒い、寒い、寒い――』
心が擦り減り続けていく。荒く削られ続け、歪に折れ曲がる。
だが、それでもと。
藤丸立香は虚勢をはる。ひとえに――皆の期待に応える為に。

「アダム……」

だからこそ、初めてだったのだ。
今までどんな英傑に会ってきても、心の弱みだけは見せたことは無かったのに。
痛ましい者を見るような目で見られても、見透かされたように心配

されても、それでも『大丈夫』だと押し通して来たのに。
この人になら見せてもいいと、そう思えたのは初めてだった。
まるで本当の両親であるかのように、威厳と慈愛に満ち溢れているアダム。
彼の柔らかな微笑みが、あの日、「身体に気をつけてね」と送り出してくれた母に重なる。
彼の少し硬い手が、あの日、「頑張れよ」と乱暴に頭を撫でてきた父に重なる。
二度と会えないなんて、思っていなかった。きっとまた会えることを疑っていなかった――だから、彼に依存してしまった。
会えなくなってしまった両親の代わりに、彼に立香は『何か』を求めたのだ。
たった数日の付き合いで何を――と、そう自分が馬鹿みたいに思える。それでも、彼に寄りかかってしまったのだから仕方がない。

『マスター』と誰もが自分を呼ぶ。
親しげに、信頼を込めて、期待を込めて、希望を託して。
『先輩』と、『雑種』と、『同盟者』と、『ご主人』と、呼ばれ続ける。
自分のことを『立香』と呼んでくれるのは、ドクターとダヴィンチちゃんぐらいしか居なくて。それでも、その二人もきっと『人類最後のマスター』を求めていたから。
皆に悪気なんて微塵もないのは、分かっている。皆、自分を認めてくれているのは、わかっている。
――ああ、それでも。
私のことを、『立香』と呼んでくれたのは――『藤丸立香』という意味でそう呼んでくれたのは、きっと彼が初めてだったから。
だから、『彼』に感謝を。
「……よし、明日も頑張ろう」
そう呟いて、立香は目を閉じる。
藤丸立香は、もう少しだけ頑張れる。藤丸立香は、人類最後のマスターとして、もう少しだけやっていける。

彼の言葉が――それが、たった一言の何気ないものだったとしても――立香を立香だと証明してくれているから。

百を超える英霊を率いながら、それでも平凡だったマスター、藤丸立香。

彼女の事を、皆は『マイペース』であると、『豪胆』であると、『肝が据わっている』と、『自分の横に立つのにふさわしい』と、そう評す。けれど、そんなことは誤りで。大丈夫、大丈夫と、自分に言い聞かせ続けただけの仮面でしかなくて。

藤丸立香は、人類最後の希望、全てを背負っているという事実に押しつぶされそうになりながら、一歩一歩踏みしめてきた、ただの人なのだ。

人類を救うなんて高尚な目的を達成している実感はない。実感を持ってしまえば、途端に潰れてしまうほどの弱い人間だと、藤丸立香は自分を理解している。

だからこそ、最も新しい人類は、願いを一つだけ持った。

全てを担う役割と知っていながら、最後の望みだと知っていながら、知ったことかと。

――ただ、生きるために命を懸ける。

自分が生き抜けば、誰かを救える。

自分が生き続ければ世界は救われる。

なんてわかりやすい、なんて単純なハッピーエンド。ゆえにこそ、藤丸立香はそれだけを願ったのだ。

――私が２０１７年以降も生きていられるように――

そんな、自己中心的でおおよそ救世主らしからぬ――しかし明確な願いの為に戦った。

奇しくもそれは、最も古き人類の生前と――

そして、数日後。

人理継続保証機関・カルデアは、人理修復の旅（グランド・オーダー）の終着点――魔術王ソロモンの待つ玉座、『冠位時間神殿』へとたどり着いた。

冠位時間神殿ソロモン

『人生に生きる意味を、戦いに決意を』

ぽつりぽつりと、雨粒が落ちていく。

ようやっと冬が明け、雪解けが始まった今日この頃。過ごしやすい春に向けて期待を高めていく僕は、今日も今日とて食糧難だ。

流石に、先日のように飢え死ぬ程の危機ではないにせよ、相変わらずの明日をも知れぬ日々に変わりはなく。雨が降っていたとしても、それはそれ、として探索に赴かない訳には行かないのが現状だ。

しかし、もう一度言うが、先日のような事態に陥ることは無い。まだ冷たくとも湖は溶けきっているし、動物たちもちらほらと見かけ始めているのだ。植物もせっかちなものは芽を出し始めた――つまり、探せばなにかにはあたるだろう。

今年の冬も何とか無事に乗り切れた。いや、ついこの間まで死に体だったのはまぁ、置いておくとして。

ともかく五体満足。空腹であるにせよ、それは仕方のない事と割りきって、むしろなにも病気を患っていないことに感謝を捧げるべきだ。

――それを何に対して捧げるのかは分からない。自身が存外強靭な身体持っていることにか、あるいはその身体をつくる素となった数多の命達にか、あるいは――運がよかったことにか。

なんにしても、祈りと感謝は大事だ。なんの効果がある訳でもないが、それでも。しないのとするのではきっと雲泥の差だと思う。誰かが聞き届けてくれる訳ではないにせよ、気持ちの持ちようとは大切なものなのだ。

「――くしゅっ――ああ、寒い」

――相変わらずの寒さ。冬が明けても変わらない原因不明の寒気は、それこそ物心ついた時から感じているもの。

夜でも昼でも、体調が良くても悪くても。突発的にやってくるそれは、きっと良くないもので、いつか治すべきものだと思っている。
――それこそ気の持ちようが原因ではないかと、最近ではそう考え始めた。
あるいは、この寒気こそが僕の弱さの根源であり、心の脆弱さの発露である気がしてならない。
もちろん、本当は僕が病気であるだとか、僕という種族にはそういう特性があるだとか、それだけなのかもしれないけれど。
ただの勘だ。
けれど、僕の勘は当たるから。
それに、病気でなくて、心の病ならば、僕にも治せる。
なんせ僕自身の事なのだから。自分の心ぐらい巧みに操って見せなくては、他に誰かやれるというのか。
「強く――もっと強く」
原因不明の寒気も、時折覚えてしまう不安も。軽く笑って突っぱねるぐらいにならなければと思った。
そんなちっぽけな病気ぐらい跳ね除けられるようにならなければと思った。
何故か、と問われれば、答えにくい事甚(はなは)だしいけれど。
『幸運』も『直感』も――そんな不確定で、不明瞭な手助けに頼ることなく、ちゃんと二本の脚で踏みしめて歩いていけたとすれば。
自分の弱さのせいで生じる様々な危険を、正真正銘たった一人で越えていけると示せれば。
「僕にも、きっと――」
生きた意味があった、とそう言えるのではないか。
そんな馬鹿なことを考えた。

◆

「――ふぁあ」
心地良い温もりから起き上がって、立香は一つ大きなあくびをす

る。
寝ぼけ眼を擦ると、ぼやけた視界がしだいに明瞭になっていった。
やっとの覚醒。立香にとって朝は別段苦手な訳ではないのだが――今日ばかりは、起きるのを体が拒否しているような気がした。
ゆるゆるとベッドから降りて、魔術礼装・カルデアに袖を通す。しっかりと各所のベルトを締め、立香は鏡の前に立った
「……酷い顔」
特別美人ではないにせよ、快活な印象を与える雰囲気の明るい顔だと自負していたのだが。今日は目覚め直後というのを考慮しても、まるで幽鬼のような印象を与えるぐらいの有様だ。
――それも当然か。
立香は一人ごちる。
今日は決戦の日。
――２０１６年１２月３１日。人理修復のデッドライン、あるいは、滅亡の終わり。
あと十数時間で人理は滅び、その存在を跡形もなく消し去るであろう。そうなるか否かは、自分にかかっている。
今日この日の為に、藤丸立香は頑張ってきた。死線という言葉では足りないほどの修羅場を幾重にも潜って。一歩間違えば全てを無駄にしてしまう場面で、たった一つの正解を掴みとって。
頑張って、頑張って、頑張って。やっとこれが最後の戦いだ。
やっと達成される。終われるのだ。藤丸立香は、この戦いを終えればまた安らかな生活に戻っていける。
大丈夫。こんな戦いがなんだというのだ。今までに越えてきたものと何も変わらない。いつもとなんの違いもない――ただ、命を懸けた戦場に赴くだけじゃないか。
「ホント、私なんかに務まる役割じゃないんだよなぁ……」
でも、やるしかないよね。そう苦笑する。
鏡の下、取り付けられた棚から簡素なヘアゴムを取り出し、口に咥える。
長く飛び跳ねた――おおよそ日本人とは思えないほどに鮮やかな

――橙色の髪を、立香は束ねようとして――

――ポロリと、ヘアゴムを落とした。

「あれ……」

カチリカチリと、耳障りな音が鳴る。腕がプルプルと震えて、髪を握ることすらままならなくなる。

ゴムを落としたのは、自分の口が酷く震えていたからだと、立香はようやく気づいた。

「おかしいな……こんな……」

こんなことなかったのに。

今まで、特異点に赴く朝でも、こんなことはなかった。前の晩恐怖に震えていても、一度寝れば人類最後のマスターとしてのスイッチを押せたのだ。

それなのに、今更、『怖い』だなんて。

「……だいじょうぶ……大丈夫」

震えを無理やり抑えこむ。守るべき人の顔を思い浮かべる。救うべき人の顔を思い浮かべる。大丈夫、まだやれる。そう自分に言い聞かせる。

自分のちっぽけな怖さがなんだ。死の恐怖がなんだ。

サーヴァント達は、生前も聖杯探索（グランド・オーダー）中も自分とは比べ物にならない恐怖に立ち向かってきたのだ。

カルデアのスタッフたちは、寝る間も惜しんで人類の未来の為に尽くしてきたのだ。

――マシュは。あの優しい後輩は、酷く短い寿命しかなくて、それを恐らくは知っているのに、それでも自分の相棒として戦い続けてきたのだ。

ならば、自分が恐怖に震えてどうする。

今までの人生で英雄たちのような試練にも出会わず、十分に睡眠の時間をもらって、人並みの寿命と健康な体を持っていながら。

それでも恐怖を口にするのなら――それでは、生きている意味がない。

立香の願いは一つだけ。

自分が背負うことのできるものなどたかが知れている。だから、背負っているのは一つだけ。
――『生きること』。
生きている意味を失ってはいけない。
今の立香にとって生きる意味とは、マスターとして最後まで戦うことなのだ。
恐怖に身を竦ませてしまっては、戦場ですぐ死んで仕舞うのは自明。
自分が死ぬということは、すなわち、人理が滅ぶということだ。
「――生きるために、命を懸けて」
無意識に呟く。
この言葉を、いつ聞いたのだったか。
何処か遠い昔だったような気もするし、つい最近の事のようにも思える。
どちらにしろ、今の自分にとって、これ以上の激励はない。
自分は死ぬために戦うのではなく、生きるために戦うのだと、その再確認だ。
――気づけば、震えは止まっていた。
「よしっ」
気合を入れて、髪を結ぶ。ちらと鏡を見れば、ちょっとはマシな顔になっているとわかって、立香は安心した。
「――生きるために」
鏡の中の自分を、真っ直ぐ見て、もう一度。
映った表情に、いつもどおりの自分であると、立香はそう確認して。
マイルームの出口の扉に、そっと手をかけた。

◆

「いよいよだね……」
「ああ、ロマニ。いよいよだ」
カルデアの碩学、文字通りの頭脳としてこれまでを越えてきた二人

――元医療部門トップ、現所長代理のロマニ・アーキマンと、万能の天才レオナルド・ダヴィンチは、真っ赤に染まったカルデアスを見ながら呟いた。
いよいよ、という言葉には万感の思いが込められていた。ダヴィンチは勿論だが、ロマンにとってはより一層、その思いは強かった。
ちょっと世界が滅びる未来を見たから――そんな馬鹿げた、しかし本人にとっては至って真剣な理由で、ロマンはこの戦いに身を投じた。
何が原因で、誰が主犯で、誰か味方なのか、それすらもわからないままで。それでも、見えた『未来』は絶対のものであるから、諦めるなんて出来るわけもなくて。
『人』としての不便を痛感しながらも、戦い続けた。そしてそれは、ようやく終幕を迎えようとしている。
「レオナルド――」
「ん、何かな」
深刻な顔をして、ロマンはダヴィンチの方に振り向く。いつもはナヨナヨとした雰囲気のロマンだから、今の彼はまるで別人のようだった。
「――今まで、ありがとう。君がいてくれて、本当によかった」
「……よせよ、そんな、まるでコレが最後みたいに」
「そう、だね。でも、ごめん。言っておきたかった」
突然にロマンが吐き出した感謝の言葉――それも、心に強く響いてくるような真剣なもの――に、ダヴィンチは少しだけ嫌な予感がした。
ロマニ・アーキマンは臆病者だ。
ずっと側で働いてきたダヴィンチにとって、その評価というのは妥当かつ当然のものであり、彼を最も的確に表していると自負している。
しかし――そんな臆病者の彼は、臆病者であるが故に努力家で勤勉だ。そして、並外れた精神力を持っている。
立香の持つ心の強さとはまた別の、強さ。

大切な物を失うことに怯え、大切な物を守れないことに臆し、自分如きでは足りないと卑屈であるからこそ、先のことが不安で仕方がない。

故に無理を通し、過労で倒れそうになっても更に目を見開き、体がボロボロになっても頑張るのだ――万全を期すためにと。

だから、彼は臆病者。失うことを許容できない臆病者。命を懸けた戦いなんて、きっと顔を真っ青にして拒否するに違いない――なのに。

彼の口から出た言葉は、そして何か思いつめているような顔はまるで、これから死地に赴くかのようで。

戦友のそんな様子に、たまらなくダヴィンチは不安を覚えてしまったのだ。

「アダムにね、言われたんだよ。『伝えたくても伝える相手が居なければ意味が無い』ってさ」

「……」

「ほら、レオナルド、エルサレムの時には急にいなくなっちゃったし。君って、そうやって意外と仲間の為に命張れるからさ。だから、今のうちにって」

捲し立てるように言うロマンに、きっと嘘はなかった。ダヴィンチに感謝しているのも、それを話すことができる今のうちに伝えたかったのも、本当には違いないのだろう。

――よく言うよ、君だって別れも告げず居なくなるつもりなんだろう？――

そう聞こうとして、けれどダヴィンチはそれを発することが出来なかった。

その疑問を口にしたが最後、ロマニ・アーキマンという男にとって一世一代の決意の様なものを揺らがせてしまう気がしたのだ。

だから、我が道を行くという質（たち）のダヴィンチには珍しく、少しばかり口を開いては閉じてを繰り返し、そして結局はその疑問を押し込めた。

「――そうかい。ならば、この私からも同じように返しておこうかな。

キミが戦友で良かったよロマニ。学者としてもサーヴァントとしても、いちカルデア職員としてもね」
「そうかな。そう言ってくれると、頑張ったかいがあったよ」
はにかむようにしてロマンは笑う。芯のない優男ふうの笑みは、それでも誰より決意に満ちていた。
「……じゃあ、私は座標観測システムの最終調整をしてくるよ。ロマニは精神統一でもしておくといいさ。最終決戦でヘマはしないでくれよお？」
「わかってるよ！　大丈夫だ、信じてくれ」
「――ああ、信じてるさ。誰よりも」
漢らしい顔で言うロマンに、ダヴィンチの呟きは聞こえなかっただろう。しかし、呟きと同時に振り向いたダヴィンチの優しげな笑顔に、ロマンが安心したのは間違いなかった。

「――今更覚悟が決まっていない、訳じゃないけどさ」
だけど、ダヴィンチには感謝だけを伝えた。別れの言葉なんて言いたくなかった。
『皆で生きてこそ初めて成功』なんて、子供みたいな馬鹿げたスローガンを掲げ、しかもそれを守り通してきたカルデア――そのトップの自分が、自殺するつもりだなんて。
例えダヴィンチが察していたとしても、それを伝えるのは憚られたのだ。
「怖いなぁ……まだ僕は……情けない」
死ななければ、なんて。考えるだけで身が竦む。せっかく拾った命を自分の意志で手放すなんて信じられない。正気の沙汰ではないだろう。
けれど、自分の死が――宝具まで使った壮大な自殺が、皆を助ける一手になるのなら。それも悪くは無いかな、なんて思っている自分がいるのだ。
ロマニ・アーキマンという男は、ソロモンとは違い臆病者で優柔不

断で。大切なことをダヴィンチ以外には――彼らは大切な仲間であるはずなのに――告げることが出来ず、ついにここまでズルズルと来てしまった。
死ぬか生きるかのそんな簡単な二択すらも決めれずに、今でもまだ迷い続けている。
「けれど、覚悟を決めないと」
そうやって、ロマンは儚く笑う。
死ななければ、人類は滅ぶ。だから死ぬ覚悟ぐらい決めなくては。
立香もマシュも、あんなに幼くて可愛らしい女の子たちが、命を顧みずに戦っているのに。これじゃあ、大の大人が情けないじゃあ無いか、なんて。
そんならしくもないことを、臆病者（ロマニ）は考える。
臆病者でも、卑怯でも、それでも捨てられない物がある。諦めきれない物が、大切な物が沢山あった。
だから。
――ああ、こんな僕でも、こんな決断一つで世界を救った人間の一人になれるのならば。
それはとても、浪漫のある話じゃないかと。
ロマニ・アーキマンは笑って、その命を投げ捨てる決意を満たした。

◆

マシュ・キリエライトはムクリとその体を起こした。
先程まで聞こえていたソロモンの甘美な誘惑は、今では嘘のように聞こえない。
夢で見せられた、永遠の生、不老の体――それを、全人類が持った理想の世界。
マリスビリー・アニムスフィア主導のもと作成されたデザインベビーであり、故に短命で成人すら出来ずに死んでいくマシュにとって、その世界というものは、確かに憧れではあった。
沢山の人達と関わり、別れも無く、皆で笑い合って緩やかな時を過

ごしていけるというのは、きっと幸せな日々なのだろう。
――けれど、マシュにとってそれはきっと生きているとは言えないのだ。
カルデアの外の世界の空すらも知らずに、無菌室で過ごしてきたモノクロの日常。そんな世界に現れた、眩しいほどの色彩。
辛いことも、怖いことも沢山あった。敬愛する先輩のサーヴァントとして不足を感じたことなど数え切れない。
それでも、きっと、楽しかった。間違いなくマシュ・キリエライトという人間は、この時に生きているのだとわかったのだ。
だから、それでいい。
穏やかな変化のない永遠よりも、きっと。鮮烈に輝く一瞬をマシュは望んでいたのだ。
――死ぬのは怖くて仕方がないけれど。
それでも、マシュにとっての生きる意味は確かにここにあるのだと信じて、彼女は扉に手をかけた。

「あ、アダムさん。おはようございます」
「ああ、おはようマシュ。気合が入っているね」
「ええ、それはもちろん。最後ですから、これまで以上に頑張らなくてはと」
廊下を歩いていれば、マシュはアダムと鉢合わせた。
相変わらずの柔和な笑顔に、思わずくらっときてしまいそうなマシュであったが、数日も経てばなれたもの。一つ深呼吸をして心を落ち着かせた。
そんなマシュに、アダムは苦笑する。自分が強大な存在だということに慣れていないせいか、こういった反応は苦手なのだ。
「――あ、二人とも、おはよう」
「おはようございます、先輩！」
「おはよう、立香。よく眠れたかい？」
暫く歩いていると、立香が合流してくる。いつもより心なしか元気

が無いように見える彼女だが、それも仕方ないことなので二人は特に追求することもしなかった。
アダムは確信、マシュはなんとなくのレベルではあるが、立香が無理をしていることには気づいている。
それでも、無茶を通して強がるというのに二人とも経験があって、それがなければ立てないこともあると知っているからこそ、「やめろ」とは言えなかったのだ。
だから「おはよう」と、いつもの通りに声を掛けた。たとえ決戦の朝であろうとも、いつも通りに。そのおかげか、立香の顔も少しは明るくなったようだ。
「――うん、大丈夫。決戦だもの、体調は万全にしてるよ」
「それは良かった」
優しい笑みを浮かべて、アダムが言う。立香もほにゃりと安心したように頬を緩めると、二人とともに歩き出した。

「マシュ、その――今回のレイシフトなんだけどさ」
いくらか歩いた後、意を決したようにして立香が口にした。立香が歩いているのは一番前のため、見える後ろ姿だけでは表情を窺い知れないが――何か懊悩を抱えているのは一目瞭然だった。
「はい？　なんでしょうか」
「今回、マシュは……その……残っていて欲しいなって」
言いにくそうに立香は言う。
これまでに自分と共に歩んできてくれたマシュにこんなことは言いたくなかった。唯一無二の相棒なのだ。最後の戦いも彼女と駆け抜けたいし、彼女もそれを望んでいるだろう。覚悟も決めているはずだ。
それでも、言わずには居られなかった。唯一無二の相棒なのに――だからこそ、残っていて欲しい。
彼女の身体は戦いに参加しようとしまいと長くないことは知っている。もしかしたら、決戦の間養生したとして、命の終わりがたった一日二日伸びるだけかもしれない。

それでも、彼女には一秒でも長く――生きていて欲しかったのだ。
「……」
暫しの沈黙。
敬愛する立香の言葉を聞いたマシュは、その意味をしっかりと咀嚼する。
――先輩はきっと、私のことを大切に思ってくれているから、そう言ってくれるのですね。
それはとても幸せな事だ。自分にとってかけがえのない人の大切なものとして認められたなら、今すぐ歓喜の涙を流してしまいそうなぐらいに、嬉しいことだ。
だから、それでいい。その言葉を聞けただけで、その事実を知れただけで、マシュは満足だ。
――私は、先輩のサーヴァントですから。
「ありがとうございます、先輩。……でも、そのお願いは聞けません。私は、きっとただ生きるだけではダメなのです。貴女の隣に立って戦うことが、私の生きる意味ですから」
「……そっか」
見惚れてしまうような笑みで、マシュは言う。
その笑顔が悲壮に満ちたものではなく、幸せそうな、とても綺麗なものだったから、立香は。
「なら、頑張ろう。きっと勝って、二人でカルデアの外に出かけよう。ね？」
「……ええ、ええ！　それは楽しみです。きっと、忘れられない思い出になります」
認めてしまったのだ。マシュの決意が、かけがえのないものなのだとわかってしまったから、立香はマシュと共に戦おうと決めた。最後の一秒まで、彼女と共に、と。
――失ってしまうかもと、わかっていても。
「……わっ…」
突然、頭をくしゃりと撫でられる。横を見れば、マシュも同じよう

にその薄紫の頭を撫でられていた。
「……全く、僕の前で死ぬか死なないかなんて、そんな話をするんじゃあないよ。本当に、本当に、ね」
成長して遠いところに行ってしまった我が子を見るような顔で、アダムは二人の子供を撫で付けていた。
立香とマシュは驚く。今まで他人との接触を極力避けていたアダムが、二人に触れたことに。
曰く、あるスキルのせいで本人の意志関係なく強烈な母性・父性を叩きつけてしまう彼は、接触による他人への精神干渉を嫌っている。触れることで相手の心が乱れてしまうのを恐れているのだ。
けれど、彼は触った。随分と迂闊――しかし、立香とマシュは気づいた。心に対する不自然な作用を全く感じないのだ。
彼と対峙していると常に感じていた、心の高鳴りも、甘えたいという欲求も、激しい衝動も、何も感じない。
加えて『アダム』の象徴たる、強大な父性・母性すらも。
「アダム……？」
「だいじょうぶ、大丈夫だ……僕が、僕がいる限りは――」
呟く彼は、まるで――見た目相応の少年のようで。
立香とマシュは、今の彼こそが――なんの根拠もないけれど――『アダム』という殻に押し込められた『彼』自身の発露なのではないかと思った。
「――二人とも、死なせない。守り切る」
子供を守るのは親の役目じゃないかなんて、そう彼は言った。
いつもより威厳もなく、包容力もなかったけれど。
それでも、二人はこれまでにない程、安心できた。
「――うん、お願い。頼りにしてる」
頼りにされるのが生き甲斐、と彼は言っていたから、立香はそう返した。
立香の言葉に、アダムはいつものどこか大人びた顔を緩めて、ほにゃりと、柔らかく笑った。
「――ああ。こと『人』を守ることに関して、僕は誰にも負ける気がし

ない、だから、安心して進むといい。きっと、背中は守ってみせるさ」
そんな風に優しく言う彼は、しかし、直ぐに恥ずかしそうにして笑みを引っ込めた。
そして、二人の頭から手を離す。――あっ――と、誰の口からか名残惜しげな吐息が漏れた。
「……ああ、ちょっと変なことしちゃったなぁ。触れるのは避けてたんだけども。二人とも、平気だった？」
「ええ、大丈夫です」
「うん、へーき。それに、撫でてくれて嬉しかったよ」
「――そっか、それならよかった」
手を離した彼は、また元の偉大な『アダム』の雰囲気に戻っていた。
それを立香とマシュは名残惜しく感じる。
『アダム』という役割を演じることを強制されている彼の、本当の姿――それを見た。
『彼』は英雄らしくもなく、偉人らしくもなく、ただ、壮絶な死地へと向かう子供に心を痛める――普通の人間のようであったけれど。
しかし、立香にとってもマシュにとっても、何故か――これほど頼もしい人はいないと、そう思った。
願わくば、また『彼』に会いたいものだが――それならまずは、この先の決戦を、生きて終える事にしよう。
約束をした。やりたい事もいっぱいある。
なら、あとは生き抜くだけなのだ。
そうして、立香はもう一度気を引き締めて、歩き出す。他の二人もそれに続いた。
――ある者は生きるために
――ある者は生きる意味を貫くために
――ある者は情けない自分を律して
それぞれの決意を胸に、いま静かに戦いの幕は上がる。
結果は2つに1つ――滅亡か、存続か。実にシンプルなその答えを得るために、随分と長い道をかけてきた。

現在、西暦２０１６年１２月３１日、午前６時１７分
人類滅亡のデッドラインまで、残り１８時間を切った頃だった。

『だから、また』

くぁ、と欠伸が漏れる。
春の麗(うら)らかな陽気に当てられて、つい眠ってしまっていたらしい。
ゆっくりと伸びをしながら体を起こすと、そこはいつもの『湖』の畔。寝る前のことを思い出してみれば、採集の合間の休憩に来たのだったとわかった。
自分が先程まで横になっていた傍らには、木の実や薪などが散らばっている。もしかして寝てる間に盗られたかも、と掻き集めてみたが、少なくとも減ってはいないようでホッとした。
春になったおかげか、動物たちも多く見かけるし、木の実や山菜も取りきれないほどに沢山発見できた。
暫くは過ごしやすい季節。だからといって、怠けるわけではないが。まぁ、生きやすいというのは有り難いことだろう。
それはそれとして、当面の食料は確保できたので、今日は特にすることもない。久方ぶりに落ち着いた気がして、ちょっと感慨深いと思った。
「……」
無言で湖を眺める。動物たちの群がるもう一つの方とは違ってちっぽけなサイズだが、冬でも凍らないし、嵐の後でも澄んでいる、不思議な湖だ。
この一帯では、凶暴な肉食動物や危険な毒草などを見かけない。見かけるのは色彩豊かな花々や温厚な小動物達だけで、過ごしやすい。
畔で昼寝をしても心配がないなんて場所は――僕が昼寝なんて真似を出来る場所は、世界でここぐらいのものだろう。
ぼうっと、空を眺める。蒼々(あおあお)とした遥かな天井に、自分の存在というものがちっぽけに思えて仕方がなかった。
この世界は、何処まで続いているのだろう――そんな、生きる事に必要とも思えない、取り留めのないことを考えた。
余裕のある生活は、必死さというのを損なわせる。踏ん張った脚を

優しく撫でられ、食いしばった歯を緩めさせてくるような、酷く穏やかな時間。
頑張ったね、良くやったね、暫く休もうか。そう言われているようで。
生きる意味を持てない身からしてみれば、それはとても危うい誘いであった。
――今休んだとして、次立ち上がれる自信が湧いてこない。そう考えて、生きる者として失格だと自嘲する。
このまま生きていていいのだろうか、と冗談抜きにそう思うのだ。
他の動物達と違って、生きているだけでは物足りないと感じてしまう自分は、きっと異常なのだろう。
生きているだけで幸せ。それがこの世界の共通認識なのに。
皆、その為に日々死力を尽くしているのだろうに。
「……でも……」
それでも、生き残ってしまったから。手前勝手な事情で、今まで殺してきた彼らの命を無駄にしてはいけないから。だから、その義務感だけで生きている。
あの日。もう記憶にも残っていない、初めて命を喰らったであろうあの日。
自分ではない誰かの命を奪って、自分の命を繋げたあの日。もはや引き返せなくなったあの瞬間に。
――こんなふうに虚しく生きるぐらいならば、やめておけ。その日に戻って言ってやりたかった。

「さて」
ウジウジしていた自分を叱咤するように一声あげる。日も沈んできたので、もう拠点に帰らなくてはならない。いつまでも考えにふけっている時間はなかった。
尻についた草を手ではらい、枝や木の実を持って立ち上がる。それから小さな欠伸を一つして、歩き始めた。

「――ん、」
暫く進めば、茶色い物体が草の上に落ちている。リスか、はたまた木の実か――なんにしろ、確認してみようと屈んでみれば、それは予想を裏切って全く別のものだった。
「小鳥？」
見たこともない種類だと思った。鳥というのはよく見かける動物の一つだが、少なくともこんな鳥をこの近辺で見かけた事はない。
季節3周分ぐらいはここにいるはずなのに、初めて見るというのは珍しいこともあったものだと、その鳥を見ながら思う。
草の上で蹲（うずくま）っているのだから、飢えているのか、それともケガをしているのか。
なんにせよ、都合がいいことには変わりがない。
空駆ける鳥達を撃ち落とすなんて到底不可能で、仕留めたことなどないのだが、目の前の獲物は動く気配がない。つまり、好都合というやつだ。
どうやって食おうか、どうやって生活の足しにしようか。
自然にスッと手を伸ばして――そして、止まった。
「……食料に、余裕はあったよね」
この時の自分は随分と不思議な判断をしたな、と今でも思うのだ。
「……」
ほんの気まぐれだ。食料供給に余裕がある季節――それに反して余裕のない精神状態。
安穏とした日々を送ることに苦痛を感じ、何かを変えなければならないと不明の焦燥感にかられて、時を過ごす毎日。
こんなことをしてしまうぐらいに、この時の僕は切羽詰っていたのだろうと、そう思う。
地面に転がった小さな小さな鳥を、優しく抱き上げる。
僕への恐怖からか体調の不良からか、ふるふると小刻みに震えるちっぽけな命が、とても哀れなものに思えて仕方がなかった。
手のひらの上にのった茶色い羽根がちょこちょこと動いてくすぐったい。半目にあけられたつぶらな瞳が、こちらをじっと見つめて

くるようだ。
その姿の、挙動の、一つ一つが、まだ生きる事を望んでいるのだと痛く理解してしまって。
その様子を見た手前、殺して腹の足しにするどころか、このまま放置していくのさえ憚られてしまって。
とどのつまり――僕は、ほんの気まぐれで、この小鳥を助けたいと思ってしまった。
「なんで、こんなこと……」
生きるために必要ではないことだ。むしろ、折角の食料を無駄にして、それどころかその命を助けるなど、生きる気が無いとしか思えない。
けれどなんとなく、やってしまったことだった。そして、これはやるべきだと、そう思ってしまった事でもあった。
「……帰ろう」
歩き出す。
手のひらにのった小さな温もりが、少しだけ動いた。
芯から身を凍らせていくような寒さが、ほんの少しだけ和らいだ気がした。

◆

立香たちがカルデアスのあるレイシフト・ルームに行けば、そこではカルデアの職員たちが忙しなく機器を操作していた。
スライドドアの音がしたからか、こちらをチラリと見て、笑顔で会釈をする職員たち。立香とマシュ、そしてアダムもそれに返した。
部屋のど真ん中、赤いカルデアスの前ではロマンとダヴィンチが話し込んでいる。立香達が近づくと、気づいた二人は「おはよう」と笑顔を浮かべた。
「よく来てくれた。こんなことを言うのもアレだが、調子はどうかな？」

「大丈夫。ちゃんと眠れたし、コンディションもばっちし」
「私も、先輩のデミ・サーヴァントとして、戦う準備は万端です」
「うーん、二人とも頼もしいことだ」
全人類の未来を背負っておきながら、よくぞそこまで――と声には出さない。
そんな事を口に出せば、自分の中で未だに燻っている臆病なロマニ・アーキマンという存在が起き上がってきそうだったからだ。
立香のように、マシュのように、強くはあれない。そんな諦観とある種の劣等感が首をもたげる。
自分より幼い少女達に頼りきりとは、かつては魔術王などと呼ばれていながら、情けない。そうして、ロマンは自分を責める。
しかし、そんな様子を傍らから見ているダヴィンチやアダムからしてみれば、そんな考えは酷い見当違いに他ならない。
二人は、ロマンが臆病者でありながら誰よりも強くあろうとしていることを知っているし、そもそもそれは立香やマシュも同じだということも分かっている。
他人を救い、失敗しないように、大切なものを守れるように、強くあろうとするただの強がり。それが三人の強さ――に見える何かの正体だ。
そういう意味では、ロマニという人間と少女二人との間に、何か違いがあるわけでもないのだから。
「……ロマニ、これから行く特異点は、一体どういう所なんだい？」
ロマンが『何かくだらない事を考えていそうだ』と、アダムは話題の転換を図る。ロマンはハッとしたように顔を上げると、一つ咳払いをして話し始めた。
「そうだ、悠長に話している時間も無かったね。では、最終特異点、『冠位時間神殿ソロモン』について説明しよう。加えて、今回のレイシフトの作戦内容も、ね」

◆

遡ること1週間ほど前、ちょうどアダムが召喚されて数日経った頃。

カルデア内で最も広い大会議室では、カルデアのスタッフや識者のサーヴァントたちが集まり、最終特異点攻略に当たっての作戦を考えていた。

この時はまだ時間神殿の座標を特定できておらず、ただただカルデアが其処に向かって引っ張られていくだけの状態だったので、当然敵の戦力すらわかっていない。

しかし、今までのレイシフトから考えて、敵の戦力の推測はできる。その為のカルデア、その為のサーヴァントなのだから。

「当然だが、敵の戦力は『魔術王』に加え『７２の魔神』だ。いや、最低でもソレってだけで、まだ増える可能性も――対抗する為には、どう考えても６人のサーヴァントだけでは足りない、わかるだろう？」

第七の特異点、『絶対魔獣前線バビロニア』において立香と縁を結んだ魔術師（キャスター）のサーヴァント、アーサー王伝説に名高いマーリンはそう告げる。

言っている内容とは裏腹のニコニコと人を食ったような笑みが腹立たしいが、半魔である彼に人間の感覚と同じものを求めても仕方ない。

カルデアのスタッフたちと一部の英霊は、『何がそんなにおかしい』と言いたくなる口を塞いだ。

「はぁ……まあ、そうね。それこそ、このカルデアの全サーヴァント――どころか、更に必要とすら思えるけど」

そんなマーリンに呆れたと溜息をつきながらも、同じく魔術師（キャスター）であるメディアは肯定的な意見を告げる。

『６人のサーヴァント』。藤丸立香というマスターの許容量とカルデアの電力、その２つから考えて、同時運用できるサーヴァントは最大６人まで、というのが今までのレイシフトの通例だった。

立香の成長やカルデアの復旧もあり、聖杯探索（グランド・オーダー）開始当初よりは運用性能も上がった方なのだが、それでも高次元（☆5サーヴァント）の英霊や強力な効果の礼装（☆5概念礼装）を使おうものなら、途端にキャパオーバーを起こし

てしまう。
先ほどの6人までというのも、最大人数というだけで、編成によってはそれ以下になってしまうこともざらにある。
一人はマシュとして残りの枠はたったの5人とすると、とても決戦を勝ち抜ける戦力とは言えなかった。
「ふむ……つまりは、マスターとの回路（パス）にもカルデアの電力にも頼らず、最終特異点で現界する術を見つけなくてはならない、ということだな」
「それは……可能なのでしょうか。サーヴァントというのは、そこに居るだけで世界からの排斥を受けます。とても現界を維持できるとは……」
ロード・エルメロイ2世が要点を纏めれば、ジャンヌ・ダルクがそう疑問を口にする。その場にいる全員が、「確かに」と顔を見合わせた。

「できるさ」

ざわりと、その一言に会議室が騒がしくなる。
意外な人物が発言した、という動揺が広がったのかもしれない。
発言者はアダム。この頃はまだ新参――今でも十分そうだが――であったために、あまり他者との親交も持っていなかった（そもそもアダム自身が交流を避けていた）ので、戸惑う者が多かったのだ。
「――面白い。話してみるといい、原初の人間とやら」
にわかに騒がしくなった会議室を宥めるようにして、最古の王ギルガメッシュ――賢王・キャスタークラスの方――が先を促す。
ギルガメッシュの持つ高ランクのカリスマの効果か、途端静かになった部屋に、アダムは少しだけ気恥ずかしそうにしながらも口を開いた。
「英霊召喚、そして現界の維持。それらに必要な条件は主に3つと言っていい」
白い指を3本立てて、アダムは話を続ける。

「一つ、決まった英霊を呼ぶための『縁(えにし)』。これは、立香と君たちが結んだ友誼によって――あるいはそれで足りないなら、それぞれの特異点で因縁深い魔神や聖杯を触媒にすれば、クリアできると思う」
　アダムは指を折る。
「二つ、英霊召喚自体の成功率を上げる『儀式礼装』。これも、マシュが持っている盾があれば概ね大丈夫と言っていい。『英霊が集う』という性質は得難いものだ、ギャラハッドが彼女に宿ってくれて感謝だね」
　運が良かった――と呟き一息ついて、アダムは最後の指を折る。
「そして三つ、現界維持の為の大量の『魔力』。これが一番悩ましい所で、今現在、僕達が唯一手にできていない物だ」
　カルデアに居る者達だけで１００を越えるサーヴァント。未だに召喚が出来ていない英霊を合わせれば、もっと増えるだろう。
　それを、いかに通常時間軸を外れた特異点内であっても1日現界させ続けるというのには、途方もない魔力を必要とする。
　人理を救うという戦い故に人類側の抑止力が後押しする可能性があるにはあるが、それでも足りないかも知れない。
「……で？　そなた、『できる』と言うからには、当然その解決手段もあるのであろうな？」
　わかりきった事を繰り返しただけのアダムに、華のローマ皇帝ネロ・クラウディウスは怪訝な顔をする。他何人かからも、本当に大丈夫なのかと不安そうな雰囲気が漂った。
　しかし、彼は『アダム』。いくら女男のような緩い顔立ちをしていても、間違いなく彼は原初の人間。一級の英霊の一人である。
　その彼が「できる」と断言したのだ。叡智と技巧の化物たるアダムがその判断を見誤るはずが無い――そう、『起源』のスキルの詳細を知っている一部の英霊は、愚問だと黙して見守り、そして耳を傾ける。
「そりゃあ、そうじゃなかったら、出来るなんて無責任なこと言わないよ」
　苦笑して、アダムはピンと指を立てた。いいかい――とそう前置きする。

「魔力は全部僕が受け持とう。こう言うと言葉は悪いが、今は都合よく人類が滅んでいるんだから」
「???」
「いやなに、また誤解を招く口下手で悪いけどね、つまりはだ」
人類が滅べば滅ぶほど強くなる英霊ってのもいるってことさ――と、アダムは悲しそうに笑った。

◆

「以上が、作戦の概要だ。立香ちゃん、何か質問は？」
ロマンの言葉に、立香はただ口をつぐんだままだった。反応できなかったとも言う。
立香が直接率いる英霊は５騎。
唯一無二の相棒たるマシュ・キリエライトを始めとして、贋作者エミヤシロウ、蒼の槍兵クー・フーリン、騎士王アーサーことアルトリア・ペンドラゴン、そして原初の人間アダム。
それ以外のカルデアメンバーは、一度ここで現界を解き――そして、決戦の中空で再召喚される。
立香と共に歩むメンバーの選出理由は、単純に『縁』による召喚に不安が残ったからだ。
アダム以外は第一の特異点から共に歩んできたサーヴァント達のため、立香との絆の面ではピカイチなのだが、なにせ特異点原産の英霊と比べると、どうしても『魔人柱』や『聖杯』との結びつきが弱いのだ。
つまり、土壇場で召喚に失敗する可能性が一番高い英霊たちである。故にスターティングメンバーとして、立香を支えることと相成った。
「……それは、いいとして」
そう、別にそのメンバーについて何か不満があるわけでもない。問題は一つ。
「アダムはそれで大丈夫なの？　１００人のサーヴァントのマスター

代わりとか、正気？」
「問題無いよ。普通なら無理だけど、今は人理焼却中だからね。魔力はほぼ無限にあると言っていいから」
　それこそ聖杯よりもね――と、アダムは何でもない風に言うが、マスター業には一家言がある立香にしてみれば、本当に狂気の沙汰としか思えない。
　長時間のサーヴァント維持に相当慣れた立香であっても、ギルガメッシュ・マーリン・スカサハ・山の翁なんて馬鹿げた編成をした日には意識が5分も保たない自信がある。
　彼我の魔力量に差があるというのは当たり前のことだが、それでも心配してしまうのは仕方のないことだった。
「アダムさん……」
「……とにかく、悪いがこれは決定事項だ。立香ちゃんもマシュも、理解してくれると嬉しい」
「ドクター……わかった、そうだね。アダムは強いもん、きっと大丈夫だよね」
　ドクターの言葉に立香はそれ以上の追及をやめる。四の五の言っていても、始まらない。アダムに頼らなければ人類は滅んでしまうのだ。
「ああ、任せてくれていいよ。どうせ戦えない身だ、他で役に立てるのなら望むところってやつだね」
　胸を張ってそこに拳をドンと当てるアダム。芝居じみたオーバーな返しに、立香とマシュは、少しだけ笑ってしまった。
　すると、和んだ空気を切り替えるようにして、ダヴィンチが一つ手を鳴らす。ゴツゴツとしたガントレットのせいか、ガツン！と大きな音がした。
「はいはい、そこまで。作戦を理解したなら、さっさと始めるよ。もう準備は万端、スターティングメンバーたちも集まった。あとはロマニのゴーサインが出るだけなんだけど」
「ああ、すまないレオナルド。つい、ね」
　ロマンはダヴィンチの言葉に「それじゃあ、また」と立香たちに手

を振ると、レイシフト用の機器へと駆け出して行く。立香たちも「また」と返した。
「――いよいよ、ですね先輩」
「うん、頑張ろう」
立香たちも決意を改めて固める。胸に手を当てて深呼吸――激しく胸が鼓動しているが、少なくとも目覚めた時よりは落ち着いているとわかった。
アダムが守ると言ってくれた。ドクターがまた会おうと約束してくれた。
一人で戦うわけではない。ひ弱な自分でも支えてくれるものがあるなら、頑張れる。そう思った。

「――と、その前に他のサーヴァント達との挨拶はいらないかな？再召喚の成功率はほぼ１００％まで押し上げたケド、何事にも完璧はない。いくら天才（私）の仕事でもね――もしかしたら、最後の別れかもしれないよ？」
傍らでロマンの後ろ姿をどことなく悲しげに見つめていたダヴィンチが、そう立香に聞く。
万能の天才を自称するダヴィンチにしては珍しく、自身の仕事を貶めるかのような発言であったが、そこに立香はダヴィンチらしい誠実さを感じた。
「そう、だね」
挨拶ぐらいは――と、そう言おうとして、立香は思い直して首を振る。
「いや、大丈夫。きっとまた会えるから。皆――来てくれないわけがないから」
様々な時代、様々な世界を渡った。いろんな英雄たちと出会って――そして、縁を結んだ。
強がりの自分として接していても、それでも、彼らと結んだ絆は本物だから、きっと確率なんかに負けるようなやわなものではないと思った。

だから、だから。

立香はマシュの手を引いて、コフィンへと歩く。アダムたちスターティングメンバーも後に続いた。

スタッフたち一人ひとりの顔を見る。必死に機器に目を通す者、祈りを捧げる者、落ち着かないように目を彷徨わせる者――色々居るけれど、だれも諦めている者など居なかった。

マシュと共にコフィンに横たわる。

アダムに微笑み、ロマンに最後に手を振って、目を閉じた。

――アンサモンプログラム　スタート――

「――だから、また」

――霊子変換　を　開始します――

最終特異点：『冠位時間神殿・ソロモン』

『そうして、最も古き人類は、貴方を見守るのです』

さぁ、戦いを始めよう。
狂ったように強がって、強がり続けて疲れ果て、疲れ果てても諦めず――
そうして戦い続けた最も新しき人類の、最期の試練を見届けよう。
彼女の通った航跡が手にした未来、繋いだ希望、結んだ絆――その全てが見届け人。
拙くとも、愚かしくとも、それでも懸命に走った彼女の軌跡。それに引き寄せられた数多の英雄たちが彼女の剣となり、盾となる。
時代を作り上げた一廉（ひとかど）の英雄たち、その全てが彼女を見守っている。
――その英傑たちの中では、最も古き人類すらもその姿を見ているだろう。
そこにそうするべきという義務しかなくとも、そこに彼自身の意思などなくとも――
それでも、彼は彼女を見守る権利を与えられたのだから。

彼女の作り上げた物語、そのほんの一端。一つの戦いの結びという、小さな断片。
ちっぽけで、しかし綺羅星（きらぼし）の如く輝くその瞬間が、彼に何か素晴らしいものを見せてくれたとしたら。
――彼は初めて、人を信じる（あいする）ことができるのだろうか。

◆

――醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い――

――見ていられない、救えない、救われない、愚かだ！――

――我らが王はなぜ彼らを救わない、なぜ対処しないのだ！――

――聞くに堪えない声、見るに堪えない光景、そんなものはもううんざりだ――

――救っても救っても、彼らはその身を貶める。何度も同じ過ちを繰り返す――

――ならば、救済はただ一つ。許された方法は一つだけ――

――再生ではなく、再興を。何よりも幸福な、新しい世界の創造を――

――例え、今の人理の全てを焼き尽くそうとも――

――我々には、それを成すべき使命がある――

アダムは一人、そんな夢の中を漂っていた。

強烈なイメージ、身を裂くかのような怨嗟と嘆きが広がる。

立香とマシュ、エミヤたちもきっと同じものを見せられているに違いない、とアダムは考えた。

時間神殿――魔神たちの集結する旅の終着点。その中に満ちるほどの想いの塊。自分たちはそれに当てられているのだ。

これは、悲願だ。

魔術王ソロモン――あるいはゲ■■■■が抱いてきた、救いようのないものへの絶望と、それでも救いたいという願いの結晶だ。

「――知っているとも」

人間は醜い、人間は愚かだ。

この身この全ては、世界を救うためにあり、人類を救うためだけに存在する――だからこそ知っている。
人間というものが繰り返してきた凄惨で救いようのない歴史を。多くの人々が今際の際に抱いてきた絶望を。叶わなかった願いを。届かなかった愛情を。
――僕は、全て知っている。
どうしようもなく助けたくて、しかし何度助けても改めない人間。そんな愚かな生き物たちの物語を、ずっと見守ってきた彼は知っているのだ。
「それは――」
きっと、狂おしい程に彼は、■■ティ■は。
人間という存在を諦めながら、それでも、救いたいと想ったのだろう。
「それは――とても、悲しいことだね」
その気持ちはわからない――しかし、理解はできたアダム(彼)はそう呟く。
自分は、数えきれない程の物語(じんせい)を読み続けて、多くの絶望(ひげき)、多くの幸福(きげき)と出会ってきた。
観測とも呼べない、うたた寝の最中の儚い夢を見るように、人の生の残痕を覗いて。すべての人が幸福になる未来など無いと知ったのだ。
だからこそ。
「理解はできないけれど――けれど、僕よりはマシかな。きっとね」
そういって、苦笑する。
自分の意志では誰も救うことなどできない――そんなアダム(じぶん)と比べて、ゲ■ティ■のなんと強きことかと、そう思った。
世界から与えられた役割(ロール)に酔いしれて、分不相応な威厳と能力に持ち上げられて、初めて歩き出せる。それが自分という存在だ。
そう、今回も同じように。

――仕方ないか。そう考えて、『彼』はあの日、英霊の座から一歩を踏み出した。

世界から賜った役職（ロール）は『アダム』そして『イヴ』。

原初の人間らしく威厳に満ち溢れた男――母性に満ち溢れた女性で、二人は『人』を愛してやまない夫婦だった。

それが、後世の人々によって創られたアダム・イヴ夫妻の設定（イメージ）であったからだ。

『人』を見るたびに嬉しくなった。『人』を見るたびに愛しくて仕方がなくなった。傍からみればそうは思えなかったかもしれないが。

ただ、夫婦は自分たちの体質が――洗脳にまで匹敵する親としての魅力が、子供たちには毒になると知っていたから、必要以上に子供たちに近づかなかっただけで、常にそう思っていたのだ。

翻って自分は――さて、どうだっただろうか。

本当の原初の人類が、あの夫妻のようであったなら――それならば、彼らもきっと胸を張って誇れただろうに。

自分のような紛い物如きが祖先（アンセスター）などと。笑ってしまいそうだ。

そうやって自嘲しながら、彼は彼らを愛しているかすらもわからずに、今日も世界に規定された道を歩き続ける。

不誠実にも、不遜にも。

完璧な親の象徴、『アダム』と『イヴ』の仮面を貼り付けて。ただただ、歩みを止めず。

――はて、そういえば。

不思議なことに、気まぐれに、以前鳥を助けた時のように。

カルデアの廊下で泣きそうになりながら、思わず死地に赴く彼女たちの頭を撫でてしまったのは――

一体、何故だったのだろうか。

◆

「――っ、今のは!?。今までにない干渉――強烈な、イメージを……」
「ウルクで見たのと同じ……なのかな」
アダムが目を覚ましてみれば、そこには戸惑う立香とマシュがいた。
顔色を伺えば、自分と同じようにゲーティアの『想い』を見せられたらしいとわかる。予想通りだった。
「ふむ……救われなかった人々を嘆く、怨嗟の声……か」
「酷く、悲しい想いです。これ程の強い思念は、一体――」
立香たちの傍らでは、エミヤとアルトリアの二人が叩きつけられたイメージに真剣な表情を見せていた。
正義の味方を目指したエミヤと理想の国を追い求めたアルトリア――二人にとってはある種感じなれた想いだったのだろう。何処か寂しげにも見えた。
「けっ、生き死にを他人が嘆いて何になるんだ……」
一人、『くだらねぇ』と一蹴するのはクーフーリン。戦場に生き戦場に死んだ彼にとって、人の悲惨な死を嘆くということ自体がお門違いだったのかもしれない。
ただ、口でそう言ってはいても、その想いを完全に否定することは出来ないようで。彼は、それ以上はなにも言わず、不機嫌そうに舌打ちを一つ鳴らすだけだった。

『――よかった！　繋がった！』
彼の舌打ちの音が風に掻き消えたあたりで、カルデアからの通信が届く。血相を変えたロマンの声が響いた。
「ドクター、なにか変です。ここは、この空間は――何かが」
そんなロマンに向かって、マシュは怯えたように言う。この空間に降り立ってから感じる薄ら寒さに、その身が震えてしまいそうになった程、この場所が異質だったのだ。
『――そうだ。そこは間違いなく最終特異点、冠位時間神殿に違いない。ただ、こちらの機器で観測した結果、其処は全て、』
「人類悪の獣、だね、コレは。この空間全てが魔神柱だ」

ダヴィンチが信じられないものを見たかのようにつっかえつっかえ告げると、アダムがこの空間の真実を明かす。
すなわち――この場すべてが人類を滅ぼすための機構、災厄の獣（ビースト）そのものであると。
一同が、驚愕に目を剥いた――その時。
「そう、その通り――随分と鼻が利くようになったな、カルデア」
「――っ、この声は、」
「レフ・ライノール！」
マシュがハッとしたのも束の間、滅多に出さない荒げた声で、立香は突如響いた声の主へと振り向いた。
果たしてそこにあったのは――濃緑色のスーツとハット、そして人の良さそうな顔立ちをした男の姿。
かつて立香たちの目の前でオルガマリー所長を殺し、そして第二特異点で死んだ筈の、レフ・ライノールその人であった。
「よくぞここまで、とまずは褒めておこう。いやはや、まさかたどり着くとは夢にも思わなかった」
「レフ教授、貴方は……」
「本当に、なんという生き汚さだ。どうしてこう、お利口に死ぬなんて簡単なことすら出来ないのかね」
マシュがレフに語りかけようとするが、そんなマシュの言葉に構うつもりはないのか、淡々と罵倒だけを並べるレフ。
そんな彼は、ハァと呆れたように溜息をつくと、忌々しげに立香を睨んだ。
「それもこれも、君のせいだよ、藤丸立香。そして――」
視線をスライドさせ、彼は次に禍々しい空気の揺蕩う空を見上げる。
「君もだ、ロマニ・アーキマン」
ロマンの姿はここにはないからか、レフが見たのは虚空だった――いや、あるいはその方向にカルデアがあるのかもしれない。

聞こえていなかったのか、あるいは思うところがあったのか。返事をしなかったロマンに、ちっ、と舌打ちして、レフは再度立香に向き直った。
「――私の失態、だったのだろうか。いや、そうではない」
独白するようにしてただ一人喋り出すレフに、立香たちは薄気味悪いものを感じた。
レフという男が、化け物じみた――実際、魔神柱という怪物だが――禍々しい雰囲気に包まれているように見えて、仕方がない。
「本性を隠していた同僚。私の善意の見逃しを蹴り、自ら死地に赴いた愚かな４８人目。聖杯を託してもろくに仕事をしない無能ども――ああ、本当に、『人』とは愚かだ。反吐が出る」
「ふん！　慢心してたあんたが悪いんだ、バーカバーカ！」
「コイツ……っ！」
苛立ちを押し込められなかったのか、レフに向かって罵倒を飛ばす立香。とても幼稚な煽りだったが、レフの怒りは簡単にメーターを振り切ったようだった。
「無意味な旅をただ続けただけの、愚者が！　低俗な人間如きがいい気になるな！」
「――は、俺にゃ、お前のほうがよっぽど低俗に見えるがねぇ」
「奴に同意するのは甚だ遺憾ではあるが、ランサーの言うとおりだな。マスターは神殺しまで成し遂げたのだ、拙い旅路であろうとも、非難されるいわれは無い」
激昂するレフに、クーフーリンとエミヤは滑稽だと笑う。そんな余裕の英霊たちに、レフは益々気を悪くしたのか、息を荒くした。
けれど。
「――まあ、いい。余裕ぶっていられるのも今のうち――いくら君たちが頑張ったところで、この先の玉座には絶対に辿りつけないのだから」
いきなり冷静になったようにして、レフは呟く。
彼の体からボトリ、ボトリと皮膚が剥がれ落ち、体内からぎょろり

と赤い目玉が覗いた。
「魔神柱へと変性しています！　マスター、指示を！　ヤツの首を速く取らなくては！」
「アルトリア、速攻！　その首切り落として！」
「いや、立香。もうちょっと言葉を選んで――まぁ、仕方ないか」
アルトリアに向かって物騒な指示を出す立香を、喜べばいいのか諌めればいいのかわからないと言ったふうに、アダムは苦笑する。
結局、今回に限ってはレフが因縁の相手であるということで、大目に見ることにした。
「――ハァァあああっ！」
そうしている間にも、最優たるセイバークラスの中でも五指には数えられるであろう騎士王アーサーは、目にも止まらぬ速度でレフに肉薄する。
瞬きの間に、冴え渡る聖剣の一撃はマスターの指示通りにレフの首へと到達し――
そして、空気が揺れた

「――ぐ、うっ」
「先輩！」
発生した突風に身体が浮き上がりそうになる立香を、マシュが繋ぎ止める。
その風の発生源であるレフの目と鼻の先にいたアルトリアは、咄嗟に魔力放出を発動したものの、数メートルほど弾き返されてしまった。
「――ちぃ、すみません、マスター。仕留め損ねました」
「警戒しろ、変性したぞ！」
エミヤが陰陽の双剣を投影させながら叫ぶ。クーフーリン、アダムも言わずもがなと戦闘態勢をとった。
『我は、ソロモン七十二の魔神が一柱、フラウロス！　情報を司るもの！』
ノイズが走ったような奇怪な声が、その場に響く。

風に煽られて閉じていた目を立香が開けば、そこには異形がそびえ立っていた。
黒く流動する触手のような胴体、そこにいくつも貼り付けられた赤い目玉。
立香たちが初めて戦った魔神柱――フラウロスの顕現だった。
『さぁ、絶望しろ、泣き叫べ、愚かなカルデアのマスター、最後の希望よ！』
立香たちをまるで嘲笑うようにして、フラウロスは口上をたれる。
『君たちが玉座に辿り着くことは永遠にない！　なぜなら、君たちはここで死ぬからだ！』
確信したように告げるフラウロスに、立香はしかしその真っ直ぐな瞳で睨み返す。
地面が躍動し、煙が吹き上がる。サーヴァントたちは各々自身の獲物を強く握り、あるいはその身の魔力を高めた。
そして、次の瞬間。
人類を救うための戦い――その決戦の幕は上がった。

◆

『何故、何故だ、何故、お前らは傷つかない！』
数分の打ち合いの果て、焦ったようにしてフラウロスは叫んだ。
この数分の間に、フラウロスは何度も死んだ。
フラウロス自身も、自身が魔神柱という神秘の塊ではあるが、戦闘力という面においてサーヴァントより劣るということはわかっていた。
自身は武を誇る存在ではないのだ。生前戦場を駆けまわり、あるいは神秘殺しを成してきた英霊たちよりも戦闘が得意だとは、冷静に判断してまず言えるはずがない。
しかしそれを、だからなんだと一笑できるのがフラウロス――いや、ソロモン七十二柱の魔神である。
彼らは、常に七十二柱の魔神であるという事実をもって、その身を

何度でも顕現させることができる。一柱二柱を殺したところで、他の魔神柱が生き残っている限り彼らは消滅しないのだ。
ゆえに、彼らは負けるはずがないと考えた。
論理的に考えて、いかなるサーヴァントを呼ぼうとも、七十二の魔神を全部同時に殺しきることなど不可能であったからだ。
しかし、どうだ。今の状況は。
死んだフラウロスの代わりに新しいフラウロスが顕現する――その無限機構は正常に機能している。魔神柱の状態は、時間神殿に存在している以上万全。すでに5体は顕現し、そのたびに攻撃を放ってきた。
――それなのに、目の前で戦うサーヴァントたちは、一切の傷を負っていない。
これでは、負けることはなくとも、勝つこともできない
「一体、どうなっている！　貴様ら、何をしたぁぁ！」

「さて、何をしたのだろうね。けれど確かなことは――」
――僕の目の前で、『人』を傷つけるのは許さないってことだけさ。
両手に出した炎でフラウロスの出す魔弾を迎撃しながらも、アダムは何処か気取ったようにしてそう告げた。
「アダムぅ！　さすが、頼りになるぅ！」
「一体何をしたのかはわからんが、ああ、いい支援だ、アダム」
両手を上げて興奮する立香とそれに苦笑しながら剣を振るうエミヤ。
サーヴァントたちは怪我を気にしなくてよい分、より積極的に責め始めていた。
『貴、様――まて、いつから其処にいた！』
「え――」
『ありえん、私は情報を司るフラウロスだぞ?!　たとえ気配遮断のスキルがあっても、見逃すなどということがあるはずが――』
「黙るといい、フラウロス。もう君の役目は終わりだ――ここに、役者は揃ったのだから」

焦ったようにまくし立てるフラウロスだが、アダムはその言葉を遮ると、安心したようにソラを見上げる。立香も釣られて上空を仰げば、そこには――

「あれは、あの、光は――」

――我らこそは、星に碑文を刻む者――

「さて、再び共に戦いましょう」

――人類の航海図、人理を刻み続ける航海者――

「我らはその為に縁を結び、そのために絆を育んだ」

――人理存続のための英傑、彼女の旅の救済者――

「――貴方を助けたいと、そう願ったのです」

――我らこそ、彼女の仲間なのだから――

「これは、貴方と私達が共に歩む――未来を取り戻すための物語なのですから」

「ジャンヌ！」

「この旗を再び振るいましょう、救国ではなく、救世の為に――英霊達の御旗となって」

歪んだソラに流星が流れる。雨のように降り注ぐ綺羅星（きらぼし）が、薄暗い神殿を明るく照らしていく。

『よぉし、成功！　さすが私！　天才の仕事に失敗なんてなかった！』

『やったぜ、ダヴィンチちゃん！　見ろ、３０、４０――いや、１００！　まだ増える！』

英雄たちの援軍だ！　ダヴィンチとロマンの興奮した声が、鳴り響く。

「うんうん、いいね。いい絆だ、惚れ惚れするよ」

にこりと満足そうに笑いながら、アダムは頷く。来てくれてよかっ

たと、安堵しながら。
「すごい、何条もの流星が流れていくようです――皆さんの声が聞こえます、とても情熱的な、救世への意志が！」
嬉しそうにマシュが叫ぶ。空にかける無数の光、その一つ一つが、立香と縁を結び協力を望んだ英霊達だ。
カルデアに居たサーヴァント、あるいはそうではなかったサーヴァントでさえも。この場に来てくれた――立香を助ける為に。その道を拓く為に。まるで奇跡のようであった。
『――ぐ、う、それが、それがなんになる！　たかがサーヴァント何百でいったい何を成せるというのだ！』
予想外の事態――しかしそれは無駄な奇跡だとフラウロスは断じる。しょせん人の延長、正真正銘の化物である自分たちと違い、彼らは協力すらおぼつかないただの人間。何かが変わるはずもない――
『西部領域、８割損傷。神経断絶、我、形態維持できず』
『東部末梢神経焼却、空域からの離脱を提唱する』
『北部、英霊共の勢いがこちらを遥かに上回っている。顕現不可、接続を切り離す』
『馬鹿な、馬鹿な！　なぜサーヴァントなぞに押し負ける！』
「マスター、道を拓きましょう。貴方のために――貴方達の未来の為に」
立香の横に降り立った聖女ジャンヌ・ダルクは、その旗を大きく掲げる。純白の大布が暗いソラに一際綺麗に輝いた。
「聞け！　この場に集いし一騎当千、万夫不当の英霊たちよ――」
生前、最悪の戦況を一手に覆した、士気向上の達人――希望の旗を掲げ、兵を鼓舞し続けたジャンヌの声が、大きく張り上げられる。歪んだ世界が真っ直ぐな声に揺れた。
「本来相容れぬ敵同士、本来交わらぬ時代の者であっても、今は互いに背中を預けよ！」
英霊達の鬨の声が響く。走る流星は勢いを増し、光の激突に神殿が

揺れる。
「さぁ、始めよう。立香、マシュ、大丈夫だ。君たちには彼らが付いている、君たちには僕が付いている！」
目を爛々と輝かせて、アダムは興奮しながら叫んだ。その言葉に笑って、立香とマシュはしっかりと前を向く。視線の先――空高くに浮かぶ、魔術王の玉座を睨みつけた。
「マスター、ここは私達にお任せを。貴方の道は皆で創り出します！
さぁ、行きなさい――さあ！」
「わかった、ジャンヌ！　ありがとう！」
力強いジャンヌの声に、立香たちは走りだす。

『お、の、れ――！　熔鉱炉が九柱、同胞よ！　ここを守れ、私は奴らを追う！』
『――承知。我、熔鉱炉を統括するもの、ナベリウス。これよりサーヴァントを殲滅する』
荒げた声と共にフラウロスが消滅すると、新たな魔神柱がジャンヌの目の前に現れる。ナベリウス、音を知り歌を編むもの――熔鉱炉と呼ばれる九つの魔神の一柱である。
「また別の魔神、ですか」
『然り、我らこそは熔鉱炉。小さき聖女よ、ただ一人でなんとする。潔く屍を晒すがいい』
ナベリウスはジャンヌを嘲るようにして、その不気味な目玉でぎょろりと見下ろす。
対してジャンヌは、そんなナベリウスを逆に諭すようにして言った。
「いえ、一人などと――それは誤りですよ、ナベリウス。私は先ほど、皆でと言いました」
『なに――』
「ヴィヴ・ラ・フランス！――ってあら？　なんだ、彼女たちはもう行っちゃったのね」
空から新たな光が降り注ぐ。溌剌とした挨拶と共に着地した人影

は、可憐な少女だった。
挨拶ぐらいしたかったのに――と、残念そうに呟く彼女は、マリー・アントネット。かつて第一特異点オルレアンにおいて、ジャンヌや立香たちと共に人理修復の道を歩んだ悲劇の王妃である。
ジャンヌと違ってカルデアにはいなかったサーヴァントの一人で、立香と会うのを楽しみにしていたらしいが、一足遅かった。
「――ええ、彼女たちはもう。ですが、また会えますよマリー。彼女たちはこれから人理を救うのです。ゆえに――機会などいつでもありますから」
「ええ、ええ、そうよね！　いつだって奇跡は信じる者に訪れるの。キラキラ輝く思い出も、素敵な出会いもきっとあるもの、信じてるわ！」
そうして笑顔で、マリーはナベリウスへと向き直る。
「もうすぐ他の皆も来るわ。アマデウスにサンソン、デオン、竜殺しの彼や聖人の彼も――竜の魔女についていた彼らもね。みんな、彼女のことを助けたいって」
「そうですか――ああ、気配を感じます。ジルも来てくれたのですね――」
光る星々から、頼りになる仲間たちの存在を感じ取った。
あの時代、特異点では敵同士であったかもしれない、互いに刃を交わしたかもしれない。
――それでも、立香が繋いだ希望を前にして、協力しない英霊などいない。
凡人であっても、ここまで至ったのだ。諦めない心だけで、彼女はここまでたどり着いたのだ。
彼女の軌跡はもうすぐ世界を救う――彼女だからこその偉業へと手が届く。
それを見届けずに、なにが英雄か。
「――では、始めましょうマリー。ここで戦うことが、マスターの力になります」
「――ええ、いつだってヴィヴ・ラ・フランス！　マスターのためなら笑顔で戦えるわ！」

そうして、第Ｉの座『熔鉱炉』での戦闘は幕を上げた。

◆

ついに、遠いソラでの戦いは始まった。
物語の最終章、一年という短い旅の終わり。
いままで築かれた人理――そこに生きた人間の全てが、この戦いを見守っている。

あるいは、『最も古き人類』もまた――
彼女の軌跡が引き起こす――取り戻す未来を、期待していた。

『救世の道程に光あれ』

――『彼』の話をするとしよう。

ああ、そんなに緊張しなくていい。ゆったりと座って落ち着いて。お茶でも飲みながら静かな気持ちで聞いてくれた方が、彼も喜ぶだろうさ。

いつもいつも王の話ばかりをしている気がするけどね、別にボクはソレだけを話題の種にするような話の幅が狭い奴じゃない――ああ、信じてもらえてないね、その顔は。

まあ、別にいいんだけどね。今は、キミのボクに対しての認識はどうでもいい。問題は『彼』、そう『彼』のことだ。

常に世界を見渡すボクでもね、過去まで見通せる訳ではない。だから、彼の人生に一体何があったのかなんて、そんなこと本来わかりはしないんだけれど。

そこはほら、ちょちょいっと、ね、わかるだろう？　ボクはちょっとだけズルをして、彼の生前ってのを覗いてみてね――あたた、噛むな噛むなキャスパリーグ。ボクだってデリカシーに欠ける所業をしたと思ってるさ。

こんなことするなんて生まれて初めてだよ、ホント。夢魔の性質上誰かの過去の記憶を覗き見る事はあっても、過去自体を観測するなんてことはしてこなかったからね。

つまりはだ、ボクはそれぐらい彼の人生が気になったんだ。

マスターやマシュ、その他多くの人間たちを慈しむ完全無欠の『親』たる彼。そんな彼は一体なにを思い、何を苦悩し、どのような最期を迎えたのか――なんてね。

良い物語が見れそうだと、そう思ったよ。だって、あれだけ愛に溢れた清い心を持つんだ、感情というものを上手く理解できないボクでも眩しいほどなんだよ、アレは。

そんな心を持てる人間が送った人生――苦難はあるだろう。悲嘆もあるだろう。でも確信してたね、これはハッピーエンドで終わるっ

て。
人類最初の物語――ボクですら予想のつかない台本だ、ワクワクしない訳がないだろう？　しかも終幕は幸福で決まってるんだ、後味悪さなんて感じないだろうし、良作にも程があるストーリーじゃないか。

――なんて、思ってしまったのがいけなかったんだろうね。
『好奇心は猫をも殺す（Curiosity killed the cat）』、なんて諺がブリテンにはあるけど、本当にその通りだった。
今までしてきた後悔なんて数えきれないほどだけど、後にも先にもあんなに――いや、何でもない、気にしないでくれ。愚痴っぽくなってしまってゴメンね。
ただ、ボクがこういう表情になってしまうぐらいの、と考えてみるといい。おおかた想像がついてしまっただろう？　正直ボクだって、過去に戻れるとすれば、見ようしている自分を止めてる。
だから、という訳でもないけど。
聞くというのなら覚悟したほうがいい。キミだって、出来る事なら後悔なんてしたくないはずだ――まあ、それでもキミは聞くのだろうけど。
え、さっきと言っていることが違う？　お茶を飲みながらするような話には聞こえないって？
ははっ、そりゃあそうだろうとも。此処から先はとても悲しい話になるだろう。間違ってもティーカップを片手に口に出すものではないハズさ。
――けれどね、だからこそ、敢えて言おう。
それがわかっていたとしても、涙を落としそうになっても、お茶を飲むような気分ではなくなってしまっても、キミはそうするべきだ。まるで世間話をティーブレイクに差し込むようにして、彼の生涯なんて他愛ない話だと済ませるべきなんだ。
笑って、お茶を片手に語らおう。何を言っているかわからないかも

しれない。人の心がわからない夢魔の悪趣味な悪ふざけだと、そう思われているのかもしれない。
けれど、もう一度言うよ？　それでも、キミはそうするべきなんだよ。本当にね。
それが、『彼』の人生に対してボクたちが出来る最大の敬意と弔いなのだから。

――ほら、ちょうど湯も沸いた。
キミは紅茶を淹れられるかい？――そうか、ならボクが淹れるとしよう。
大して美味くもないとは思うけど、そこはそれ、ご愛嬌だね。ボクは不器用だし。
大丈夫、どうせ味なんてすぐにわからなくなるだろう。心優しいキミであれば、直ぐに涙の入った塩水ティーになるのがオチなんだ。

――覚悟は出来たね？
では、改めて。
――『彼』の話をするとしよう。
始まりの人、人理を踏み出した者。星の碑文を刻んだ、記念すべき一人目――即ち、最も古き人類の生涯をここに語ろう。
語り部はボク――花の魔術師ことマーリンが務める。
ボク如きの言葉ではきっと足りない、筆舌に尽くしがたい異様な物語だ。
それでも、キミに伝えたい、知ってほしい――キミも聞き終われば そう思ってしまうだろうね。
あるいは、語り尽くすには、長い時間をかけてしまうかもしれない。
それでもどうか、聞き逃さないように――ああ、ティーカップは持ったまま、談笑するように語ろうじゃないか。
そうだな、始まりはこんな感じで。
――それは、ボクが『どうにかしてあげたい』と心から思ってしまっ

たぐらいに、とても……とても、悲しい話だったんだ――

◆

立香たちは、触手で編まれた不気味な神殿を全速力で駆けていた。魔術王がいるであろう玉座まではまだ遠い。今日という一日がタイムリミットである以上、できるだけ早くと気が急いてしまうのは仕方のないことだった。

黒く染まったソラに流れる光は徐々にその数を増している。英霊たちの心強い援軍は途絶えるところを知らない。

だが、だからこそちんたらと進んではいられない。無理な召喚、強行された契約は、本来英霊というものが世界からの排斥を受け続ける存在というのも相まって、サーヴァントたち自身――ひいてはその全ての現界を維持するアダムの負担となりのしかかる。

援軍は長くは続かないし、優位はいつか無限の再創をなす魔神柱によって覆される。

故に急ぐ、急ぐ。立香はこの一年で学んだ身体強化の魔術までもを用いて――付け焼き刃ではあるが――サーヴァントたちの足を引っ張らないよう速度を維持していた。

「はっ、ふっ――」

「マスター、無理をするな。君が倒れてしまえばそれこそおしまいだぞ」

「ハァ、あ、うん…っ、ゴメン」

「立香、心配になる気持ちはわかるけど、少し休もう。英霊たちの数も増えてきた、それぐらいの余裕は残っているよ」

呼吸を乱しながら走る立香に見かねて、エミヤは静止の言葉をかけ、アダムは優しく立香の背を擦る。二人からの労いに、焦る気持ちが溢れんばかりだった立香は、一応のクールダウンをした。

空を見上げれば、玉座まではまだ遠い。おそらくは5分の1までにも到達していないだろう。現在時刻、午前8時37分――この制限時間(タイムリミット)を、まだまだ余裕と見るべきか、まずいと焦るべきか。

「先輩、大丈夫ですか。魔術回路は正常ですか、視界はぐらつきませんか、気分は――」
「大丈夫だって、マシュ。心配しすぎ」
いつもの魔術行使の範囲内じゃん、と立香が言うが――
――いや、そのいつもがいつを指しているのかわかりませんが、見てる限りピンチの時のそれにしか見えません――そう、マシュにきっぱりと言われてしまった。
「そうか――ほら、いつも通りじゃないのさ」
「いや、マスター。それは流石に悪い慣れ方ですよ、本当に」
不幸体質、というよりは生来のトラブル・メーカーである立香だからか、遠出するたびにどこかで無茶するのが基本と思っているこの壊れぶり。
アルトリアは自分の主のそんな様子に呆れたように息を大きくこぼした。
「ははっ！、そう言えるなら、マスターはやっぱケルト流がわかってやがる。常在戦場、常に全力全開。無理して戦場で野垂れ死ぬのは愚か者だが、無理をしないでその生を諦めるのはそれよりひどい、最も愚かな臆病者――ってな！」
呵呵と笑うは青の槍兵。心底面白そうにその喉を震わせながら、クーフーリンは槍をくるっと一つ回す。そうして、ニヤリと獰猛な笑みを浮かべて魔槍を構えた。
「――ほら、奴さんも追いついて来たぜ。マスター、休憩は終わりだ、構えなぁっ！」

『我は情報室フラウロス、他情報室８の魔神すなわち――オリアス、ウェプラ、ザガン、ウァラク、アンドラス、アンドレアルフス、キマリス、アムドゥシアス、その全てを統括する者』
「――フラウロスッ！」
クーフーリンが槍で示した先に現れたのは、赤く染まった魔神の柱。聖杯探索（グランド・オーダー）史上最初に会敵した魔神柱、フラウロスの顕現だ。

フラウロスの奇怪な声の呼びかけに応えるように生えてきたのは、他８つの柱。情報を司るもの――すなわち『情報室』の称号を冠する魔神の一団。
「――９つか。これは、流石に」
「先輩、数的有利を取られました。フラウロス、やはり来ますか……！」
星の聖剣を構えながら剣先を一体一体に向け、その数にアルトリアが冷や汗を垂らす。マシュはフラウロスの声にレフ・ライノールの執着心を思い知り表情を歪ませた。
「……マスター、どうする？」
「どうもこうも！　全力突破、押し切ろう！」
エミヤの問いに立香は声を張り上げる。その目は真っ直ぐにフラウロスを睨みつけており、そこには絶対に勝つという自信が――実際の状況は絶望的ではあったが――宿っていた。
『無駄、無為だ。此処にいる貴様らの戦闘能力の総合値は既に把握している。観測は常に正確な未来を照らす。数回程度なら殺されようが、しかしそれだけで終わるだろう――貴様らは、此処を通ることすらできない』
そんな立香を見下すようにして、フラウロスの紅瞳がじろりと動く。レフ・ライノールから変性したばかりだった先ほどまでのフラウロスとは違って、その声音には人間らしさと呼べるものが欠如していた。
観測した事実とそこから導き出される推測――あるいは、結果。そんなものを羅列したような言葉は何処か機械じみていて――なにより、『情報室』という名に恥じない周到さを感じさせた。
油断も隙もない。フラウロスは完全にレフ・ライノールという人物の慢心や『人』に対する侮蔑を脱ぎ捨てたようで、完璧に冷静だ。これは厄介である。
対して、立香たちの戦力といえば。護り特化のマシュはもちろん、『フラウロス』が『レフ・ライノール』という姿をしていたという事実を見てしまったアダムも、まともな有効打を望めない。

たとえ相手が魔神に違いなくとも、『起源』によって『人』についての全てを既知のものとするアダムにとって、『人から変性する魔神柱』という存在は天敵である。
『魔神』という存在のその前が『人』であったことを――『フラウロス』が『レフ・ライノール』だったように――知っているからだ。
アダムの気持ちとしては攻撃を加える気満々なのだが、世界はそれを許さない。事実、アダムの攻撃は『人への危害』と判定されたのか、綺麗に無害なものへと成り下がってしまっていた。
いくら一騎当千の英霊とはいえ、ダメージを入れられるのがエミヤ・クーフーリン・アルトリアの3騎のみでは手に余る。相手は9つ――こちらは3つ。アダムの『母なる庇護』によるダメージ無効化があろうとも、厳しい戦いには違いなかった。
『情報室はこれより殲滅を開始する。「観測所」、「管制塔」、その他同胞よ、絶対の意志を持って事をなせ。油断はするな、完璧なる遂行を果たせ。――英霊どもの力を侮るな』
先ほどアダムの持つ予想外のスキルにやり込められたのが効いたか、フラウロスは他の魔神にまで『油断大敵』と語りかける。
普通に厄介な存在である魔神柱が、慢心も侮蔑も余裕も捨てて挑むつもりというのは、立香たちにとっては悲報以外の何ものでもなかった。

――だが。
奇跡の歌はここに響く。黄金の光がソラを舞う。赤い薔薇が舞い落ちる。
一つ、情報室フラウロスに誤算があったとすれば。
サーヴァントと呼ばれる存在が、情報室の観測――それが、警戒に警戒を重ねた上方補正を加えたものだったとしても――それを超えて、強く、疾く、そして気高い者だったことである。
「――我が才を見よ。万雷の喝采を聴け！」
響き渡るは薔薇の皇帝の力強い詠唱。ソラに一条の光の橋を架け

ながら落ちてくる紅い少女の十八番。
「インペリウムの誉れを此処に。咲き誇る花のごとく――！」
彼女が後ろに率いるのはローマが誇った精鋭。皇帝の愛した紅を基調とした鎧に見を包んだ、幾百幾千もの兵士たち――そして、第二特異点・セプテムでともに戦った、名高き英霊たちである。
「――開け、招き蕩う黄金劇場（アエストウス・ドムス・アウレア）よ！」
立香達とフラウロスとを分断するように着地し、その直後に詠唱を終えた彼女は、まるでミュージカルの主演のように両手を大げさに広げ、高らかに真名解放を宣言する。
固有結界とは似て非なる大魔術――華の帝政を敷いたネロ・クラウディウスが誇る栄華の象徴、黄金の劇場の幕が上がった。
歪んだソラから一転、絢爛豪華な劇場へと突如すり替えられた光景に、フラウロスたち9つの魔神が驚いたようにその不気味な目を彷徨わせる。
「――ネロ！」
「余の見せ場だ、とそう感じたのでな。どうだマスター、此処から先、余たちの独壇場とみるが――さて、そなたはどう思う？」
第二特異点を代表する英霊、華の皇帝ネロ・クラウディウスは、立香に向けてそう不敵に笑った。

◆

ネロの宝具『招き蕩う黄金劇場（アエストウス・ドムス・アウレア）』内で始まった乱戦は既に熱が極まっていた。
バーサーカーであるスパルタクスと呂布を切込隊長とし進軍するローマ軍が魔神柱を蹴散らし、愛馬ブケファラスに乗ってダレイオス――未来の好敵手（ライバル）と共に遊撃を行うアレキサンダーの存在は、孔明の名指揮によって絶妙なサポートとなっている。
マスターである立香の魔力を過剰消費しない程度に加えられるスターティングメンバーたちの援護もあって、フラウロスたちは完全に優位をひっくり返されていた。

『――く、お、お』
「セイっ！、いけ、ブケファラス！　今こそ蹂躙の始まりだ！」
「魔神の陣形を乱し、魔力の流れを変える。もう少し暴れてくれ、わが王よ。戦いは決して物理だけでは成されないが、今この時ばかりは、物理こそが至高には変わりない」
　名軍師として名高い諸葛孔明（ロード・エルメロイ）の緻密な陣形操作と指揮の賜物か、魔神たちはその連携を発揮できず、ただ再顕現と消滅を繰り返すだけになってしまっている。
　まさに封殺と呼ぶにふさわしい戦況。既に立香たちの支援もこれ以上は必要ないだろう。ネロは立香たちにこの座からの離脱を促した。
「伝承的にはどうなのかとも思うが――そなた達のために黄金劇場の門を開けよう。なに、ここは我らだけで十分だ。ブーディカともこの通り、背中を預けられるまでになっている」
「そうそう、マスターたちは早く行きな。おねーさん、戦いは得意じゃないけど、頑張っちゃうからさ」
　ニヤリ・ニコリと種類の違う二つの笑いを浮かべる二人。互いに積もり積もったもの、晴らしきれないものは確かにあるだろうがそれでも――今は背中を互いに守り合っている。
　その事実だけで立香は不覚にも、少し感慨深いものを感じた。
「……うん、わかった。二人共――みんなも！　頑張って！」

　なんにせよ二人の決意――色々な葛藤を人類のために振り払ってくれたであろう、その決意を無駄にはできない。
　後ろ髪を引かれる思いもあるが、世界を救うため。立香はこの宙域を脱出し、玉座への歩みを進めることにした。
『――アルトリア、クーフーリン、アダム！　もう離脱するよ、戻って！』
　乱戦となって、今立香のそばにいるのはマシュとエミヤだけだ。他の三人はネロたちのサポートへ行ってしまっていた。

故に立香は念話を用いて三人に召集をかける。アルトリア、クーフーリン、少し間を開けてアダムという順で、了解の返事が返った。
「(アダム、返事少し遅かった……?)」
念話はタイムラグ無しに直ぐに届くはずなのだが――はて。
まぁ、きっと念話に返事する余裕が無いほど戦闘の激しいエリアにいたのだろう。
――なんにせよ、今はそんなことを気にしている場合ではない
立香は、ネロに指示された『出口』に向かって急ぐ。そこに人一人が通れるぐらいの『穴』を開けているらしい。
戦闘が激化する一方の劇場中心部に背を向け、走りだす立香。身体強化の魔術を適度に用いて走り――そして、突然響いた爆音に振り返ると。
「……あー、あれは、アルテラちゃんかな?」
天から突き降ろされた七色の光線――『涙の星、軍神の剣(ティアードロップ・フォトンレイ)』が、黄金の劇場のど真ん中にそびえ立っている所だった。

◆

一方、立香が離脱を決意する数分前。
立香のそばから離れたアダムがいたのは、劇場の全体を俯瞰できるソラの上。絢爛豪華な天蓋のすぐ近くであった。
諸事情があり立香から目を離せない――彼女を守らなければいけないアダムは、立香、ローマ軍勢を共に視界から外さなくて済むここで戦場を見守っていた。
ローマ軍勢も『人』であるならば、それはすべからく『母なる庇護』の対象となる。事実彼らは怪我一つ負っていない――そのことを確かめて、『アダム』はふぅ、と安堵の息をついた。
「あら、そこのアナタ、珍しい人ね――ええ、先ほどの彼女(アルテラ)とはまた違う意味で――そう、心が無いのね、アナタ」
「いきなり辛辣だね、えっと、ステンノ様?」

背後から聞こえて来たのは、幼い少女の声。アダムが振り返れば、そこにいたのはゴルゴーン三姉妹が女神の一人。暗殺者（アサシン）のサーヴァント、ステンノだった。
「ええそう、ステンノ。どう呼んでも構わないわ――だって、こんなに面白そうな人久しぶりに見るもの」
「――そう、か？　うーん、神々の気持ちはよく理解できない」
クスクスと笑うステンノにアダムは困ったように頬を掻く――それでもアダムは、片時も戦場から目を離しはしなかった。
「必死なのね、可哀想な子。試練――いえ、義務なのかしら」
「……これだから神様は苦手なんだ」
「あら失礼ね、私の囁きを聞いて取り乱さない男なんて初めて見たから、からかっただけよ」
「これが残念ながら、僕って男女両方だったり」
生前は男だったのになぁ――と悲しそうな顔をして零すアダムに、ステンノはなにが面白いのかクスクスと笑う。

「つくづく弄ばれているのね、アナタ。抵抗しないのも不思議だわ。その酷い姿も、その義務とやらの一環なの？」
「――」
「だんまり、ね。言いたくないことなのかしら。それとも、言うことを許可されてないのかしら」
笑顔から一転、急に鋭くなった視線と飛んできた質問に、しかしアダムはなんの反応も返すことはなかった。
そこに沸々と燃える怒りを幻視してしまうぐらいの激情――ステンノという女神の性質としてはありえないほどの感情――があったとしても。
アダムには答える権利が無かったのだ。
暫く沈黙が続けば、ふい、とステンノはアダムから視線を外す。アダムはやっと睨みつけから開放されたからか、ふぅ、と大きなため息をついた。
「アナタがそれでいいのなら私は何も言わないわ――けれど、」

――アナタ、『怒り』という感情さえ無くしてしまったのね。
そう吐き捨てるように言って、ステンノは何処かへと消えてしまった。『気配遮断』の効果だろう。残念ながらアダムには補足する術がない。
「――」
アダムは沈黙を続けて――それでも視界から立香を外すことはなかったが――果たして、『無くした』という表現が正しいのか、それを判断しかねていた。
生前のことなどほとんど覚えてはいない。毎日同じことを繰り返したような日々だ。代わり映えのない日常に、鮮烈な記憶など多くはなかったように思える。
『怒り』という感情など――あるいは、そのほか全ての感情までも――自分は果たして持っていたかと問われれば、さて。
「――ともかく、『神』には通用しないわけだ。やっぱりそうなんだね」
無駄な思考を断ち切って、アダムはそう呟く。
酷い姿、と言われてしまった。間違いでは断じてない。ステンノにとって、今のアダムの姿は見るに耐えないものだった筈なのだ。
理論上、ステンノのような純粋な神には効かないことはわかっていたが、少し注意を払う必要が出てきてしまった。
口の軽い神と出会ってしまえば、少しまずい事になる。

『――ダム！　もう離脱するよ、戻って！』
「――っ、ああ、すまない。了解、すぐに行くよ」
立香からの念話に、アダムははっと我に返る。マスターからの指示に反応が遅れるなど、心底自分が愚かに思えてくる。何処に護衛対象の声を聞き逃す馬鹿なボディーガードがいるというのだ。
――できることなら、隠し通せればいいけど。
そうしてアダムは、眼下で走る立香へ向けて落下を始めた。
直後、背後では爆音が轟く。ステンノがアダムに邂逅する前に共にいたサーヴァント――アルテラの宝具が開放されたのだ。
「――うわ、人の身でここまで……本当に、よくぞ」

今のアルテラ、彼女はその容姿に相応しい草原の少女としての心を獲得しているが、果たして自分は。

黄金劇場の激震と共に、七色の光が天を貫く。魔神柱、そのことごとくが一掃され、ローマの軍勢は歓喜の声を上げた。

――しかし。

その輝きに背を向け落下するアダムの表情は、眩い光による影となり、窺い知ることができなかった。

第Ⅱの座、『情報室』――終了。

『願いがあった』

――消えていく。

僕の人生全てが風化していく。塵へと還っていく。
成し遂げたものが、見つけたものが、創りだしたものが。その全てが埋もれていく。
ああ、なんて悲しいのだろう。虚しいのだろう。
生きるか死ぬか、そんな簡単な二択を散々に悩み続けて、迷子のままにまるで時間を稼ぐようにして生を繋いだ。
殺して喰らって、他の命を糧とした。犠牲にしてきた彼らに胸を張れるまではと、惰性で生を続けた。何かを殺した者が自分を殺して楽になるなど許されないと、そうして生涯を過ごしてきた。
長く、長く。僕の人生は十分に長大だった。他の生物とは比べるまでもなく長いと分かるぐらいの生だった。

――消えていく。

築いたものが、多くあった筈なのだ。
火を起こした。毒を知った。食べられるものを見極めた。家を建てた。狩りの方法を確立した。狩りのための道具を創りだした。文字を書いた。歌を歌った。装飾品を削りだした。料理をした。炭を焼いた。薬を作った。
長い長い生涯、そのすべてを使って。これだけのことを成した。あるいは、まだまだあるかもしれない。

――消えていく。

もう自分すら憶えていないぐらい、彼方の昔の話だ。
観測し続けた人理は遂に西暦の２０００を数えて、もう何年前から人類を見続けたかすらも解らないのだから、思い出せないのも当然だろう。
様々な記憶はひび割れていく。必死に駆け抜けたはずの生涯は、長い年月でただの記録に成り下がり、遂には忘却すべき塵へと姿を変えてしまった。
しかし、色褪せない鮮明な記憶もいくつかある。
例えばそれは、初めて火を起こしたあの日の高揚。闇に怯えるだけだった僕が、たとえそれが些細なものだったとしても、対抗できる手段を手に入れた時の胸の高鳴り。
例えばそれは、初めて毒を知った時の絶望。物を口に入れるという生きるのに必要なはずの行為が、自分を殺し得ると知ってしまった時の困惑。
例えばそれは、初めて命を喰らった時の悲哀。目の前で紅い血滴（したた）らせるさっきまで生きていた筈の何かを殺した時の震え。こうしなければ生きていけないのだという諦観と、自分もこうなるかもしれないという悪寒。
――そして、例えばそれは、死んだあの日のこと。
思えばあっけない最期だった。結局、運命は定められたとおりに。今まで行ってきたことの代償が返ってきただけだった。腹を空かせた肉食獣に喰われたのだ。
何匹もの獣に飛びつかれ倒れ、仰向けのまま肉を喰らわれた。鋭い牙が腹部や脚に突き立ち焼けるような熱さを感じた。だが、不思議と痛みは感じなかった。
目に映るのは、とても透き通った青い空だった。
グチャリと肉の千切れる生々しい音を聞きながら、それでも僕はあの空に見入っていた。
雲ひとつなく、冬の季節には珍しく暖かく、風がゆるく心地よいぐらいの強さで吹いている、そんな日の空だった。太陽の光が森の木々を貫くように降り注ぎ、いつもと変わらず川のせせらぎが聞こえてい

た。
実に数秒程度の感傷だ。僕はすぐに死んでしまったのだから。
けれどそれは、きっと。最後まで――たとえ火を起こしたことを、毒を知ったことを、命を食らったことを忘れ果てても――この身に刻まれ続けるだろう。
虚しい最期、凄惨な最期だと思うなら、それでいい。
けれど、確かにあの日、僕は悲しくなどなかったのだ。そこで死んでしまうことに後悔など抱いていなかった。あるいは、酷く充実した思いすら抱いていた。
それはきっと――その青い空に飛び立つ、あの小さな鳥を見たからだった。

――消えていく。

功績は埋もれて、人生は風化し、今や誰も知る者はいない。
僕自身ですらわからないほどに記憶は摩耗し、遂には感情すら脱ぎ捨てた――感情を持っていたか否かすら、忘却して解らなくなってしまった。
けれど、確かなものはここにある。
感情はない、愛情など言うまでもなく。親としての完璧などには程遠い。
しかし、もう一度見たいと感じた、その想いだけはいつまでも残り続けている。
それが何によって成されるのかはわからない。聖杯か。　此度に参加する戦いの先にあるのか。　あるいは――『抑止力（アラヤ）』の望み通りに振る舞えば手に入れられるのか。
召喚される可能性など、万に一つより少なかったはずだった。半ば諦めていたことだった。もう二度と『あの光景』を見ることなど無いだろうと断じていた。
それでも、機会を与えられたというのなら。

――消えていく。

例え、何を犠牲にしようとも叶えたい願いがあった。狂おしいほどに欲しくてたまらないものがあった。それだけを夢見たから、きっとここに居るのだろう。

功績などいらない。忘れ去られたままでいい。何も成せなかった愚かな自分でいいから――だから、どうか。

どうか、僕を独りにしないでください。

◆

「野郎共、派手にいきなぁっ！――――撃（て）――――っ！」

フランシス・ドレイクが男勝りの号令を投げかける。第Ⅲ特異点を駆け抜けた英霊たちの集う場所、ここ第Ⅲの座『観測所フォルネウス』では、大海が荒れ狂っていた。

それはドレイクの『黄金の鹿号（ゴールデンハインド）』や黒髭の乗る『女王アンの復讐号（クイーンアンズ・リベンジ）』、さらにはイアソンやヘラクレスの船『アルゴノーツ』が最大限に活躍できる領域。

航海しにくいことこの上ない大荒れの波であったが、それはそれ。英霊として数えられた船乗りたちにとっては、ちょっとした苦難にすらならない。

むしろ、都合が良かった、と言っていいだろう。宝具で呼び出される船は決して陸を動けないわけではないが、それでも水上を走るか否かでは速さも強さも段違いなのだ。

「ええぃ、怪物、怪物、怪物！　海の中から触手がはえて、まるでクラーケンだ！　命がいくつあったって足りないじゃないか！」

大荒れの海の中、必死の形相で船を操りながら叫ぶのは、『アルゴノーツ』の船長イアソン。

ヘラクレスにメディア・リリィとヘクトールというサポーターを付けた彼。自身はそのヘラクレスが力を万全に振るうための囮となっ

て、こうして乱立する魔神柱の中を縫うように航行している。
だが、限界もそろそろだ。大人の方のメディア（イアソンにとっては悪夢でしかない）が船にかけた保護の魔術も切れかけ。小物ではあるが、それでも数多の英雄を率いた参謀たるイアソンの賢しい頭には、これ以上の時間稼ぎは不可能という考えが過ぎっていた。
メディアがもう一度魔術をかけ直してくれればいいのだが――残念なことに、彼女も魔神柱を拘束するのに手一杯。彼女を責めることなかれ、むしろ工房を持たないキャスターとしては破格の働きである。
ドレイクや黒髭は余裕があるように見えて、あれは『ピンチの時ほど面白い』という航海者としての生来の気質が出ているだけだ。現状を打破する何かが欲しい。イアソンの切なる願いだった。
「――ああ、くっそ！　いつまでこんなこと続ければいい！　あの小娘はまだなのか、俺にだって限界はあるんだぞ！」

「――なんだこれぇっ！」
「海、海、海です先輩！　見渡す限りの海原が出現しています！」
驚く立香とマシュ。魔術王の玉座を目指す道中、それぞれの特異点を模した座を通らねばならないとは予想していたが、まさか海になっているとは思わなかったのだ。
「どうやって渡ろう」
「なに、サーヴァントならばどうにでもなる。マスターは、そうだな……」
「僕が抱えて行こう。それが一番安全だろうし」
悩むエミヤにアダムが手を挙げる。魔神柱の攻撃を防ぐことはできても反撃することができない自分では、両手が開いていても足手まといだろうと思ったが故だ。特に誰も文句はなく、アダムが背負っていくことになった。
「ほら、立香。乗って乗って」

「う、うん」
　１６５ｃｍと自分とあまり変わらない身長だからか、背負われるのは妙に気が引ける立香だが、相手はサーヴァント。ジャック・ザ・リッパーなど小さな子供の姿を取る英霊でも立香の何倍もの膂力を持つのだから、いらぬ気遣いである。
　よっ、と小さく声を出してアダムが立香を背負う。立香が彼の首に手を回すように固定してみれば、見た目よりもかなりガッシリとしていて、立香は少し驚いてしまった。
「じゃあ、いこう。まずはそうだね、あの船あたりを目指そうか」
「あれはたしか、女海賊（ドレイク）の船だな。いいぜ、そうしよう」
　立香を片腕で支えながら器用に指を指すアダムに、クー・フーリンが同意する。
　海原を駆ける無数の帆船。一番近いのはフランシス・ドレイクの船『黄金の鹿号（ゴールデンハインド）』だ。まずはそこを目指す。
　此処にいる英霊は水の上を走るぐらい訳ないが、それでも安定した足場のほうが望ましい。加護で水に沈むことのないアルトリア以外は単に技術や魔術で浮ける だけなのだから、どうしても不自由を感じてしまう。
　クー・フーリンが先陣を切り、その後にアルトリアが続いた。立香を背負ったアダムとマシュが走り、最後にエミヤがついてくる。
　加護のあるアルトリアは無論問題なく、エミヤ、マシュは魔術で足場を固めて走る。クー・フーリンはルーン魔術を使っていて――アダムは、なんだろうか、立香にはよくわからない技術を使っていた。
「アダムそれ、どうやって歩いてるの？」
「え、ただ脚を早く動かしてるだけ。ほら、沈む前に踏み出せばってやつだよ」
「まさかの脳筋突破……っ！」
　理知的な雰囲気を持つアダムだから古代の魔術でも使っているのかと思えばこれだ。『起源』のスキルで水上歩行ができる魔術ぐらいいくらでも学んでるはずなのだが。
『アダム』としての性質なのか『彼自身』としての性質なのか、彼には

どうにも大雑把なきらいがある、と立香は思った。小細工する必要がない程スペックが高いからなのだろうか。
「魔力を消耗しなくて済むんだから、別にいいじゃないか。むしろ、最高に頭の良い歩き方だと思うんだ」
「人はそれを脳死プレイと呼ぶんだよ、アダム」
それはショック、と呟き予想以上に傷ついたらしきアダムは放置して、立香は眼前の荒海へと目を向ける。
そろそろアダムたちが走る海面も大きくうねりだす領域に入ってきた。波に沿って歩かなければならない都合上、まるで絶叫マシンのように激しい動きを繰り返しながら進む。立香はちょっと気持ちが悪くなってきてしまった。
「ううっ……」
「ありゃ、立香は絶叫系は苦手かい？」
「うん、得意じゃない――いや、アダムの口からそんな言葉が出てきたのが衝撃すぎてなんか吐きそう」
「やめてよ？　僕の上で吐くのはやめてよ？」
割と本気で焦るアダムに立香は頑張って耐える。それはもう耐える。そのかいあってか、なんとかドレイクの船まで戻さずにたどり着くことができた。
危なかった。横で荒波に揺られながらも器用に立香の背を擦る優しい後輩がいなければ、リバースしていたかもしれない。
「うー、やっとたどり着いた……うっぷ……」
「くっ！　予想外のダメージですねこれは。マスターがまさか酔ってしまうとは」
「よし、来たね。待ちくたびれた――なんだい、そのザマは？　あの海では平気だった癖に。そんな状態で船に登って来られても、こっちが不安になるじゃあないか！」
甲板に降り立ったかと思えば急に倒れこみ、真剣な顔のアルトリアの膝の上で唸る立香。船に乗る前に酔ってくる乗組員など前代未聞である。太陽を落とした女フランシス・ドレイクもこれには苦笑いだった。

「――しょうがない。立香、コレを見るといい」
「う、うん……？」
「眺めていれば落ち着く。ただの酔いなんだ、心を静かにするだけで不思議と治るものさ」
　やれやれ、といったふうにアダムは人差し指をピンと立てて、立香に見せる。突然のことに困惑する立香の目線がそこに集まったことを確認すると、アダムはひとつ小さな炎を灯した。
　ゆらゆらと揺れる灯火が見る者の心を落ち着け、傷を癒やす。
　凝視している立香と違い傍からちらりと見ただけのマシュであったが、一瞬、今が戦場であることを忘れるかのような安心感を覚えた。コレならば、酔いだけでなく立香の張り詰めた精神も安らぐだろう。
「『光なき原初の世界（ヴェイグ・エンバー）』……そういえば、治癒効果もあるのでしたね」
「……本当に、守ることに関しては事欠かないのだな、彼は。羨ましい限りだ」
　見るのは初めてだが、予想以上の効果にマシュは素直に感嘆。エミヤはアダムを僅かに羨望の入り混じった目で見つめていた。
　他人の受けるはずのダメージを完全無効化する手段に、仲間を治癒する広範囲宝具――なるほど、守るのは得意というのは大言壮語ではなかったらしい。
「……うん、落ち着いてきたかも」
　治癒といっても、致命傷を即座に治すような強力なものではないよ――というのは宝具を持つ本人の言葉だが、立香の船酔い（波酔い？）は流石に一瞬で治してみせた。
　青白かった立香の顔色は健康的な赤みを帯びてきた。元気を取り戻したらしい。精神的な緊張も程良く落ち着いたのか、先ほどまでより余裕が感じられた。
「――はぁ、やっとかい？　全く緊張感のない奴らだね」
「ごめんごめん、ドレイク船長。まさか海になってるなんて思わなくて」
「アタシ達もそりゃあ、此処に来た時には驚いたよ。原因はわからないが――まぁ、いいんだ！　環境としてはこっちに有利、なら気にす

る必要なんてない。いつもどおり海賊らしく、バカみたいに暴れるだけさ！」
　力強く笑うドレイクに、流石肝が座ってる、と立香は釣られて笑った。
「それに、いつからだったか、全く怪我をしなくなってね。コレもよくわからない事だけど、ありがたい話さ。利用させて貰ってるよ」
「ああ、それなら、この人のせいだよ」
「せいって、悪事を働いた訳でもないっていうのに……」
　立香の紹介に不満そうに言うのはアダム。まるで「この人が犯人です」と突きつけるようなやり方に物申したいことがあるらしい。
「――へえ、そいつは凄い力を持ってるね。それにだ、男ならグチグチ言うんじゃないよ。女子供が相手なら尚更さ」
「だから、僕は男女両方なんだってば！」
　なんで悲しいことを何度も連呼しなければならないのか、とアダムは声を荒げた。
「はぁ、なんだか知りませんが凄い兄さん。姐御のいうことなんて気にしないでやってくだせぇ。なんせ本人がどの乗組員よりも漢らしいときてるんで、並の漢らしさってのがわかってなんでさぁ」
「いい度胸だねぇ、ボンベ。一旦沈んどくかい？　名前らしく、しばらくなら呼吸しなくても生きていられるかもしれないよ？」
「いや、それは勘弁を――ほら、お前らぁ！　仕事するぞ仕事ぉ！」
　気心知れた仲なのか、ドレイクに対して女性らしくなさを指摘する怖いもの知らずの乗組員ボンベは、アダムをフォローするがしかし、ドレイクにひと睨みされてすごすごと引き下がってしまった。
「海賊とは、それでいいのかね……」
「なんつーか、完っ全に尻に敷かれてんな」
　ドレイクのような『強い女』というのに色々と縁があるエミヤとクー・フーリンは、呆れたようにボンベを眺めながらも、少しばかり同情のような気持ちを向けていた。
　女は怖い、あれは怖い。それは二人の――いや、世の男大半の共通認識なのだ。

「――おいコラァァァ！　そこ、ほのぼのした空気とか醸しだしてないでさっさと助けろやぁ！　マジ、フ〇ック！　あんたらが来てから今まで拙者だけでこのデカブツ受け持ってんですけどもぉ!?」
　遠くから野太い慟哭が聞こえてくる。アルトリアやマシュ、立香までも女性陣はその声の主に「うわぁ…」という反応を返す。アイツいるんだ、来たんだ、という心の漏れだ。
「え、何その反応。ねぇ、拙者頑張ったよ？　妙にこちらばかり狙ってくるこの怪物（クラーケン）を足止めしてたよ？　これでもマスターちゃんの方に被害がいかないよう、結構気を使って頑張ったんですぞぉぉ!?」
「ソウデスネ、カンシャシテマス」
「心こもってなさ過ぎでは!?」
　因みに、魔神柱から発射されるビームを紙一重に神回避しながらの発言である。あまりの紙一重さに黒髭の自慢の黒髭が焼け落ちてしまった。いや、卑猥な意味でなく。
「あっちいいぃ！　髭が、拙者のチャームポイントの髭がぁ！　もう散々でござるよぉ！」
「日頃の行いの結果ですわね、コレは」
「いつもマスターたちにまでセクハラしてるからこうなるんだよ。自業自得」
　顔から黒煙を上げるというギャグ漫画のような黒髭の姿を呆れたように見ながら彼を罵倒するのはアン＆メアリー。今回も第Ⅲ特異点と同様、黒髭の船に乗っていたらしい。
「やっほー、マスター。会えてよかった」
「酔いは覚めたようですわね」
「二人共、来てくれたんだ……よかった！」
　黒髭の『女王アンの復讐号（クイーンアンズ・リベンジ）』が大分近づいて、二人の姿が立香にも見えた。こちらとあちら、船の手すりに乗り出して再会を喜び合う。
「……拙者とは本当に反応が違うのでござるなぁ……悔しい、でも…っ…」

「そういうところなんじゃないかなって」
「ァ、ァ!? てめぇ、この黒髭様に――」
男が言うにはあまりに気持ちの悪い台詞を吐こうとした黒髭にむかって、アダムが見かねて言えば、物凄い形相で黒髭が振り向き――そして固まった。
完全なるフリーズ。色々と彼のキャパを超えてしまったらしい。
「え、あれってなんでござるか。美少女でござるか。それともママでござるか。あんなの見せられたって、拙者はどうすれば……」
「ハァ……」
「もーう、なにしてんのさぁ！」
ブツブツと何かを呟く黒髭に、心底呆れたとアンとメアリーはため息をつく。こんな船長の船に再び乗ってしまった過去の自分たちの判断が今は恨めしかった。

「……ま、とにかくだ。黒髭（アイツ）の様子からは想像もつかんだろうが、ちょっとアタシたちもピンチでね。マスターが来てくれてよかったよ。攻めに出るきっかけが欲しかったんだ」
「――ピンチって、どのくらい？」
「そうさねぇ、色々と酷いが――特にあの金髪の船なんか、ありゃもう壊れかけだ。いくら自分に傷がつかないったって、『船』が沈んじまえば、私達はオシマイさ。そろそろ戦況を建てなおさないとね」
「金髪の船？……あれは、『アルゴノーツ』！」
ドレイクが指を指した方向を見れば、見覚えのある船が魔神柱に襲われている様子が見て取れた。帆（セイル）を操っているのはかつて敵対したイアソン。彼も来てくれていたらしい。
立香から見る限りでは、『アルゴノーツ』は囮・撹乱が役目であり、本命のアタッカーはヘラクレスであるらしいとわかった。船から少しばかり離れた場所で上がる派手な水飛沫は、ヘラクレスの豪腕によるものだろう。
「どうやら、あの女神連中だとかバーサーカー連中だとか、高火力の面

子が軒並み遅刻中でね。他の座と違って人員に余裕がない。それこそ、攻撃に関してはあのヘラクレスぐらいが頼りなんだ――そこでだよ、マスター。アンタのとこのサーヴァントの力、ちっとばかし貸してはくれないかい？」
「オーケー、わかったよ船長。で、何をすればいい？」
どうにも窮地に立たされているようには見えない豪胆な表情を浮かべながら協力を要請するドレイクに、立香は不敵な笑みを返す。ドレイクが「あんたも肝が太くなったねぇ！」と大きく笑った。
「なぁに、簡単なことだよ。デカイのを一発ぶつけてくれりゃいいんだ。少しでもこの猛攻がやめば、すぐに立てなおしてみせる」
つまるところ、ドレイクたちがここまで追い込まれた理由はひとつであり、それがいつまでもやまない魔神柱の攻撃である。
ドレイクも黒髭もイアソンも、余裕さえあれば船の耐久力を回復させる手段を持っているのだ。それを使う暇がないからあわや大破といったところまで船を酷使させられているだけで。
要は、一瞬でも隙を作ってしまえばこっちのものなのである。
「それならば私が。マスター、よろしいですか？」
「そうだね。アルトリアが適任かな」
役目を買って出たのはアルトリア。立香，ｓメンバーの中で最も広範囲をカバーする対城宝具を持っている彼女なら、ドレイクの頼みを叶えてくれるだろう。立香はその提案に頷いた。
「では――」
「魔力回路、起こして、魔力を譲渡――」
「魔力は僕も負担しよう。だから、立香のことは心配せず、思いっきりやるといい」
早速アルトリアが剣を抜けば、立香がアルトリアとのパスを通じ真名解放のための魔力を流しこむ。続いてアダムも、アルトリアの肩に触れて魔力を譲渡した。
「セイバー、狙うなら３時の方向にしろ。あと３秒後、魔神柱たちが密集するはずだ」
エミヤが戦場を見渡しながら剣を振るうべきポイントを指示する。

アルトリアは静かに首肯すると、大きく上段に聖剣を振りかぶった。
水飛沫が上がる中、聖剣に束ねられていく輝きが水滴に反射して煌めく。高密度の魔力のうねりが刀身に纏わりつき、星の息吹は大きく吠えた。
エミヤの指示どおりに、脚鎧（グリーヴ）の先は3時の方向へ。アルトリアは目一杯に息を吸い込むと、力強く一歩を踏みしめて、聖剣を振り下ろす。
「約束（エクスカリバー）され、勝利の剣――！」

一刀両断。
星の輝きが海を割り、束ねられた燐光が魔神柱を薙ぎ払っていく。海面上にさながらクラーケンのように伸ばされた触手は、ひとつ残らず泡沫と化した。
「ひゅう！　いいねぇ」
ドレイクは、真名解放と共に巻き起こった暴風から守るように、帽子を押さえて固定しながら口笛を吹いた。ああ、これでやっと本当に――海賊らしい戦いができそうだ。
「野郎ども、出番だよ！　進め、進めぇ！」
オオオ――――！　ドレイクの力強い号令に、海賊たちの鬨の声が上がる。士気は上々、船も大分回復した。さぁ、あとは先ほどまでのお返しをするだけ。
「攻められたままじゃあ、海賊が廃るってもんさぁ！　奪われたなら奪い返す（やりかえす）、それが流儀だからね。宝だけに限った話でもないだろう――さあ、攻勢にでるよ！」
ググッ、と船が大きく傾き、魔神柱の元へと進路を変える。先ほどまでの窮地はどこへやら、意気揚々と敵陣へと突っ込んでいく海賊たちの姿は、立香から見て最高にかっこ良かった。
「よっし、一発逆転！　アルトリア、ナイスカリバー！」
「え、ええ。ナイスカリバー、です！」
テンションが上がりすぎて訳がわからない褒め言葉を口に出す立香に、アルトリアは少し戸惑いながらも恥ずかしげに返す。

マシュやアダムも、「ナイスカリバー！」と何が面白いのか同じようにアルトリアを褒めた。
「ナイスカ……いやいや、何なんですかこれ！」
「まぁまぁ、あの娘がはしゃぎ過ぎてるだけだから。ただのノリだよ、ノリ」
アルトリアがはっと我に返って突っ込めば、返ってきたのはアダムの楽しげな声であった。

戦況は一気にひっくり返り、人類側の陣営はまさに一発逆転を成した。
奇蹟を起こした『星の開拓者』たるドレイクの定めか、此度も一度窮地に陥ってからの逆転劇。相変わらず荒波に乗るような運命に生きる女である。
兎にも角にも、戦局は安定。壊れかけた船は元のような光を取り戻し、衰えていた勢いは今、どんどん膨れ上がっていくように増していく。
そう遠くもないうちに、この座もドレイクたちだけに任せて先に進めるだろうと、立香は思った。

「――っ？」
「――！――ドレイク、避けろぉぉぉぉ！」
アルトリアの『直感』が異変を察知した刹那、黒髭の切羽詰まった叫びが海原に響く。
此度の座。立香たちが考えていたような、一発逆転だけで終わるほど甘くはなく。
執念深くずる賢い魔神の中の一柱はひっそりと――この時を待っていたのだ。
「……マスター！」

黒髭の叫びに気づいた時にはもう遅く、風に乗って進むドレイクの船、そのすぐ横に魔神が姿を現す。
『約束されし勝利の剣（エクスカリバー）』の一撃を海底に潜むことで逃れた一柱。本来此処が海原でさえなければ見逃すことなどなかったであろう伏兵。
その魔神柱は、ぐぐっ、とその胴体を振りかぶると――立香達の立つ甲板に叩きつけた。
「うぉぁぁあ――！」
その勢いと質量に、大きく船はグラつき、突風がひとつ巻き起こる。海賊たちの野太い悲鳴が響く中――人類救済の要、立香は。
「――あ――」
「先、輩――！」
マシュが手を伸ばすも、届かない。大きく傾いた船体、甲板が水浸しであったことも相まって滑り落ちた立香の身体は大きくうねる海へと投げ出された。
「なんてこった……くそ、どけ、じゃまだっての！」
メンバー中最速の英霊クー・フーリンは立香を追い飛び込もうとするが、魔神柱に邪魔されて叶わない。
最悪だ。油断していた。仕留め損なうなどと――しかもそれを見逃すなど！
「この波だぞ、早く救助を――くっ！」
「我々を妨害することだけを目的に……っ、くそ、突破できません！」
魔神柱は賢かった。不意をつき、マスターを落としてしまえば、あとは耐えるのみとわかっていた。助けに行こうとする英霊たちの足止めだけを数分も続ければ――この高波だ。ただの人間である立香は容易く死に至る。
ジャバァッ！
必死に突破口を開こうとする英霊たちの耳に、そんな音が響く。落ちた。彼らの胸に焦燥が募る。
「（嫌、だ――嫌だよ――）」

冷たい、息苦しい。氷を体中に突き立てられたかのように、痛くてしかたがない。
ここまで来たのに、どうして。まだ何も救えていない。何も終わっていないというのに。
必死で藻掻く。海面に向かって進もうと足掻き――なぜだろうか、全く辿りつけないままだった。
幻術をくらったか、あるいは運動能力阻害の魔術をくらったか。あるいは、水面に上がれないほどに溺れかけているのか。
なんにせよ、もう息が続かない。
「(嫌だ、嫌だ――まだ、まだ、生きたい)」

「――立香ァァああ!」

そうして、意識は暗転する。

『楽園の大嘘つき』

ふわりふわりと、まるで雲の上に乗っているかのような心地だ。
立香が瞼(まぶた)をゆっくりと上げれば、木々の隙間から降り注ぐ陽光が目を刺す。眩しくて、思わず顔を手で覆(おお)った。
鳥のさえずりと木々のざわめきが聞こえる。遠くの川のせせらぎが寝起きの耳に優しく響いた。
ゆっくりと身体を起こして立香は周りを見渡す。深い森の中。ぐねりと曲がった自然の樹木がいくつも根を張り、見たこともない草花が競うように咲き乱れていた。
それでいて、『鬱蒼(うっそう)と』という言葉が似合うような景色でもない。それぞれが自由奔放に育っているようでありながら、それでも一種の秩序を損なっていないように感じる。
例えるならば、お伽話の中に出てくるような不思議な森だ、と立香は思った。
「ここは、どこ？」
呟いてみても当然答えは返ってこない。先ほどまで決戦の場所にいた筈なのに、一体どういうことなのだろう。
覚えているのは、第Ⅲの座『観測所フォルネウス』に唸る大海に落ちたこと――
「――ああ、もしかして」
死んでしまったのだろうか。とは口に出さなかった。
ここはまるで天国のような場所。あるいは楽園と言ってもいい。なんの前触れもなく、しかし其処にいるということはつまり――そういうこと(死んだ結果)なのではないかと。
そんな冷たい不安が心の奥底から這い上がってくる。でも、何も成し遂げずに死んでしまったことなど認めたくなくて、だから言葉にはしなかった。
戻らなくては、と思う。マシュも、ロマンも、ダヴィンチも、他の皆も待っている筈だ。まだ玉座に辿り着いてすらいない。自分は人

類を救わなくてはならないというのに。
「とにかく、どこか、出口を」
——ここは入った以上出られるような領域ではないのかもしれない。
そんなことを囁いてくる怖がりなもう一人の自分の声を無視して、立香は歩み始めた。

◆

しばらく歩けば開いた所に出た。薄く霧に包まれた湖畔だ。ほんの小さな、霧で視界が遮られている今でも対岸が見えるような、そんな湖の傍だった。
清涼な空気が広がっている。周りの木々に指を撫でつければ、冷たい露（つゆ）が指先を濡らす。朝露があるということは今の時間帯は朝なのだろうか、と立香は考えた。
今までも希薄だった生命の気配が、ここに着いた途端消滅してしまったかのように思える。それぐらいに静かで、どこか神秘的。
この場所というのは、本来であれば自分には手が届かない領域なのだろうと、立香は漠然とした予感を覚えた。
「あれ……？　そういえば、此処は何処かで……」
天上の景色に目を奪われていた立香を感動の次に襲ったのは、唐突の既視感（デジャヴ）だった。自分はいつだったかこの場所に来たことがあるような気がしてならなかった。
自分——あるいは、自分ではない自分のような誰かが、ここにいたような気がする。

——ざくり
「——!!!」
耳朶を打った草踏みの音に、立香はバッと勢い良く振り向き、指先を銃の形にして構える。魔力回路を励起させ、拘束の呪（ガンド）いの態勢をとった。

なんだ、誰だ、敵か――？
７つの特異点を駆け抜けた立香の成長した警戒心が張り詰める。サーヴァントが一人もいない状況で油断などできるはずもない。
マシュすらも傍にいない現状、敵のサーヴァントどころか魔獣一匹でも出てくれば即お陀仏だ。それこそ、先ほど想像していたとおりに死んで天国へと召されてしまう。
立香は、しっかりと指先を音の源に向けたままに、鋭く問いを投げかけた。
「誰？」
「――アンタ、そりゃあ此処に居るってんなら、俺しかないッスよ。分かってるでしょ」
緊張感マックスだった立香とは裏腹に、飄々とした調子でなんの躊躇もなく姿を晒したのは、胡散臭い喋り方と声色をした少年だった。
「しばらく来なかったと思ったら、また急な来訪ッスね。久しぶり過ぎて俺が此処に居る事すら忘れたんスか」
山吹き色の刈り上げた短髪をわしわしと掻きながら不機嫌そうに溢す少年。立香より１０ｃｍ高いぐらいの身長。一見ひょろりとした印象を受けるが、露出した肩口からは鍛えられた肉体が見え隠れしていた。
黒い布一枚をぐるぐると身体に巻きつけたような服装で、腰には丈夫そうなツタがベルト替わりのように結んであった。そして、そのツタには、小さなナイフが下がっている。
ナイフはもう随分と刃こぼれしているように見えた。相当使い込んでいるのだろうか。それにしたってボロボロ過ぎるが。もともと上等そうなものではないし、仕方ないのかもしれない。
立香は、警戒を続ける――しかし。
「ちょっと散歩から帰ってきてみれば、おっそろしい呪（ガンド）いなんか構えて、ほんと、なんでそんなに気が立ってるんスか？」
アンタのガンドは森羅万象すべからく拘束（スタン）だから洒落にならないんスけど。などと呟きながら、立香の緊張とは裏腹に、彼はあれよあれよという間に立香の目と鼻の先にまで辿り着いてしまった。

立香の胸中は困惑で一杯一杯だ。どうやら聞く限りでは自分と彼は知己らしいが、立香には全く見覚えのない話。こんな特徴的な喋り方をする人ならば忘れないだろう。

――兎にも角にも。

「――あの、」

「……ん、アンタ、なんか様子がオカシイっスね。なにかあったんスか？」

立香は指先をゆっくりと下ろす。敵ではなさそうだし、ガンドはひとまず置いておいて。まずは誤解を解くところからだと、立香は口を開いた。

◆

「――なるほどね、理解したっス」

説明を終えた立香は、少年の言葉にほっと息をつく。こんな場所にいるのだから、世界の滅亡などという荒唐無稽な話にも理解を示してくれるとは予想していたが、その通りにうまくいって良かった。

これで「何いってんだアンタ」と冷たい目で見られようものなら、心に向かって相性有利のブレイブチェインを決められたような状態になってしまう。つまりは瀕死。そんな未来想像したくもない。

「確かにアンタと俺は知人同士なんかじゃなかったみたいッス」

「でしょう？　私は貴方にあったこともない」

「あぁ、いやいや、でもアンタは、俺の知ってるアンタっスよ」

「え、」

「言うなれば、一方的に知ってるって奴っスね」

――よくあるでしょ、アンタ。『英霊』と関わって来たっていうんなら。

立香の頭には、今までに出会ったサーヴァント達の姿が思い浮かぶ。召喚された折、初対面なのに知り合いのような反応をする者も、一緒に駆け抜けた特異点の記憶を忘れていた者も様々な英霊がいた。

「俺の知ってるアンタと今のアンタは、なんというか時間軸がズレて

るみたいな感じッスね。俺はアンタの未来のオトモダチって奴なんスよ」
「――まって、ということは、貴方」
「ご察しの通り、英霊ッスよ。サーヴァント……とはちょっと違うッスけど。此処は現世じゃなくて、どちらかといえば『座』に近い所ッスから」
なんと、この少年、英霊であるらしい。なんの変哲もない、英霊らしい何かを感じない、軽薄な態度が目立つぐらいの不思議な少年だと、話を聞いた今でも立香にはそう思えてしまう。
「信じられなーいって顔。相変わらずわかりやすいッス」
「え、あぁ、どうもゴメンナサイ。えと、それで、貴方は――」
「……ああもう、アンタに『貴方』って呼ばれるとか背中がムズムズするッス！　どうにかならないッスかそれ！」
「えぇ……」
彼と会ったという未来の自分は、一体彼のことをどう扱っていたのか。本当にの気持ち悪そうにする少年の様子に、立香は純粋に疑問を感じた。
「えっとじゃあ、なんて呼べばいいのかな？」
「そうッスねぇ……これも何かの運命ッス。世界を救う前の彼女に、それも此処で会えたのは、きっと、とても大事な意味があるッスよね？――ねぇ、父さん」
「父さん……？」
「未来のアンタは、初めて俺と会った時、まるで顔見知りみたいにしてたッス。それがなんでなのか、ずっとわからなかったんスけど、こういうことだったんスね」
――でも確か、アンタ、俺の名前は知らなかったみたいだったし――そう呟きながら、少年は立香に向き直る。
「だから、俺の真名は、きっとアンタは知らないほうがいいッスから――」

「エデンのアサシンと、そう呼んでくれれば。長いなら、略し方は任せるッスよ」
そう言って、少年は立香に手を差し出した。

◆

特に嫌がる様子もなく仮契約を受け入れてくれた少年――『エデンのアサシン』に、立香は何処か拍子抜けしながらも、回路（パス）を結んだ。
此処から出たいから協力してくれと立香が頼めば、二つ返事で了承してくれたアサシン。立香は、彼の案内でこの空間の出口へと向かっていた。
「そういえば、此処はどういった空間なの、エデ☒さん？」
「……アンタ、ネーミングセンスは相変わらず皆無なんスね」
溜め息を吐くアサシンに対し、立香が「真名を教えてくれないのが悪い」と心外そうに頬をふくらませれば、「この先そういう奴にも一杯会うことになるっすよ」と笑って返される。
さっきから食い下がっているというのに、暖簾に腕押し、糠に釘。なんというか、話していて掴みどころがない。まるで目まぐるしく姿を変える雲のよう。自由な人だな、と立香は思った。
「……そういえば、此処は何処なの？　さっき、『座』に近い、とか言ってたよね」
ひとまずは真名を諦めて、立香は辺りを見渡しながらそう聞いた。前を歩いているアサシンは、ちらりと立香の方へと顔だけ振り向きながら答える。
「そうッスね――英霊へと至れなかった『誰か』の生きた場所。焼き付いた記憶の残響。言い方は色々ッスけど。まぁ、『控え室』みたいなもんと思ってくれればいいッスよ」
「控え室……？」
「そう、現世と座との中間に位置する、至れなかった者の場所。そうッスね……決して英霊になれるような器ではないけれども、世界に必要とされているから其処にいる。そんな存在がいつかのために出番を

待つ、辛気臭い場所の一つッスよ」
「世界に必要とされているって……？」
「そりゃあ、まあ、そうッスね……あんたの制服に付いてる替えボタンみたいな？　絶対に必要な訳じゃないけれど、ないと困る時がいつか来るかもしれない。そんな万が一の為に控えさせられてる奴も居るッスよ。世界を都合よく回すための歯車の一つとして」
「……」
どうも容量を得ない彼の説明。雰囲気どころか話す内容まで掴みどころがない。立香には半分も理解できなかった。此処に他の誰かがいれば、分かりやすく噛み砕いて説明してくれたのかもしれないが。
「結局、使われないままに忘れ去られるのが普通ッス。けど、アンタの所では違ったみたいッスね……それだけでも、きっと救いだったと思うッスよ」
何処か遠い目をして言うアサシンに、立香はこの場所が誰のための場所なのか、わかった気がした。
なんの根拠もないけれど、この光景をいつだったか見たような気がしていたのはきっと、彼の記憶で――
「もしかして、此処は、アダムの……？」
「今はその名前なんスか。まあ、召喚されるなら大体そうッスよね。一番の有名所だし」
呟いた立香に、アサシンは静かに首肯する。立香は改めて周りを見渡した。気づいてみれば簡単なことだった。ここはいつかの夢で見た湖畔。アダムが生前、唯一安心して過ごせた場所だ。
となれば、ここはアダム――いや、その名を与えられた『彼』の生きた場所なのだろう。
なぜ、ここに来てしまったのだろうか。
「……ここは夢の中みたいなもんッスよ。あの人と関わりを持った人間は、偶に此処に辿り着く。深い後悔を覚えた時。狂おしいまでに会いたいと求めた時。そして、生きたいと必死に願った時。条件は色々ッス」

アンタは、一体どれッスかね？　立香の内心の疑問を見ぬいたようにして、アサシンはからかうように笑った。
決まっている。生きたいと願ったからだ。こんな所で死にたくないと思ったからだ。何も成し遂げず、今までの全てを無駄にして無様に死んでしまうことに、例えようのない恐怖を感じたからだ。
気絶する前の光景が脳裏をよぎる。荒れ狂う海、叩きつけられる魔神の巨体、傾く船体、突然の浮遊感――刺すほどに冷たい嵐の海面。
ゾワリ。恐怖が立香の首筋をゆっくりと撫でた。
「……ここからは、どうすれば出られる？」
顔を左右に激しく振り恐ろしい感覚を振り払って、立香はアサシンに問う。早くここから出なければ。そんな義務感が立香を追い立てているような気がした。
「今やってるように世界の端まで走るか――あるいは、アンタが迷いを振り切るか。言ったようにここは夢の中ッス。起きようと思えば起きれるもの。アンタの身体は未だ『向こう側』なのだから」
「迷い、なんて……そんな、」
「ない、って言い切れるッスか？　本当に？　戻りたくないと、もう頑張りたくないと、そう思ってないッスか？　このまま此処で蹲っていたいと、そういう気持ちは微塵もないッスか？」
そんなこと思ってない。なんて言えなかった。
もう一度あの戦場に赴くことが、どうしても嫌だった。何もかもを見捨てて逃げて仕舞いたいと感じてしまう。今まで許されなかった逃亡の選択肢が、今この時は選べるかもしれないと知ってしまったから。
この夢を一生見続けていたい。立香の心はずっと昔から軋み続けてボロボロで。危険なことはもう懲り懲りで。
「アンタはもう十分頑張ったッス。その小さい背中でよく背負ったもんッスよ。本当に、現代にいる人間とは思えないぐらいに、眩しい英雄だったッス」
だから、もういいんじゃないッスか？　そうして、アサシンは甘い言葉を囁く。さながら詐欺師のように、張り詰め続けてきた立香の心

を巧みに緩めていく。
立香の眼の色が輝きを失っていく。虚ろに歪み、生気を失い、まるで操り人形のように伽藍堂になっていく。呼吸は浅く小さくなって、まるで眠っているようだ。
いつの間にか、アサシンと立香の歩みは止まっていた。
「……もう一度聞くッスよ。アンタ、もう帰らなくてもいいんじゃないッスか？」
そうだ、いいじゃないか。休んでも誰も文句は言わない。自分ごときが救えるものなどたかが知れている。向こう側では数多の英霊たちが戦っているのだ。自分が居なくたって、自分なんか居なくたって、皆がきっと自分の代わりに――

――本当に、そうかい？

「――――――っハァッ……！」
頭に響いた優しげな響きの厳しい声。ドクン、と静まっていた立香の心臓が強く鼓動した。
立香の瞳が輝きを取り戻す。詰まった喉が吹き返したように呼吸を荒くさせる。動悸を落ち着かせることも程々に、立香はアサシンをキッと睨みつけた。
「――何をしたの!?」
「さぁ？……でも、それがアンタの『罪』ッスよ。掘り起こしたのは俺でも、今までそれを埋めて見て見ぬふりをしてきたのは、他ならぬアンタだ」
そして、それを見据えなければ、きっとこの先を越えられない。
「それは、どういう……」
「……」

立香が問い返しても、アサシンは沈黙するだけだった。自分で考えろ、とそう言外に示されているような気がした。
アサシンは歩みを再開させた。立香も、警戒しつつ彼に着いて行く。しばらく歩けば、アサシンは再び口を開いた。
「……そうして弱さを自覚した今でも、正気に戻れたのは本当に立派なことだと思うッス。それだけ強靭な心を持ってる――いや、誰かにケツを叩かれたッスか？」
立香はアサシンの問いに、先ほど聞こえた声を思い出す。諦観の沼に沈みかけた自分を叱咤してくれた声。本当にそれでいいのかと問い質してくれた声に、背中を押されたような気がした。
あれは誰の声だったのだろう。
自分を奮い立たせるための幻聴だったのだろうか。それとも――
なんにせよ。アサシンの甘言に乗るわけにはいかないと気づけた。今はそれだけでいい。
「……私は、諦める訳にはいかない」
なぜ忘れてしまっていたのだろうか。逃げるわけにはいかないなんて、そんなこと、ずっと前から分かっていた筈なのに。
残してきた者が沢山ある。ここで夢へと逃げてしまえばきっと二度と取り戻せない、そんな大切なものが沢山あるのだ。
怖くて震えてしまっても、痛くて泣いてしまっても、寂しくて凍えてしまっても。それでも走り抜けなければならない。きっとそれは、藤丸立香にとっては譲れない願いの筈だ。
マシュ、ロマン、ダヴィンチ、カルデアのメンバー、人理そのもの。そして――彼の為にも。

「――アンタ、いい顔してるッス。この様子じゃ、あと少しで起床ってとこッスね」
ニヤリと、胡散臭い笑みを浮かべて、アサシンは振り向いた。立香は彼の言葉に周りを見渡す。視界がかすみ、景色がぼやけている。まるで夢から覚めるときのように、鮮明だった筈の輪郭が薄れ途切れて

いこうとしていた。
「なんで、いきなり……私、別になにも……」
諦める訳にはいかない、と宣言したものの、それは強がって言葉にしただけだ。心の中では未だに不安が渦巻いているし、戦場に行きたくないという欲求だって消えてはいない。
迷いを振り切ったなんて、到底言えるような心理状態では無いはずなのに。
「そりゃあ、アンタが腹を括ったからッスよ。逃げたい気持ちも怖い気持ちも、それを持ったままで、背負ってでも成し遂げるって、アンタがそう決めたから」
――やるしかないってのは、高潔な意志では決してないけれど、それでも立派な決意だと思うッス。
そう言って、アサシンは微笑んだ。先ほどまでの胡散臭さは何処へやら、見惚れるほどの綺麗な笑みだった。
「いやはや、短い出会いだったッスねぇ。ま、アンタはそんな短い問答ですーぐ決意固めるんだから、扱いやすいッスね。相変わらずのようで」
「――――!――――!」
心外だ！　この詐欺師め！　とそう叫ぼうとした立香の声は、音になることはなかった。
退去が始まっているのだ。サーヴァントたちが特異点から去る時と同じように、立香の身体が徐々に光の粒子へと変わっている。
「詐欺師なんて、それこそ心外ッスね。俺は本当に、アンタは休んでもいいって思っていたッスよ？」
音にならない立香の叫びは、しかしアサシンには聞き取れたらしい。打って変わって穏やかな表情で彼はそう言った。
「――？」
「……いろんな救世主がいる。アンタと同じ立場で様々な名前の『誰か』。男の時も女の時もある。アンタが普通に暮らして、他の誰かが世界を救うことだってあったんだ」
特徴的な語尾は彼が真剣な表情を浮かべると共に消え去った。

パラレルの話、あるいは可能性の話だと彼は言う。ある時は自分と同じ姿で違う名前の誰か。またある時は自分の兄に似た男の子。救世主というのは、なにも自分だけではないのだと。

「アンタは、その中でも格別に弱い子だ。何かを失うたびに震えが止まらない。戦うたびに自分を騙さなければ前も向けやしない。守れなかったものが一つでもあれば、夜も眠れない――そんな、救世主なんかには向かない、とても弱い子だ」

だから、とアサシンは息をつなぐ。

「アンタぐらいは休んでもいいと思った。アンタみたいな臆病者でもここまで至れたのだから、救われた世界は他に沢山あるのだから、アンタの世界ぐらい救われなくなっていいんじゃないのかと。アンタは救世主を張り続けなくていいんじゃないかと思った」

じゃないと酷だ。誰かを犠牲にしなければ救われない世界なんて、残酷だ。立香の様子が『あの人』に重なって見えてしまった。

「……でも違ったんだな。ここで休んでしまうことは、アンタにとって最も酷な選択だった。浅慮だったよ。アンタは十分に強かった。そんなの、アンタに初めて会った時から知ってたはずなのになぁ……」

全く、とアサシンはため息をつく。そんな彼に、立香は貴方はなにも悪くないと精一杯笑顔を作って伝えた。

「……そうか。なら、アンタに一つ、助言を」

「――？」

「アンタは他の世界の救世主より弱い。失うことを許容できない弱さは格別だ。見捨てる選択が頭に浮かばない。英断ができない弱さを持ってる」

「――」

「だから『あの人』を呼べたんだ。アンタだからこそだったんだ。失うことを認めない弱さ。矛盾しているように聞こえるかもしれないが、それがアンタの強さだった」

「――」

「いいか、立香。アンタには他の救世主とは違う選択肢がある。失う

ことを何処かで受け入れてしまった彼らと違って、アンタには、今まで失うことに苦しみ続けてきたアンタには、その分の新しい可能性があるんだ」
「――？」
「失うことが怖いままでいい。そのままでいたいのならば、それでいいんだ。アンタには、救うという選択肢がまだ残っているのだから」
そうして、アサシンは立香の頭を撫でる。少し硬くて、でも柔らかい。とても安心する。立香はこの感触を知っている気がした。

「……そろそろ時間ッスね」
「――」
いつの間にか彼の口調は元に戻っていた。立香の頭から手を話すと、彼は立香に向かって優しく微笑んだ。そして、ああ、となにか思い出したようにして一つ指を立てる。
「そうだ、アンタに一つ、頼みごとがあるッス。まあ、変な道に引きずり込もうとしてた詐欺師の言うことなんてアンタに聞く義理はないッスけど……」
「――？――！」
何いってんの？　気にすんな、バッチこい！　と立香は胸を拳で叩いて表現する。そんな立香の様子がおかしかったのか、アサシンはクスリと笑った。
「ホント、お人好しっスね……『あの人』を救ってやって欲しいッスよ。不器用で、どうでもいいことで悩み続けて……弱くて可哀想な人ッスから」
「――!!」
任せとけ!!　立香はアサシンの目をまっすぐ見つめた。世界一弱い救世主に何言われたって頼りないかもしれないけれど、と苦笑い気味ではあったが。
アサシンはそれでも、そんな立香に安心したように笑った。
「そうッスね――名前でも考えてあげて欲しいッス。『アダム』なんか

より相応しいとびっきりのヤツを。きっとそれが『あの人』には何よりのプレゼントッスから。ま、子から親に名前を送るなんて、ギャグじゃないんだから、とは思うッスけどね！」
カラカラと、アサシンは笑う。立香も釣られて笑った。

とうとう、立香には何も見えなくなっていた。あと数秒で退去が完了するだろう。そうすれば、またあの地獄に逆戻りだ。
それでも、立香は不思議と怖くなかった。
何故だろう――心は恐怖や憂鬱を訴えているというのに、心のど真ん中、芯の部分がそれに取り合おうとしていないかのような。
あるいは、ゆっくりと毛布で包むようにして、温かい何かがそんな負の感情を覆っていくような心地だ。
なんにせよ、まだ戦える。立香はそう思った。
「じゃあ、またいつかッス。会うことはわかってるッスからね。俺にとっては過去の出来事ッスけど」
「――」
立香は、「またね」と手を振る。アサシンも手を振り返した。再開の約束だ。
「次からは俺の言葉に騙されないように。俺、実は大嘘つきッスからね？」
「――」
言われなくとも。と立香は首肯する。もう迷いはしないと決めたのだから。
とうとう彼の声すら届かなくなってしまう。立香の視界は真っ白に染まり、脳の奥からピリピリと覚醒の予兆が走る。もう直ぐ起きる時間らしい。
戻るのに大変な時間を費やしてしまった気がする。寝坊助と怒られてしまうだろうか？

――そういえば、アサシンは自分の事を『大嘘つき』と言っていたけれど。

嘘も方便と言うし。今回のように、厳しくも優しい嘘であれば、次も騙されてあげていいかななんて。立香はそんな他愛もないことを考えた。

「じゃあ立香、あとは頼んだッスよ！」

そうして、意識は覚醒する。

『そこにあって、そこにない。けれど確かに分かるもの』

――少年は、懸命に手を伸ばした。
そこに打算など無かった。躊躇など無かった。思考さえも無かった。
ただ、我武者羅（がむしゃら）に――陳腐な言い方で表せば、考えるよりも先に身体が動いていた。
何故？　と遅れた思考が追従してくる。
――決まっている。この身この全てはその為にあるからだ。
『人類』という存在を証明し、継続するためだけの機構。いつかのための予備部品。なればこそ、この行動はなにも間違ってはいない。むしろ自然なことなのだ。
彼女は、立香は、今この世にある最後の人類。人類の為に――未来の為に、死なせる訳にはいかないから、だから、助ける。

――本当にそれだけか？

――ズキリ

「――！――立香ぁぁぁぁぁア！」
脳に差し込まれる痛みを誤魔化すようにして叫ぶ。荒れ狂う大海原に、手を差し出しながら無様に落下していく。
ああ、助けなければ。救わなければ。それが自分の存在意義、それだけが彼らの願いなのだから。
「立香、立香ぁっ！」
着水。ジャバァっと激しく水しぶきを上げながら、海面に顔が叩き

つけられるのもお構いなしに、懸命に目を凝らした。
――どこ、どこだ!?　立香！――
目から涙が零れ落ちてしまいそうだ。いや、とっくに溢れているのだろうか。
悲しい。不安だ。自分の無力が情けない。情けなくて、仕方がない。
心の中がぐちゃぐちゃで、整理が追いつかない。この身体の中でせめぎあう三つの人格が入り乱れ、感情を滅茶苦茶に掻き乱していく。
どの気持ちが誰のモノなのか、ひどく曖昧で。憤っているのは『アダム』だろうか。悲しんでいるのは『イヴ』だろうか。悔しがっているのは『僕』、だろうか。
感情を持つことなど許されない筈だった。世界にとって必要なのは、この身体――ひいてはそれが持つ『概念』だけであったが故に。
都合のいい人形としての役割。『原初の人を冠する誰か』というキグルミのための、最高に都合のいい演者。それが自分だ。
声もいらない、感情もいらない。それは全てキグルミが担当してくれるから。自分に要求されるのは、そのキグルミの持つ設定に合わせて動かすことだけ。だから、思うことも想うことも許されないのだと。
もともと、死から永い時が過ぎた自分では希薄だった感情。もともとあったかすらも定かではないソレは、その制約によってより薄く儚いものになってしまった――なってしまえたのだ。
ただ、間違いないことがある。自分は、立香を救わなければいけないのだと、そうした、使命感のような熱い衝動が、今は自分の奥底から湧き上がってくるということ。
この身に焼き入れられた使命――あるいは義務のせいだと、断じることは簡単にできる。この気持ちはキグルミの気持ちであって、『僕』のものではないのだと。
人の子を救うということは、『アダム』や『イヴ』にとっては当たり前のことで。そして、世界がそう求めていることでもあって。だからこそ、『僕』という存在の感情など入り込む余地は無くて。

きっと自分は、『僕』という感情がどう思おうと、あるいは気絶してさえいても、こうして彼女の為に海に飛び込んだであろうことは、想像に難くない。それが『役割』だから。

けれど――

「いた、いたっ！　立香、息をしろ、目を開けて！」

この時の行動に、本当に『僕』が関わっていないとは、どうしても思えなくて。

『アダム』と『イヴ』が躊躇していた筈の人の子との接触。それが、どうだ。今こうしてがっしりと立香の手を離さないでいる『僕』は。死にかけている彼女をかき抱く『僕』は。

ああ、いつからこうだったのだろう。

出発前のカルデアでは頭を撫でた。海を渡るときには彼女を背負いさえした。

それは絶対に、『アダム』も『イヴ』も『世界』すらも、許さないことであった筈だ。

なら、だからこそ、『僕』は――

「――痛っ！」

傷に海水が染みる。

海に飛び込んだ衝撃もあって、全身に刻まれたあらゆる傷が開いていく。応急処置にも程がある最低限の治療だったから、こんな簡単にぶり返すのは当然のこと。

じわりと海面に溶け出していく赤黒い血は、この特異点に来てから、常に引き受け続けてきた役割の代償だった。

「ああ、立香――立香……」

けれど。そんな痛みは、きっとどうでも良かった。

こうして彼女を抱きしめていることが今は全てだった。

「――か、ハッ――」

立香の呼吸が戻る。激しく咳き込み、水を吐き出し、懸命に生きようともがいている。

「あぁ……」
彼は安堵のため息をつく。生きていて、よかった。そんな感情が心を満たしていく。
ああ、いつからこうだったのだろう。
――僕はね、それこそ、『無根の英霊』とやらがあってもなくても――
いつだったか、森で種火を集めていた時の言葉が脳裏を過ぎる。
思えば、あの時の言葉ほど不思議なものはなかった。言っていて自分で自分がわからなかった。だって、そんなこと生前には一度たりとも■■■■■■。
――君たち（子ども）から頼られることこそが――
けれど、きっと、それが『僕』だというのなら。
それはきっと、心の奥底に秘め続けていた、自分にさえもわからないもので。

そして、一番の願いだったのだろう。

◆

「くそ、この、ふざけるなよ！　小娘を狙うなんて卑怯にもほどがあるだろう！　それはあれだ、暗黙の了解的にやっちゃいけない奴じゃあないのか!?」
「貴方が他人に卑怯という言葉を使うのは、どうかと思うけれどね……」
「ひっ……え、ええい！　うるさいぞメディア！　とにかく船を回せ！　あの小娘を引っ張りあげるんだ。波を立てるなよ、ただの人間だから飲み込まれる！　丁寧に繊細にだ。そういうの得意だったろう!?」
「――ええ、了解よ。船長さん」
本当に、ピンチになれば憎たらしいほど頭が回る。そう内心で微妙

に感嘆しながらも、メディアはアルゴノーツを立香が落ちた方向へと慎重に移動させる。
波が立たないようにゆっくりと動かして、立香を見逃さないよう探知の魔術を張った。
焦らず急ぐ。アルトリアの宝具によって一掃された魔神柱ではあるが、そろそろ復活してくる頃だろう。そうすれば手に負えない。
ただでさえ、こんな大荒れの海の中このアルゴノーツの巨大な船体で人命救助など大馬鹿のやることだというのに。邪魔まで入ってくれば達成不可能だ。せめて海が凪いでいたならば、小舟で救出にいけたものを。
「――見つけた」
「ああ、あそこだな、見えたぞ。え～、なにかあったか……樽でいいか！　いいよな！」
暫くいけば、魔術に反応があった。メディアが報告すると、イアソンは目視したのち、甲板に転がった空樽にロープを巻きつけて放り投げる準備をした。
「あら、彼は……」
「なんだ、アイツは。オケアノスでは見なかったが、小娘の仲間か？」
まぁ、それはいい。と聞いた割には興味なさげにして、イアソンは樽を船下へと落とした。
アダムは気絶している立香を樽に固定すると、引き上げるようにサインを出す。イアソンとメディアは――双方、誠に遺憾ながら――協力して、それを引っ張り上げた。
引き上げ終わると、早速メディアは立香の容態を診る。
体温の低下があること。肺に水が少しばかり入り込んでいること。問題なのはそれぐらいで、どれもメディアの魔術で処置できる範囲内であった。
あれだけ大荒れの海に投げ出されておいて、命に関わるような怪我も症状もない。相変わらずの悪運ね、とメディアは感心しながら、治療を行った。
「ありがとう、助かったよ」

「いいのよ。彼女が死んでは元も子もないもの」
「全く、世話の焼ける奴だよ！」
悪態をつくイアソンを横目に見ながら、ふとメディアはアダムの雰囲気が以前より柔らかいことに気が付いた。
少なくともカルデアで見かけていた時は、視界に入るだけでも、威圧感というか凄みのようなものが感じられていたのだが、今はそれが全くもってない。
少年の見た目相応の、優しげでどこか青臭い雰囲気。まるで人が変わったかのようだ。威厳もへったくれもなかったが、メディアはこちらの雰囲気のほうが彼らしいと、根拠もなしにそう思った。
メディアの好みではないが――それでも、立香（マスター）はこっちが好きだろう。
「……メディア、立香の容体は？」
「大丈夫よ、すぐに目覚めるわ。ただの気絶だから」
「そうかい」
ほっと息をつくアダム。心底安心したというリアクションを隠そうともしない。やはり彼は、以前となにかが変わったのだろう。
メディアの目の前に映る光景。立香の頭を自身の膝に乗せ、慈しむように頭を撫でる彼の姿は、カルデアでは絶対に見られないものだったのだから。

◆

「んうっ……」
立香がの口から吐息が漏れる。それに合わせてゆっくりと目蓋が開いた。
一度二度と瞬きを続けて、焦点の合わない目が真っ直ぐに目の前を捉え出したところで、立香はやっと意識をはっきりさせたらしい。
「あ――」
「やあ、立香。全く、寝坊助なんだから」

「うん、ゴメン。でも、ちゃんとその分、得たものはあったから」
「……心配したよ」
「うん、ゴメ……いや、ありがとう」
立香は、そう言ってはにかむ。
そう、得たものはあった。あの場所で、エデンのアサシンと交わした言葉は、約束は、きっと必要なものだった。
誰もが笑って終えることのできる、そんなハッピーエンドの為に、不可欠なものだった。
――『名前』を考えてやって欲しいッスよ――
アサシンと交わした約束が脳裏を過る。
アサシンの言っていることがすべて正しいのだとしたら、今、目の前で泣きそうな顔をしている『彼』は、とても悲劇的な運命を辿っている人なのだろう。
完全に理解できた訳ではない。アサシンの言葉は、よく分からないものの方が多かったから。
けれど、『彼』はその死後を弄ばれているのだと、そのことだけは、立香にもわかった。
そして、それを許せないことだと思った。
「ねぇ、貴方は、アダムって呼ばれるの、嫌い？」
「――――」
そう聞いてみれば、アダムは面食らったようにして、言葉を詰まらせた。立香はそんな彼から目を逸らさず、じっと見つめ続けた。
暫しの沈黙。決して少なくないその時間のなかに、彼が感じていたものは一体なんだったのだろうか。
「そうだなぁ。好き、ではないかもしれない」
「なら――」
貴方が嫌だというのなら、苦しいというのなら、喜んで別の呼び名を――立香がそう言いかけたその時。
「けれど、嫌いじゃないよ」
とても、とても綺麗な笑みで、彼は笑った。心の底から嬉しそうに、小さな頬を目一杯に持ち上げて、笑みを浮かべた。

そんな彼に、立香は何故か、言葉を紡ぐことが出来なかった。
「それが僕自身の名前ではなかったとしても、僕は、誰かに自分が呼ばれていると、その事実があるだけで、とても幸せなことだと、そう思う」
「どうして――」
どうして、そんなふうに思えるの？
どうして、辛いと嘆かないの？
様々な思いを込めた「どうして」だった。
結局、それ以降に立香の口が言葉を発することはなかったが。
「……うん、君が何をくれようとしているのか、どう思っているのか。それが僕の想像通りだとしたら、その素敵な贈り物は、もう少しだけ待って欲しい」
くしゃり、と立香の頭を撫でながら、彼はそう言った。冷えた体に、その手のひらの温もりがより一層際立って感じられる。
立香は、再び「どうして」と今度は視線だけで彼に問いかけた。
「……今の僕には、君のそれを受けとる資格はないだろう。今受けとれば、僕は君に対して胸を張れない。どっち付かずの目的も、日和見（ひよりみ）主義も、そろそろやめないと」
「――？」
「ふふっ……わからなくていいよ。そのうちちゃんと説明するから、今は理解しなくていい。僕のこれは、なんていうか、自分を追い詰めるための独り言だから」
君が聞いているという事実があるから、これで、下手に逃げることなんてできないだろう？
彼はそう言うと、また笑った。
「私、貴方の言葉の意味理解できてないのに？　それがストッパーになるの？」
立香が不思議そうに聞き返せば、彼は少し困ったようにしてまた立香の頭を撫でる。そして、恥ずかしそうに頬を掻きながら、こう言った。
「もちろん。だって――」

「――子供にカッコ悪い所を見せたい親なんて、どこにも居ないだろう？」

◆

――例えば。例えばの話だ。

子供を愛せない親がここに居るとしよう。

男でも女でも、好きに想像するといい。愛せない理由だって、キミの自由に思い浮かべてくれて構わない。

無理やり犯されたか何かで、望まない子供を身ごもったから？

生まれてきた子供が余りにも醜悪な見た目で、自分の子だと認められなかったから？

――なんでもいいさ。キミが思ったソレが真実だということにしよう。

その親には、自分の子供に対する愛情など欠片もない。口をきくどころか目を合わせることだって嫌悪してしまうぐらい。食事も最低限のもの、残飯のような腐りかけ。暴力さえ振るっているかもね。

血は確かに繋がっているんだ。自分が産んだのか、産まれたところに立ち会ったのか。いずれにせよ、自分の血縁だということは疑いようのない事実と理解している。

それでも、先に挙げたように酷い仕打ちを行っている。親としてあるまじきだと、まぁ、感情のわからない僕にだってわかる。キミも当然そう感じることだろう。

当然だろう。これでも人としての心は持っている。

――そうかい。じゃあ次は、別の『例えば』の話を持ちだそうか。

ここに、自分の子供ではない子供でも、まるで我が子のように愛せる誰かがいたとしよう。
これまた、その理由はキミの思うがままに想像してくれて構わない。
そうだ、参考までに。僕が設定を作るとすれば、そうだね――
――その男性だか女性だかは、病気で自分の子供をつくることができない身体だった。
何年も何年も治療を行ったけれど、その努力は実ることはなく。愛する人と自分との愛の結晶が生み出せないことに嘆き悲しみ――そして、孤児を引き取り、里親になることを決意した。
事故で両親を亡くした子。あるいは、先に挙げた『子を愛せない親』から縁を切られ保護された子。事情は色々だろうけど、とにかくその孤児を義理の親として迎え入れ、自分の子どもとして育てることにした。
血の繋がりこそなかったけれど、大切に大切に愛を注いだ。褒めて、叱って、一緒に泣いて、絆は強固なものになって、いつしか本当の親子のようになれた。
子と親、お互いが血縁関係にないと理解していながら、それでも、お互いが相手のことを『親』と『子』として想うことができた。幸せな家庭を築いたんだ。
――なんて、ご都合主義にも程があるかな？　本来ならばもっと多くの苦悩や葛藤がある筈なのだろう。でも仕方ないね、僕はハッピーエンドが好きだから。
幸せな終わりなんて、そう多くはない。今語ったような人生っていうのは、それこそ子供を産めないという悲劇を除けば、とても幸福なものだった訳だけれど。そんなものはとても珍しい。幸せを掴むのは、とても難しいことだからね。

『彼』だってそうだった――掴めなかった人だった。

――さて、なんでこんな話をしたのだと思う？
別に、対して深い意味がある話ではないよ。けれど、大切な話だったと思う。
言うなれば『導入』だ。ここから始まる物語――『彼』の生涯を語るに相応しい場を作るための、土台作りの一貫ってところだね。
特に何を示唆するものでもない。深読みし過ぎないほうがいいだろう。効果といえば、僕が続きを話しやすくなるようにと、ただそんなことの為の話だった。
けれど、まあ、感じるものはあっただろう？
キミはあの神殿で、確かに『彼』の最期に立ち会った。なればこそ、キミという人間は、今の話に何かの意味を見出すことができたはずだ。
――『親』という存在は、子供にとっては必要不可欠なものだろう。
生物学的な観点から言えば当然だが、親がいなければ子は生まれてこない。倫理的に考えてみても、結論は同じさ。子を親が育てるのは人として当然のことなんだ。
けれど、今の例え話を見るに――どうも、『親』というものは、『子』を産んだら誰しもがそれになれるのか？　と聞かれれば、僕は答えに窮してしまう。キミもそうだろう？
それは……

――ああ、前置きが長くなってしまったね。
僕が言いたかったのは結局のところ一つだけなんだ。
キミは『彼』の最期に立ち会った。『憐憫の獣』の前にマスターやマシュと共に立ち、戦って。そうして、『彼』に救われた。
その光景はキミたちだけのものだ。キミたちだけが知り得た物語の一場面だった。だからこそ僕は問いたかったんだ。
『彼』の最期を見たキミに。『彼』が最も『彼』らしく居たその時に立

ち会ったキミだからこそ聞きたいんだ。

――ねぇ、『彼』は果たして、さっきの例え話のどっちの『親』だったんだい？

……それは……

彼は、どっちにもなってしまえた筈だから。

◆

原初の人が、必ずしも『1（始まり）』だと思ってはいけない。

人類は知っている筈だろう？

この世の中には『1』よりもずっと前――

『0（起源）』が存在するのだということを。

【回想】『泣き虫／強がり　立香』

「立香ってさ、泣き虫だよな」

もう3月も下旬の春の日。片付け損ねた炬燵で寝転がりながら、特に興味もないバラエティ番組を眺めていれば、突然、頭上からそんな声が降ってくる。

「……え、なにいきなり」

特に話の流れがあったわけでもなく、そんな唐突な言葉になんと言えばいいのかわからない。当然、戸惑いを表した言葉を返す。

「なにって、そのままだろ」

「いや、だから。なんでそんなこと言い出したの」

自分の言葉を聞いてるのか聞いてないのかもわからない兄に、埒が明かないと起き上がって目を会わせる。これまた季節にそぐわない青の袢纏（はんてん）を身にまとった黒髪碧眼の兄は、煎餅（せんべい）を齧りながらこちらを見ていた。なんとも爺臭い。

「なんとなく。言いたくなっただけかな」

「なにそれ、人のこと泣き虫って言いたくなるって、それどんな病気？」

はぁ、とため息をつく。我が兄ながら酷くマイペースだなと呆れてくる。妹として兄のこの性格は尊敬することもあるが、今のように少々鬱陶しく感じることもあるので、どうにも。身内としては兄を相手にすれば大体こういう評価に落ち着く。こんな兄がえらくモテていることが信じられないぐらいだ。

「……大体そんな、まるで今でも泣き虫みたいな言い方やめてよ。そうだったのは小さい頃の話でしょ」

確かに小さい頃泣き虫だったのは事実だ。ちょっと悪口言われたりだとか、怒られたりだとか、そんな些細なことですぐ泣いてしまうような子供だった。

けれど、それは本当に幼い頃の話であって、今ではそんな性格では

なくなった……と思う。少なくともここ数年泣いた覚えは無いのだし。
「いや、今でも立香は泣き虫だよ」
けれど、そんな自分の想いとは裏腹に、兄はしょうがないなぁといった風に笑いながら、やけにハッキリと告げた。ムッと、少し苛立ちが湧いてくる。
「まさか。なにを根拠に。いつ私が泣いたっていうんだか」
「うーん。分かってくれないかぁ……」
「わかりません!!」
酷い兄だ、と悪態をつく。ふんっ、とそっぽを向きながら、炬燵の上の煎餅を荒く取り上げかじった。
「……まぁ、『泣き虫』っていうのは言い方が悪かったかもね。なんていうか、立香は心がいつも泣いてるっていうか、俺はそういうことを言いたかったんだ」
「はい？」
「来週から、海外だろ？　カル……デ、アだっけ？　妹が国連の所属になるっていうのは、兄として鼻が高いけど……それ以上に、俺は立香が心配でね」
父さんも母さんも同じさ、と兄は少し寂しそうに笑った。
「別に、心配しなくたって……私はもう大人だよ。巣立ちの時期でしょ」
それが愛情ということを分かっていながらも、子供扱いされているような気がして、なんとなく気にくわない。
「いや、そういうことじゃないんだ。立香はもう立派な大人。そういう部分で心配はしてないよ」
「……？」
「さっきも言ったろ？　立香は泣き虫だから」
「だから、わかんないって」
言葉足らずかあえて誤魔化しているのか。要領を得ない兄の言葉にまた苛立ってしまう。
「たしか、よくわからないけど、世界を平和にするための活動をするん

だろ？　立香は優しい子だから、きっと頑張りすぎちゃう気がして」
「……」
「肩肘張ってさ、誰にも頼れずにずっと一人で頑張って、いつか倒れちゃいそうだなって」
「そんなこと……」
「世界の平和維持――なんてさ、きっといいことばかりじゃなさそうだし。人間の汚いところとか、残酷なところとか、きっと一杯見ることになるだろうし。救おうとしても救えないものがたくさんあるだろうし」
「わかってるよ。覚悟してる」
「……心配なんだよ、立香。君は優しいから、ずっとそういうものをずっと背負ったまま過ごしていくんじゃないかって。いつか重みに耐えられなくなるんじゃないかって」
「だから、大丈夫だって」
「……そう。ならいいんだ」
　思わず強めに断言した。それは兄を安心させるためだったのか――それとも、自身の中にある不安を振り払う為だったのか。どちらにせよ、兄はその言葉を聞いて引き下がった。
「でもまぁ、たまには帰ってきなよ？　立香の活躍も悩みも、父さんたちは聞きたがるから。もちろん、俺も聞きたいし」
「わかった。落ち着いたらメールも送るよ」
　そう言うと、兄は嬉しそうに笑った。

　人類史が焼却される、一週間前の話だ。

◆

「あんなに怒らなくたっていいのに……」
「はは、所長は短気――いや、余裕がない人だからね。次から気を付ければいい」

たどり着いて早々に行われたブリーフィングで、大雪の中を歩いてきたばかりで疲れきっていた立香が意識を保てる訳がなく最前列でネムネムしてしまい、所長にしこたま怒られた１０分後。自室として案内された場所に居座っていたサボり魔の男性――Ｄｒ．ロマンに愚痴を溢せば、返ってきたのは苦笑だった。

所長に失礼なことをした、というのはわかっていても、衆人環視の中で今後の活動から外すなんて宣言されてしまえば、不満も貯まるもの。ロマンが言う『次』があるのかもわからない始末だ。

それなりに色んなことを覚悟して、それでも人の役に立とうとはるばる日本からやって来たのに、これからどうすればいいのだろうか。

「……そうだ」

「ん、立香ちゃんどうしたの？」

「あ、家族に手紙を……どうせ暫くは暇でしょう？」

兄に言われていた言葉を思い出した。悩みがあれば相談してほしいと言われていたことだし。メールは所長に嫌われてしまった今の状況で使えるか怪しいので、手紙にするとしよう。

持ってきた荷物を探る。便箋を用意している訳はないので、ルーズリーフを一枚取り出して、そこに取り敢えず書くことにした。

「あぁ、なるほどね。愚痴を近しい人に吐き出すっていうのは、医療に携わる者として良いことだと思うよ。検閲なんてされないから、所長の愚痴でもなんでも、自由に書くといい」

「人の部屋に勝手に居座っている誰かさんの愚痴でも？」

「あー、それは勘弁してほしいかな、なんて」

皮肉を返されて、たじたじのＤｒ．ロマン。いい人ではあるのだろうけど、カウンセリングも担うような医療部門トップが、こんな緩い感じで良いのだろうか？　あるいは、そういう役割にはこの性格の方が向くのかもしれないけれど。

そんなことを考えながらＤｒ．ロマンを半目で見つめていれば、図ったかのようなタイミングでレフ教授から呼び出しがかかった。Ｄｒ．ロマンは私の視線から逃げたがっていたようで、しめたとばかりに部屋を出ていってしまった。

それを見送って、ペンをとる。思えば手紙なんて書くのは初めてだ。どう始めようか。
「まぁ、無難に――」
拝啓、と書き出そうとしたその時、大地震と間違うような揺れと共に、爆音が轟(とどろ)いた。

◆

人理修復？　世界が滅亡？　訳のわからない話を一気に聞かされた頭はもうパンク寸前だった。
「私にどうしろっていうの……」
燃え盛る観測室で死にそうになっていたマシュの手を思わず握って。死んだかと思ったら燃え盛る町に放り出されて。いきなり漫画みたいな戦いが始まって。レフ教授は裏切り者で。所長は死んでしまって。
『世界平和を目指す所で、そこで必要な人材の適性がある』と、そう言われたから来ただけだったのに。いや、確かにその謳い文句は怪しかったけれども。いきなりこんな普通の小娘を捕まえて何を言い出すかと思えば開口一番それだったのだから、もちろん訝しんだけれども！
あのときは、何故か――国連所属という所に大きな信頼性があったからかもしれない――信用してしまって、この状況。正直着いていけていない。
色々と大変だろう事を予想し、覚悟して此処に来たものの、こんな職場だったなんて完全に想像の外だった。
世界が滅亡したなんていきなり言われても。このカルデアの中にいる人以外は、全員死んだなんて言われても。そんなこと言われても!!
混乱している自分を見かねてか、ドクターとダヴィンチちゃんからは部屋に帰って休むように促された。明日改めて話をしたいという。きっと自分は唯一生き残った者として大事な役割を任されることに

なるのだろう。
――そんなの、私には、無理に決まっているのに。
茫然自失といった感じで歩いていれば、自室にいつの間にか到着していた。
「あ……」
全面真っ白で無機質な部屋の中で、何故か机の上にある紙切れが目にとまった。その紙切れだって真っ白なのに、まるで輪郭をさんざん誇張されたみたいに浮き上がって見えた。
書きかけの手紙だ。拝啓、と書こうとして、『拝』すら書き終わっていない手紙だ。
いきなり戦力外通告を出されて、不満たらたらの内心を家族に吐き出そうと思った手紙。所長のことをこれでもかと扱き下ろしてやろうかと、あのときはそう思ってペンを手に取った。
「あ、――」
ふと、気づく。
ああ――手紙を送る相手も、そこに書こうとした不満の原因も、全ていなくなってしまったのだと。
ヒステリー持ちで高圧的だったけど、それでも私を最後は認めてくれたオルガマリー所長も。季節外れの袢纏を来て私を「泣き虫だ」と言った兄も。出発前夜、豪勢な料理を作って泣きながら「寂しくなるわね」と無理やり笑っていた母も。空港で、「頑張れよ」と照れくさそうに何年ぶりにか頭を撫でてくれた父も。
みんな、みんな、みんな――
「そっか……そ、っか……」
つう、と頬に熱い感触がつたう。
そして、肩にずしりと、重いものが積み上げられたような気がした。

◆

「う、おぇっ……」
気づけば駆け出して、洗面台にのし掛かるようにしながら嘔吐して

いた。もう丑三つ時も過ぎた夜。これで何度目の覚醒だろうか。
目を瞑り、微睡みの中に落ちていこうとすれば、決まって浮かぶのは死んでいった誰かの顔だ。
第一の特異点、竜によって支配された百年戦争。歩き回る死体に、食い殺される兵士。人の死を間近で何度見たことか。ここまで人の命とは軽いものだったのかと、とても辛い気持ちになった。
浮かび上がる誰かの顔のほとんどは、名前も知らない、一目みただけの誰かのものばかりだったけれど、どうしてもそれを忘れることが出来ない。忘れてはいけないような気すらしてくる。
ドクター曰く、「修復してあるべき歴史に戻った特異点での死は無かったことになる」のだとしても、私にはどうしても、この死に顔たちを振り払うことが出来なかったのだ。
ひとしきり吐き出し終わって、ベッドに倒れ込む。ちらりと視界に入った机の上に、ほとんどにも書かれていない紙と一本のボールペンが見える。
肩にかかる重圧は、さらに重くなっていく。

◆

「……」
声すら出なかった。あるいは、出したくなかっただけかもしれない。
第七の特異点。神殺しまで成し遂げて修復した魔獣の巣窟バビロニアだったが、そこに達成感は無かった。
ギルガメッシュ王の一言によるものだ。「特異点での死は無かったことにはならない」と。修復した後、その死因が変わるだけであって。そこで失われた命は、経緯が変われども失われたままであると。そう言われたから。
ならば、なんのために私は――
危ない方向へ向こうとする意識を、折れようとする心を、無理やり奮い立たせようと頑張る。

なんとか持ち直して、けれどぐらぐらと不安定で、もう限界が近づいているような気がした。
ずしりずしりと、肩にかかる重さは、第七の特異点だけで何倍にも増えたような気がした。
ベッドに横たわったまま、ちらりと机の方に目を向ける。上に乗ったちいさな紙は、傷みが酷い状態だった。書きかけの『拝』の字も、とうとう消えかかっている。
もう、過去の人達は救えないとしても――まだ、守れるものが、救えるものがあるのなら。白紙の手紙をみて、そんなことを思った。
そうして私は、肩に重いものを背負ったまま、『生きなければ』と、自分を叱咤する。

決戦前最後の英霊召喚が行われる、ちょうど前日の話だ。

◆

そうして、少女は運命（Fate）と出会う。
背負ったままの重荷を、ようやく下ろす時が来た。

『心のままにわがままに』

それは、後悔だった。

人理修復のために犠牲になった――あるいはその命をもってバトンを繋いでくれた彼という存在を、それがもう二度と取り戻せないのだと解っていながら、誰もがずっと名残惜しく思っていた。

それは何処の世界でも同じだった。皆が悔やみ続けたことだった。必要な犠牲だったのかもしれない。あそこで彼が命を投げ出してくれなければ、滅んでいたのはきっと世界の方だったのだろう。けれど、納得などできるはずもなかった。

まるで定められたことのように、彼は全ての世界において自身という存在そのものを薪とし、消えかけた人類史に再び火を灯した。

人理を救う旅『聖杯探索（グランド・オーダー）』とは、その結末が全てであった。決定事項と言ってもいい。その道中、共に歩んだ英霊が違えども、掛け合った言葉が違えども、最後はそれで全てが終わる。

それとはすなわち、『魔術王ソロモン』――あるいは『ロマニ・アーキマン』の消滅。どれだけ順調に修復を成したとて、その悲劇だけは覆らない。何故ならば、それ以外に憐憫の獣ゲーティアを討伐せしめる手段は存在しなかったからだ。

『訣別（アル）の時きたれり、其（ス）は世界（ノ）を手放（ヴァ）すもの』

魔術王ソロモンが成した功績全てを無へと帰す宝具。これを用いた壮大かつ遠回しな自滅によって、ロマニ・アーキマンという男はカルデア所長代理としての――彼自身（にんげん）としての役目を果たし、その存在を英霊の座からすら消し去った。

それによって、ソロモンの功績の一部、魔術王の死体に巣くっていた７２の魔神（ゲーティア）という術式は完全に崩壊。それこそ三流魔術師である人類最後のマスターでさえも肉弾戦で競（せ）り勝てるまでにその能力を貶められ――結果は知っての通りである。

すなわち、これは『必要な行程』だったのだ。人類史が幾つかの大

きなターニングポイントによって支えられ、その点を容易に変更することが叶わないように。『人理修復』という　大きな命題について、ロマニ・アーキマンという人間の消滅というのは必須のことだったのだろう。

――だが、先も言ったように、残された者達がそれを受け入れられるかはまた別の話で。

人理を修復した後、亜種特異点やセラフィックスなどで、ゲーティアとはまた違った人類危機に相対しながら、カルデアのメンバーはやはり、Ｄｒ．ロマンを忘れることなど出来なかった。

救われない話だ。ロマン自身が望み続けた人間性を手に入れ、自身の痕跡全ての破棄を納得して消えていったとしても。人間になりたいという願いが叶えられ、彼自身は間違いなく救われたとしても。誰もが、もっと一緒に居たかったと、そう思う事を止められはしなかったのだから。

ロマンとて、あの場でその手以外に何か方法があったのなら、あの宝具を使おうとはしなかっただろう。残された皆が訣別を望んでいなかったように、ロマンにもそんな願望は無かったからだ。

けれど、結局の所――そうするしかなかった。ゲーティアはそれほどに強大な敵であり、それほどの難敵であったのだ。

後悔とは、ロマニ・アーキマンだけではない。

爆発で命を落としたカルデアの職員から始まり、カルデアスに分解されたオルガマリー、竜に食われたフランス国民、戦争の果てに死んだローマ人、航海の荒波に飲まれた海賊たち、酸の霧に溶かされたロンドン市民、槍に貫かれたアメリカ人、切り殺されたエルサレムの人々、神話の闘争の前に残酷に殺されたバビロニアの人々。挙げれば切りがない。

どの時代どの世界にもよらず、人利修復を成した救世主たちにとって、聖杯探索（グランド・オーダー）とはそうした後悔の積み重ねであった。

成し遂げ、取り戻したもの――そうした尊い存在をいくつも積み上

げたことが確かでも、ふと気づいてみれば手元から転がり落ちてしまって、見えなくなったものがある。
それをどれだけ後悔し、どれだけ覚えていたかに違いはあれど、救世主たちの物語は決して大団円でなかったことだけは確かだった。
失われたものは二度と取り戻せない。後悔した過去は、後悔してからでは遅くて、手が届かない所に離れていってしまう。
けれど、まだ間に合う。
他の世界、他の救世主が辿った物語の結末がどうだったとしても、この藤丸立香の物語はまだ紡がれている途中なのだから。ロマニ・アーキマンがその全てを投げ出し、世界を救う礎となるのは――物語が結ばれるのは、まだほんの少し後の話だ。
失いたくない。救いたい。その思いを誰より強く持った立香という少女は、何も切り捨てることが出来なかった愚かな救世主だったのかもしれない。事ここに至っても、今までに救えなかった誰かの顔を忘れられず、引きずり続けてきた。その精神がボロボロに擦りきれる程に。
藤丸立香はそういった意味では、とても弱い存在なのかもしれない。けれど、エデンのアサシンが言ったように、だからこそ起きた奇跡があった。
全てを救えるかもしれない可能性を引き当てた。誰もが笑顔で終われるハッピーエンドへの切符を掴んだ。それはきっと、取り落としそうになりながらも彼女が一生懸命に背負い続けた『失いたくない』という想いの結晶だ。彼女だからこその奇跡だった。
原初の人類、人類全ての父／母は彼女だったからこそ手を貸し、彼女と出会ったからこそ心から笑うのだ。

最古の人類は覚悟を決めた。自分の奥の奥、『彼』という人格の根底、いつの日か切り捨ててしまった願望を再び拾い上げた。
だからこそ、誰もが笑顔で終えられるハッピーエンドは此処に成ったのだ。
――例え、この神殿が『彼』と立香の別れの場となるとしても。彼

らは、最後に笑って別れる事が出来るのだから。

◆

ようやく、『僕』という人格を確かに獲得できたと思う。記憶は相変わらず朧気（おぼろげ）だけれど、それでも思い出したことがある。

ある一人の少年の、孤独な人生だ。

何もかもを成しておきながら、それでもただ一つ、誰かと出会うことだけができなかった、哀れな男の生涯だ。

「後悔か、あるいは感傷か。なんにせよ、やりたいことは決まったね」

願いはずっと一つだった。それだけを想い、頼りにしながら、興味も無い人類史（ものがたり）を、ずっと見続けてきた――つもりだった。

「勘違いしていたんだ、ずっと。僕がやりたかったことを、願ったことを、望んだことを、他ならぬ僕自身が履き違えていた」

願いはずっと一つだった。それに間違いはない。ただ、永年抱き続けた願いは、歪みつづけて原型をとどめていなかったのだと気づいた。純粋に抱いたはずの願望の成れの果ては、願いというより、醜い妄執のようだった。

「でも、きっと、もうわかった」

歪み続けた願望は、いまその原典を取り戻そうとしている。

弱いくせに頑張り続ける自分のマスター（藤丸立香）に。怖いくせに頑張り続ける彼女（マシュ・キリエライト）の後輩に。辛いくせに頑張り続けるカルデア（ロマニ・アーキマン）のドクターに。

あの時の自分の欠片を見たような気がする。

生前（あのとき）の自分は強がっていたのだ。弱いくせに、怖いくせに、辛いくせに――寂しいくせに、そんな自分を認めたくなくて、虚勢をはりつづけた。一人で生きていけるのだと、その下らない意地の証明に躍起になって、本当に望んだものを追いかけることが出来なかったのだ。

次があるならば、そんな意地は捨て去って、やりたいようにやるのだと決めていた筈だったのに、どうして忘れてしまっていたのだろうか。

長い時のせいか、あるいは未だに意地を張っているのか――あるい

は、下らないものにこだわっていたのか。なんにせよ思い出したのならば、正しい道を行くまでだ。
見たいものがある。ただそれだけの願いだ。追いかけ続けたのは、死ぬ間際に見た一枚絵。自分の気まぐれが起こしたものの終着点だった。
だからこそ、あの時と同じように自分は――誰よりも弱々しく強がる彼女を、見捨てられなかったのだろう。
「……簡単なことだったのにね」
色々と御託を並べて、心のうちを雁字搦めにして、奥底へと詰め込んだ。けれど、そうまでしても言い訳できないほどに、『僕』は酷くバカで、自己中心的で、身勝手な奴だった。理想の親とは限りなくかけ離れた、醜い欲望にまみれている、一人の人間だった。
「でも、それが『僕』だから」
例え、誰かに迷惑をかけることになっても。誰かの想いを無駄にしてしまうとしても。それでも叶えたいものがある。
だからこそ、『僕』は誓約を破り捨てると決めたのだ。それがわがままであっても、求められている役割とは違うとしても、それがいずれ、人類史の危機を招くとしても――それは、君たち自身が越えるべき壁なのだと信じていたいから。

◆

「――ちぃっ！、うぜぇったらありゃしねぇ！」
モードレッドの舌打ちと共に赤雷が迸り、地面をえぐっていく。第Ⅳの座では戦闘が激化していた。
魔神柱から大量に発生しているのは、ホムンクルスと自動人形。数の利は戦闘開始時から向こうにあったのは確かだが、ここまで差がつけば到底無視できるような戦力差ではない。
対城宝具・対界宝具を持つ面々の必死の制圧があればこそギリギリ拮抗を保っている状態だ。アダムの無限に等しい魔力ありきの戦術。絶対的不利に陥るようなことはないが、ただひたすらにウザいという

のが頂けない。
精神的な疲弊は、いずれ大きな隙を生む。勝つのではなく耐えるのが仕事のいま、それは望ましくない状況だ。まだ藤丸立香が到着していないというのも痛かった。
神殿の構造上、第Ｉから順番に座を巡らなければ魔術王の玉座にはたどり着けない。まだここを彼女が通過していないということは、つまり、ここより前の座で立ち往生しているということ。
「――ったく、さっさと来いっての。いつまで狩り続けりゃあいいんだ」
ピッっと、剣を左右に振って血を払う。途切れることのない大軍を駆除し続けるストレスと折角の一張羅がどろどろの血まみれという事実に、今のモードレッドは猛烈に不機嫌だった。
不機嫌故に、戦闘の効率が良くなっているのはご愛嬌だが。
「こらえ性の無い方ですねぇ。まぁ？　私の第七感からすれば、もうすぐ到着みたいですし？　それまで斬って斬って斬りまくってくださいなっと」
「――そうかよ！　なら、もういっちょぶちかますかぁ！」
先ほどまでの渋面はどこへやら、そう言って嬉々として敵中ど真ん中に突っ込んでいくモードレッド。単純というか気分屋というか、まるで野良猫のようだ。玉藻の前は心底あきれたと深いため息をついた。
「……それにしても、私は対象外なんですねぇ。あぁヤダヤダ、そういうのって差別なんじゃないかと思いますケド。酷いことで」
体に付いたいくつもの負傷跡を見ながら、玉藻はまたため息を一つ。少し前からカルデア側の戦力に起こっている『傷を負わない現象』だが、自分には効果がないらしく、玉藻はちょこっとだけ不機嫌だった。
なぜ自分だけ――とは言っても玉藻が知らないだけで効果の無い者はほかにもいるが――仲間外れなのかと。十中八九この現象の原因はアダムだと確信している玉藻は、ここまで彼がたどり着いたら一言文句を言おうと決めていた。

――とはいえ、そう考えていたのは彼が到着するまでの話で。
「えっ――」
しばらく見ない間にどこか逞しくなった立香に感嘆するのも束の間、その立香に率いられる彼の姿を見た瞬間、玉藻はその考えを翻さざるを得なかった。

◆

さて、まずは彼の持つスキル、『母なる庇護』について語ろうか。『アダム』について、このスキル無しで語ることは許されないだろうから。『アダム』について――とは言うが、実際のところこのスキルを持つのはスキルの名前からもわかる通り『イヴ』の方だ。人類すべての母たる彼女の持つ子供たちへの慈愛の象徴、あるいは子供たちを傷つけさせないという決意の表れだからね。
効果はキミも知る通り、『人間に対するダメージの無効化』。彼は――いや、ここではあえて彼女と呼ぼうか。彼女は驚くことに先の決戦においてカルデア側の戦力のほとんど、厳密には『人間』すべてを魔神柱の攻撃から守り、傷一つ付けさせなかった。
この絶対防御は――これまたまるで魔法のように――時間も、空間も、距離も、どれにも関係せずに行われた。詳しいことはこのボクにもわからないけれど、恐らくは純粋な『神』『怪物』などを除くすべてに適用されていた――漠然とした説明で申し訳ないけどね。正確にはわからないのだから仕方がない。
まあ、とにかくだ。正直『母なる庇護』の対象がなんであろうといいんだ。大切なのはその代償。この魔法じみた現象のために――ボク達のために、彼女がなにを捧げたのかという部分だよ。
……犠牲無しの奇跡はありえない。奇跡と呼ばれる現象には、その輝かしさと反比例するようにして暗い現実が付きまとうことが常だ。なにせ、奇跡とは絶望的な状況に差し出された光明を指すのだから。
まあ、つまりはそういうこと。キミも知る通りに、彼女のスキル（奇跡）にも同じように犠牲にされたものがあった。

彼女のスキルは――『ダメージの無効化』のようにみえるそれは実際はそんな都合のいいものなんかじゃなかった。それにマスターは最後まで気付かなかった――あるいは『彼』が気付かせなかったのかもね。

『庇護』とわざわざ銘打ってあるんだ。『守護』でもない『防御』でもない、『庇護』と。名前の通り、そのスキルは庇い護るものでしかない。

人類全ての母親は、ボク達をきつくきつく抱きしめて護っていたんだ。振り下ろされる凶刃がボク達に届くことのないように――その傷だらけの背中を、ボク達に見せないように。

◆

「なんです、あれ」

玉藻はその姿に息を飲んだ。柄にもなく恐怖すら覚えた。立香やエミヤたちが普段通りであることがさらにそれを助長した。自身のマスターが、笑顔で形容しがたい赤黒のナニカと共に歩いてくる。言葉を楽しそうに交わしながらこちらへ向かう救世主の集団は、玉藻から見れば『狂った』という形容詞だけでは表せないほどに異常だ。

かろうじて人間だろうとわかる見た目。血だらけ、と表現するだけではあまりにも足りない。斬られ、潰され、抉られ――そうした多種の傷跡が、目を背けたくなるほどに刻まれた体。まるでこの世全ての傷を一手に引き受けたかのようだ。

指などの体の末端は、一切の原型をとどめていない。カルデアでの威厳たっぷりな様子から雰囲気が変わっていることも相まって、玉藻はその肉塊がアダムと判断するまでに相当の時間を要した。

あまりにも衝撃的な光景。精神的なショックで、一瞬、魔神柱にかけ続けていた拘束の呪術が思わず緩んでしまう。戦場が大きく傾いた。魔神柱が手に入れた自由は刹那の間であったが、その短い時間で雑兵を大量に再生成。もともと大軍だったあちらがわの勢力は、もはや一騎当千どころでは間に合わないほどにまで膨れ上がった。

「うぉっ……おいおい、どうしたフォックス。らしくねぇ」

いきなり敵が増殖した光景を見て、鉞(まさかり)を担いだ黄金の狂戦士、坂田金時はそう玉藻に問いかけた。
「坂田さん、あれ」
「あん？」
震える指で立香たちの方を指し示す。あんなもの、あっていいような光景ではない。それもよりによってアダムを慕う立香のそばで。その立香が普段通りの様子であるのもまた狂気を匂わせた。
「お、大将たちじゃねえか！　やっとかよ、待ちくたびれたぜ！」
「――っ！」
金時の様子に、玉藻の背筋に悪寒がはしる。そんな馬鹿な。あんな光景を見て、狂戦士というクラスにはもったいないほどの正義漢の金時が、何も疑問に思わないなんて。
「なんだ、しくじったのは大将たちがきて安心しちまったせいか？　あんたもそういうとこあんだな」
「……ええ、私も初めて気づきました。私にもそんな可愛げがあったんですねぇ」
金時はそういうふうに勘違いしたらしい。適当に返すと、金時は「じゃあ、話してきな。尻ぬぐいはしとくぜフォックス」と言うが早いか、はりきって雑兵を蹂躙しにいってしまった。
「……」
なんだこの状況は。ホムンクルスの肉が避ける音と、人形たちの駆動音で支配された戦場の只中で、玉藻は静かに考える。立香含め彼らが幻を見ているのだろうか。いや、それとも――
「狐につままれたのは私のほう、なんて。まさか。笑えません」
なんにせよ、この異様な現象を見過ごすわけにはいかない。なにせ、化かすことに関しては一家言あるこの玉藻の前にさえどうやられたかも全くわからない幻術。きっと、ろくなものではないだろうから。
有体に言えば、嫌な予感がする。
「一言文句――なんて悠長なことといってる場合ではなさそうですね」
玉藻の前は、そう呟いて肉塊(アダム)へと歩み寄った。

◆

「どう、立香。まだいけそうかい？」
「うん、大丈夫。まだまだいける」
「先輩、無理はなさらず。まだ時間はあるのですから、きついときは言ってくださいね」
第Ⅲの座を抜けてからずっとこの調子で心配ばかりされている気がする。溺れかけ打自分が悪いのだろうけれど、二人とも心配性すぎやしないかと立香は内心苦笑いした。
もうすぐ第Ⅳの座。第Ⅲの座は『大海原』だったが、次は果たしてどのような戦場なのだろう。なんにせよ、玉座に近づくにつれ危険度は増してくるだろうというのがブリーフィングでも言われていたから、気をさらに引き締めなければならない。
先ほども痛感したように、サーヴァントたちにとっては些細な環境変化であっても、自分にとって命に関わることは多い。アダムも『無効化できるのはあくまで一部の害だけだ』と目覚めた立香に念押ししていた。溺死や病死、あるいは呪いによる死など、無効化できないものはいくつかあるという
せめてその例外は自分自身でカバーするべきだろう。外傷を負わないだけましなのだ。これ以上頼るわけにもいかないのだし。マシュのおかげで『毒』の類も効かないのだから、甘えすぎというか、まるで箱入り娘のようだ。徹底的に危ないものから遠ざけられている
『マスター、報告する』
『オッケー、エミヤ。どうだった』
エミヤからの念話だ。立香たちは、先ほどの座の出来事から反省して、まず戦場の把握を突入前に済ませることにしていた。『千里眼』『単独行動』持ちのエミヤを先行させ、戦場を偵察。立香に大きな危険があるようならば対策をたてて挑む。慎重すぎるように思えるが、彼女が死ねば終わりなのだから当たり前の措置ともいえる。
『第Ⅳは若干ではあるが優勢。だが、大混戦極まっているから、通過に

は十分気をつけろ』
『そんなにひどいの？』
『ああ。ホムンクルスや人形が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）している。戦闘というよりは戦争だ。サーヴァントである私たちはともかくとして、マスターは歩いていては軍勢に飲み込まれて潰されるぞ。アダムの無効化があるにしても、進行は鈍くなってしまう』
『どうしようか』
『そうだな――槍のアーサー王がいたから、マスターは彼女の馬に同乗させてもらおうか。かのドゥン・スタリオンなら十分突破できるだろう』
『そうだね、了解。じゃあ、ランサーアルトリアに協力を頼んでおいて』
『承知した』
　そうしてしばらくすれば、エミヤが立香の横に現れる。
「伝えてきた。この先で合流しよう、だそうだ」
「わかった、いこうか」
　幸い、黒ランサーアルトリアは快く承諾してくれたので、立香たちは第Ⅳの座に進むことにした。

「うーわー……」
　予想以上に混沌とした戦場模様に、立香はため息をはいた。
「いくら何でも、これは……アメリカでの戦いを思い出しますね、先輩」
「聞いた話では、第Ⅳはロンドンを基礎とした特異点だったはずだけど。一番小範囲な特異点を模す座がこの有様なんてね。さすがに予想外だ」
　マシュとアダムは驚きをあらわにしてそう言った。
「来ましたね」
　蹄（ひづめ）のなる音が近づくとともに、そう女性の声が聞こえる。立香たちがそちらをむけば、黒馬を駆る聖槍の騎士王――アルトリア・ペンド

ラゴンがいた。
「お久しぶりです」
「ええ、壮健そうでなによりです。ほら、さっさと乗りなさい。のんびりしている暇はありませんよ」
「了解です」
手を差し伸べるアルトリア。立香はその手を取って、ドゥン・スタリオンにまたがった。
「むぅ……」
「……どうした、セイバー」
「いえ、なんでもありません」
「だが……」
「な、ん、で、も、あ、り、ま、せ、ん！　アーチャーは黙っていてください！」
「……了解した」
姿が違う自分という存在に、やはりなにか複雑な思いがあるのか、セイバーの方のアルトリアはエミヤとそんなやり取りをしていた。他のメンバーはそんな二人を苦笑しながら見ていた。
「なにをやっているのですか彼奴（わたし）は。……まあいいでしょう、そら、いきますよ」
呆れたといった感じで大きくため息をつきながら、槍のアルトリアは脚で馬の腹を叩き出発を促した。ゆっくりとドゥン・スタリオンが歩み始める。
「馬を先頭に隊列を組んで前進、ってことでいいんだよな」
「うん。クーフーリンは殿（しんがり）でお願い」
「いいぜ、まかせな」
ゆっくりと歩みながら隊列を決める。それぞれに最適なポジションを割り当てていく。的確な配置は立香の一年分の経験の賜物だった。
「アルトリアはここ。マシュはそっちね。アダムは――」
「――ちょっと、マスター。よろしいでしょうか」
そうして最後、アダムの配置を決め終わるといったときに、神妙な

声が横から挟まれる。和装の巫女、玉藻の前だった。
「あ、玉藻。会えてよかった。どうしたの？」
「ええ、会えてよございました――ではなく。そこの御人、ちょっと貸していただけますか？」
そう言いながら、玉藻はアダムのほうを指さした。見たこともない真剣な表情をしている。それどころか、玉藻はなにか――アダムに対して、敵意のようなものさえ感じているようにも見える。嫌な予感がした。
「え、っと。それはちょっと――」
無理かな。と言おうとしたところで。
「わかった。立香、すまないけどちょっと彼女と話してくるよ」
そう、指名された本人が言った。
「ちょっ、アダム？」
「なに、すぐに追いつくよ。先に行くといい。『ダメージ無効化』も、距離に関係なく働くから心配ないさ」
淡々と言うアダムに、立香は言い知れない不安を覚えた。このまま分かれてしまえば、もう二度と彼に会えなくなるような気がした。
「大丈夫。立香、信じてくれ。それに、必要なことなんだ」
不安に顔をゆがめる立香。アダムはその白い掌でそんな立香の頭をやさしくなでた。
「――わかった。すぐ追いついて、絶対だよ。玉藻も、なんか妙な事しちゃだめだからね！」
「……わかってますとも」
立香はそんなアダムの様子に引き留めるのをあきらめた。めったなことがないようにと、立香は玉藻に釘を刺した。そんな立香の言葉に、玉藻は苦笑しながらもうなづいた。
「では、そろそろ行くぞ。もう時間もない、早くこんなところから抜けなければ」
エミヤが出発を促す。立香は小さく首肯すると、ランサー・アルトリアの腰に手をまわしてしっかりとつかまった。
「じゃあね、アダム。またあとで」

「うん、またあとで」
アルトリアがその腹を強く蹴ると同時に、ドゥン・スタリオンが戦場を疾走する。ギュン、と一気に加速し、アダムたちとの距離が一瞬で離れていく。
立香はアダムと玉藻の二人の姿を眺め続けた。やがてホムンクルスと自動人形（オートマタ）の波にのまれて二人が見えなくなれば、立香は前に向き直り、まっすぐに空に浮かぶ玉座を見上げた。
少しづつ玉座との距離は縮まっている。決戦の時も、刻一刻と近づいてきていた。

◆

ところ変わって、ここはカルデア内レイシフトルーム。
管制室内はひどくあわただしい状況だった。今までにない規模のレイシフト。立香とマシュを意味消失させないための存在証明は、困難を極めた。
カルデア管制メンバー総動員で必死にことに当たっている。ただでさえ不足している人員。それを各々が無理矢理にやりくりして今の状況を維持している。戦えない自分たちにはこれだけしかできないからと、そう己を奮い立たせて。
「立香ちゃんが第Ⅳの座を突破しました！」
女性の職員がそう大きな声で叫ぶ。管制室内に喜びの空気が広がる。第Ⅲの座で立香の存在が一時期観測できなくなっていた時は暗い雰囲気が漂ったものだったが、今はそれも払拭され、持ち直してきていた。
「よし、そのまま観測を続けてくれ！　存在証明を途切れさせるな！」
ダヴィンチがそう指示する。了解！、と管制室内のあちらこちらから声が上がった。
「……おかしいぞ」
「うん？　どうしたんだ、ロマニ。そりゃあ、油断はできないけれど今のところ順調だろう」

「ボクもそう思いたい。けれど、なにか嫌な予感するんだ」
　ロマンは漠然とした不安を覚えていた。なんの根拠もありはしない。いまのところ順調に進んでいるのは間違いない。けれど、なにか重大なことを見落としている気がした。
「――！、存在証明途切れました！　観測が阻害されています！」
「なにぃ!?、まてすぐにそちらへむかう」
　管制室内、男性の職員が悲鳴に近い声を上げる。ダヴィンチはその言葉に慌ててその職員の方へと向かう。ロマンもはじかれたように立ち上がった、その時。
『ロマニ・アーキマン。私だ、マーリンだ。今、第Ⅶの座からそちらに話しかけている』
　目の前に置かれた小さなモニターに突然マーリンの顔が映る。いつもの軽薄そうな笑みとは違って、神妙な面持ちだった。どうやって通信をつないだのかは気になるところだが、とにかく今はそんな場合ではなかった。
「なんだマーリン。悪いけどキミの話を聞いている暇はないんだ。立香ちゃんの存在証明が途切れたんだ！」
『それなら問題ない。存在証明は実際は途切れてなんかいない。一時的に途切れたように見せかけただけだ』
「はあ!?　幻術をつかったってことか!?　なんだってそんなこと！」
『キミと話をするためだ、ロマニ・アーキマン――ああいや、魔術王ソロモンとしてのキミとね。他の職員に聞かれたらキミも都合が悪いだろうから、わざとここから遠ざけたんだ』
「――なんだって」
　マーリンのことだから、自分の正体に気づいていることはこの際どうでもいい。予想の範囲だ。問題は、そこまでして自分に通信をよこした理由だ。
『ここにはキングハサンくんもいる。言ってる意味がわかるかい？』
「……冠位のサーヴァントがそろって、いったいなにを」
　キングハサンにマーリン。そして、魔術王ソロモン。この通信に関わっているのは、どれも冠位（グランド）にある――あるいはあった――者ばか

り。
　先ほど感じていた嫌な予感が再びこみあげてくる。
『キミも感じているはずだ。その身はただの人間になったとしても、体に刻まれた使命は衰えてはいない』
「まさか、そんなばかな。おいおい、冗談だろ！」
　最悪の可能性に思い当たる。自然とロマンの口から否定の言葉が漏れ出てきた。冠位のサーヴァント。そして自分が感じている嫌な予感。この身に帯びた使命。そのキーワードが示すのは一つだけ。
『気を引き締めろ魔術王ソロモン。新しい獣のにおいがするぞ』
　マーリンのそんな言葉が、脳みそにやけに大きく響いた。